

---

# バカとテストと虚弱体質～Fクラスで生きぬく方法～

へたれな道化師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと虚弱体質〜Fクラスで生きぬく方法〜

### 【Nコード】

N9105R

### 【作者名】

ヘタレな道化師

### 【あらすじ】

生まれてすぐに病気にかかり、命は助かったがそれ以来、スラムも真つ青な虚弱体質になってしまった主人公「黒峰羊一」はたして、彼はFクラスでどうやって生き残るのか…

これは、虚弱体質の少年と愉快的仲間達の物語…

よろしく願います。

## プロローグ（前書き）

初めてです。駄文ですが、よろしかったらどうぞ。

## プロローグ

春：一年の始まりの季節である

ここ、文月学園も桜の花が咲き花弁が舞い散っている。

そんな文月学園の校門前に男が立っていた。

男は、西村教諭。生徒からは、「鉄人」と呼ばれ恐れられている、生活指導担当の先生である

「ハア……」

鉄人は一つ、ため息をつき言う

「今日は、良い天気だ……しかも新学期。これほど清々しい朝もそうは無いだろう……」

鉄人は閉じていた目を開き、

目の前の光景を見て、また一つため息をついた。

「そんな朝に……何故、お前は」

「血の池に沈む死体になっているんだ……黒峰……」

これは、虚弱体質の少年と愉快な仲間たちの物語…

## プロローグ（後書き）

小説って難しい…

頑張っていきたいのでよろしくお願いします。

## 第一問（前書き）

続きです。

コメント、ありがとうございます。頑張っています。

## 第一問

「いやあ、新学期そうそう死にかけましたねえ」

「まったく…騒ぎにならなかったから良かったもの…」

鉄人が渋い顔をしてため息をつく。

その前に、一人の少年がいた。

少年の名前は『黒峰羊一』

中性的な顔をしていて、色白の少年だ。

羊一は笑顔で鉄人に話しかける

「どーしたんすか？誰かに顔でも殴られたんですか？」

「殴られるか！」

「えっ…それじゃどうしてそんな人間ばなれした顔を!？」

「人の顔を見てその一言か！」

鉄人は、また深いため息をつき封筒を差し出す。

「ほら、お前のだ」

「あっ、どーも」



羊一は封筒を受け取って中身を確認する。

『黒峰羊一……Fクラス』

「あらま……」

「お前は、テストの点数だけならAクラス行きも行きありえたんだがな」

羊一はこれでなかなか頭が良い

そんな彼が何故、最低クラス行きになっているかというところ……

「まあ、テスト中にぶっ倒れましたからねえ」

そう、彼は生まれてすぐに病気にかかりなんとか命は助かったがそれ以来、かなりの虚弱体質になってしまったのだ。

そのためにテスト中、突然吐血そのまま病院に運び込まれた。

だから彼は0点扱いとなってしまうていた。

「まあ、あんま気にしてないっすよ……どうせ明久達も同じでしょう？」

「そうだ…一年の時の問題児グループは全部だ」

「なら無問題つす。それじゃ〜」

そう言っつて鉄人に背を向け、校舎に歩いていこうとすると

「ああ、黒峰。まだお前に渡すものがあつた」

そう言っつて鉄人はもうひとつ封筒を羊一に渡した。

「何すか？これ？」

羊一は封筒を受け取り開けようとするが、今度はなかなか開けられない。

「黒峰、実はな」

「はい、なんですか？」

封筒は頑丈にのりづけされている。

「俺はお前を去年一年見て、

『もしかして、黒峰はかなりの問題児なんじゃないか？』なんて疑

いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね  
俺がやったのはせいぜい、先生達の車のガソリンを抜いて代わりに  
タバスコ入れといたぐらいですから」

「ああ。あれで大半の車が使いものにならなくなった。  
この事件を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「それは良かった。」

なかなか開かないため仕方なく上の部分を破き、中を覗くと、そこ  
には一枚の紙が入っていた

「喜べ黒峰。お前への疑いはなくなった」

折り置まれた紙を開いて見る。

『黒峰羊…上記の者を文月学園指定《観察処分者》として、認定  
する』

「お前はかなりの問題児だ」

## 第一問（後書き）

ありがとうございました。

また、よかったら続きを読んでください。

## 主人公設定（前書き）

遅れましたが、主人公の設定です。

## 主人公設定

くろみね よういち  
黒峰羊一

男

生まれてすぐに病気になり、そのためスラムも真つ青の虚弱体質になってしまった。

しかし本人は、あまり気にしていない。

頭はAクラス並。

しかし一年の頃に明久達と様々な事件を起こし、観察処分者になる。趣味は、色白と中性的な顔を利用した変装（女装含む）

演技を学ぶために小学校の頃から木下家に入りにしていたため秀吉達とは幼なじみ。

召喚獣はファンタジー風の学者みtainな格好

武器 本（六法全書から工口本まで）

腕輪能力

任意の相手の一つ教科の点数を回復する。  
ただし、その分自分の点数が減る。

## 主人公設定（後書き）

こんな感じですよ。

よろしくお願ひします。

**第二問（前書き）**

続きです。



## 第二問

「チクシヨウ…まだ身体が痛てえ…」

羊一が廊下を歩いている。

あの後、鉄人に飛びかかったところまでは覚えているがそこからぶつぷりと記憶が無い。

気がつくと、保健室の前どころがされていた。

どうやら鉄人に返り討ちにあつたようだ。

「虚弱体質の生徒を返り討ちにするなんて…アイツ、人間じゃねえ」

羊一は自分のことを棚に上げてつぶやく。

「まあ、血まみれの制服を着替えられたから良かったけど……おっ？ここか…」

つぶやいている内に、教室の前に着いていた。

「・・・でっでは、一年間よろしくお願いしますっ！」

中からは声が聞こえる。

どうやら、自己紹介が始まっているらしい。

「ええと・・・黒峰君が、いませんね。今日は欠席でしょうか・・・」

どうやら完全に、遅刻である。

「まずいな・・・さっさと入ろう」

ドアに手をかけ、開ける

「遅れましたっす」

明久 side

.....

「ええと・・・黒峰君が、いませんね。今日は欠席でしょうか」

先生が確認する。

「雄二、どうやら羊一も同じクラスみたいだね」

少年、吉井明久は友人の坂本雄二に話しかける。

「ああ、そのようだな。アイツもテスト中ぶっ倒れたらしいからな  
…」

「そう言えば、そうだったね」そんな会話をしていると、

「あの…黒峰君って？」

二人の間の席から姫路瑞希が話に加わる。

「うん、僕らの元クラスメイトなんだけど…」明久が説明しようとする、

「遅れましたっす」

「噂をすれば、来たみたいだ」

そう言って教室の入口をみる…

女子の制服を着た元クラスメイトがいた。

『変態だぁー！！！！！』

二人分の悲鳴が教室に響く。

「おっ！明久に雄二じゃん。おいっす」

「うわぁ、変態が僕らに親しげに話しかけてたよ!？」

「こ、こっち来るな！変態がつつる!」

「なんだよ、一年の時からクラスメイトだろ」

『あぁっ！！！いますぐ一年の頃の記憶を抹消して他人のふりがしたいっ！！！』

二人が騒いでいると

「あの…吉井君。この女の子、知り合いなんですか？」

「ち、違つよっ！姫路さん！こんな変態、僕の知り合いじゃ…ていうか女の子じゃなく…」

必死に説明しようとする明久

「ヒドイなあ…俺とお前の仲じゃないか」

「っ！！吉井君！どついう事ですか！？」

「うわあ！姫路さんの誤解がさらに拡大しているっ！」

「誤解じゃないよなあ、雄二」

「こつちきたあ！？」

…しばらくこの騒ぎは続いた。

………

「ハア…本当に男の子なんですか…」

明久の必死の説明でなんとか事態が終息した。

今は先生が席を外しているため皆、思い思いのことをしてすごしている。

「そだよ。予備の制服がこれしか無いらしいのだよ」

羊一は今、瑞希と話している。

明久と雄二の二人は廊下に出て何か話をしている。

と、羊一と瑞希が話している席に三人の人が、近づいてきた。

「まったく…新学期そうそう何やってるのよ、アンタ達は…」

そう言うのは島田美波。帰国子女の少女だ。

「まあ、良いではないか。羊一、今年もよろしく頼むぞ」

今度は美少ジジイではなく、少年の木下秀吉だ。羊一も中性的な顔をしているが、彼ほどではない。

「…同じく」

最後に話しかけてきたのは土屋康太。周りからは『ムッツリーニ』と呼ばれている少年だ。

この三人は一年の時の羊一達のクラスメイトだ。

「ああ、こちらこそヨロシク」「姫路もよろしくじゃ」

「あつハイ、よろしくお願いします」

とりあえず、挨拶をすまし五人で話を続ける。

「しっかし、ヒドイ教室だな」

「そうねえ…ずっといたら病気になるそう…姫路さん、さっき咳してたけど大丈夫？」

「ハイ、大丈夫です」

そう言う瑞希だが、まだ少しつらそうだ。

「たしかに…このままでは勉強どころではないぞ」

「…なんとかしないとまずい」

「ああ、それなら多分、大丈夫だと思うぜ？」

羊一がそう言うと同時に、雄二達が教室に入ってきた。

「…何か、思いついたみたいだな」

「ああ」

雄二はそう言うのと教室の前に歩いていき壇上にかかる。

「みんな、聞いてくれ！」

雄二の声に、クラスメイト達目が雄二に集まる。

全員が自分を見ていることを確認し、雄二は大きな声で言った

「Fクラスは、Aクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」



## 第二問（後書き）

ありがとうございました。

### 第三問（前書き）

第三話です。

主人公の異名は最初決まっていなかったもので設定に載せていませんでした。すみません。後で追加しておきたいと思っています。

### 第三問

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かに試験召喚戦争はテストの点で戦力が決定するため、誰から見  
て勝てるようには思えない

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

しかし、雄二はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。

しかし、

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな雄二の言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。

「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から雄二が言う。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！」（ブンブン）

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。

康太が顔についた畳の跡を隠しながら壇上にくると雄二が言う

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニ。

その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと…？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか…？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ…』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ…』

たとえどんな状況でも、自分の下心は隠し続ける。  
異名は伊達ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。ウチの主戦力だ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。期待している」

たしかに、彼女は体調不良でさえなかったらAクラス行きは確定だっただろう成績だ。

『そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

教室中から期待の声があがる。(一部、熱烈ラブコールもあるが)

「木下秀吉だつている」

彼は、学力よりも他の事で有名だったりする。演劇部のホープだとか、双子の姉のこととか、ものすごい問題児と幼なじみだとか。

『おお…!』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか?』

『じゃあ、実はAクラスレベルの実力なのか』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ち、クラスの士気が上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

……シン……

そして一気に下がる。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」たまらず明久が叫ぶ。

実際にさっきまでの士気高揚が嘘のように士気が下がっている

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

その言葉にざわめきがおきる。

「皆知っていると思うが、

《観察処分者》はバカの代名詞で、『そんな致命的なこと言つな、バカ雄二！』具体的には教師の雑用をするために物に触ることができ

きる。しかし、召喚獣の負担、例えばダメージなんかは召喚者にもフィードバックされる仕様だ」

雄二が説明する。

『おいおい。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

クラスからそんな声がでる。



「いや、それは違つぞ」

雄二が、その言葉を否定する

「雄二、僕のことをかばつて」

「いや、お前は雑魚だ」

「ヒドイ!?!」

「俺が言いたいのは、『観察処分者は一人じゃない』ってことだ…  
なあ、羊一?」

雄二が意地の悪い笑みを羊一に向ける。

「な、何故お前がそのことを!?!」

「当然だろう。俺はこのクラスの『代表』だぞ」

「ぐっ! テメエ、さっきのこと根に持ってやがんな!」

「さあ、何のことかな?」

「おのれえ、雄二い」

そんな会話をしていると、

『あれ？でも、たしか黒峰って成績良くなかったっけ？』

そんな疑問があがる。

「ああ、コイツの成績はAクラス並だ」

『なら、何で観察処分者に？』

「その秘密は、コイツの異名にある」

雄二は、クラスを見回して言う

「コイツは『クロヒツジ』だ」

その言葉にクラスは一気に騒がしくなる。

『な、何だって！？』

『クロヒツジってあの!?!』

『どこにでも現れ、その人の知られたくない秘密を手に入れ、いつの間にか消えているという』

『ああ、その情報を使って教師すら動かすらしい…』

『目撃した姿は女だったり男だったり毎回姿が違うらしいぜ』

『そうだ、その存在は《鉄人、人外説》、《霧島翔子、百合説》と同じく文月学園七不思議に数えられている…』

「ヒドイ言われようだな…まあ、ほとんど本当だけど」

羊一が皆の反応を見てつぶやく

「まあ、そういうわけだ。

コイツは生来の虚弱体質で戦闘じゃあまり役にはたたんが、『黙れ、アホ雄二!』悪だくみと情報網の広さは右に出る者はいない」

その言葉にまたクラスが活気づく。

「まず手初めにDクラスを征服しようと思う!全員筆を執れ!Aクラスからシステムデスクを奪うぞ!」

『うおおーっ!?!』

こうしてFクラスの試験召喚戦争が、決定した。

.....

少し時間が経って、ここ屋上に明久、雄二、瑞希、美波、秀吉、ムツリーニ、羊一が集まっている。

ここで昼飯がてら今後の作戦を説明するためだ。

「明久、宣戦布告はしてきたか？」

「…危うく殺されるとこだったけどね。一応、今日の午後に関戦予定だよ」

明久がどこか遠くを見ながら言う。

「まあ、作戦は飯を食いながら話そう…明久、今日ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そういうならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

「えっ、吉井君はお昼食べないんですか？」  
明久の言葉に姫路が驚いて言う

「あ、いや、一応食べてるよ」

「明久、塩と水ってというのは『食べる』とは言わないぜ？」

相変わらず女子用制服の羊一が言う。

「正確には『なめる』、もしくは『飲む』じゃな」

「…不憫」

「ああっ！皆の目が妙に優しいのが逆に辛いっ！」

明久が皆の優しい視線に身もだえていると、

「…………あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

『えっ？』

突然の瑞希の言葉に明久と羊一が声をあげる。

「良かったな明久。ところで何で羊一が驚いているんだ？」

「あ、あつ、いや、何でもない、よ」

「？」

なぜか焦る羊一だった。

「…ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも…」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう…ん？どうした、羊一。そんなに震えて…」

「い、いや、大丈夫、です。」

「？」

なぜか震える羊一に秀吉が首を傾げていると、明久が瑞希に話しかける。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな…」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好きー」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「ーにしたいと思ってました」

明久が一仕事終わった職人のような顔をして額の汗を拭っている

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

明久が仕事に失敗した実業家のような顔をして涙を流している

『ピーッ、録音しました』

「ちょっと羊一！何ここぞとばかりに録音してるの！？ていうか何でそんなものを持ってんのさー!？」

「こつという時のためだ」

「チクシヨー！」

「まあ、そんなことはともかく今後のことだ…」

雄二が明久を無視して話し始める。

「まず、このメンツでもDクラスとは正面からぶつかると確実に勝てるとは言えない」

「？ じゃあ、どつするの？」

「言っただろ？『正面から』ぶつかったらだ。ならそれを避けて戦えば良い…」

雄二が不敵な笑みで言う。



「なあ、『クロヒツジ』？」

### 第三問（後書き）

次からついにDクラス戦です。良かったらまた読んでください。

#### 第四問（前書き）

Dクラス戦です。

## 第四問

「伝令！先発隊が渡り廊下にてFクラスと接触、交戦状態に入りました！」

「わかった！すぐ後発隊を準備すると伝えてくれ！」

「わかりました！」

ここはDクラスの教室内。

今はFクラスとの試召戦争の真っ最中である。

伝令役の生徒に指示を与えているのはDクラス代表の平賀だ。

「ふん、Fクラスならまあ、まず負けはないだろうが……」

心配事が一つ、Fクラスの代表のことだ。

「あの坂本のことだ。何か仕掛けてきてもおかしくない……おい、おい、山口」

平賀は少し考え、クラスメイトの男子に話しかけた。

「何だ？平賀」

「ちょっと偵察を頼みたい」

「偵察？Fクラス相手に必要なのか？」

「念のためだ、頼む」

「わかったよ、じゃちょっと行ってくる」

そう言って山口は廊下に出て歩く。

「平賀も心配性だよなあ〜まったく…」

そうぼやきながら歩いていると

「キャッ！」

目の前で一人の女子生徒が転んだ。

その女子生徒をみた瞬間、山口は脳に電流が流れた気がした。

その子には見覚えがなかったが彼のストライクゾーンど真ん中だった。

「だ、大丈夫？（ヤベエ！めっちゃ美人ってわけじゃないけど、タイプの娘だ！）」

心の中で若干、パニックながらも少女に手を差し出す山口。

「す、すいません。ありがとうございます」

「い、いやいや（声まで俺の好みじゃん！）」

少女は山口の手をかり立ち上がる。

「ありがとうございます。あの……」

「な、なにかなっ!?!」

「Dクラスの方ですよね、今Fクラスと戦争中の……」

「そつだよ！今から俺がちょっとくら偵察に行ってくるのさー！」

「わぁ、すごいですねえ〜」

「いやいや〜」

好みの女の子に褒められて悪い気がしない山口

「あの〜重要な、お仕事中に、申し訳ないんですけど…  
ちょっと、お頼みしたいことがあるんです…」

「大丈夫さ！なんでも言つてよ！」

そう言つて胸を張る山口

「わぁ、ありがと〜いびきいます〜。」

「じゃあ、ちょっと〜ち来てください〜」

「はいはい〜」

そうして少女についていく山口

その後、彼を見た者はいない…

………

「そうか、ご苦労だった、  
今度は明久達の援護を頼むと伝えてくれ」

雄二は伝令役に指示を与える。

「どうやら、羊一はうまくやってくれているようだ」

雄二が、補充試験を終えた瑞希、秀吉、  
なぜか須川に羽交い締めになれながら帰ってきた美波に報告する。

「しかし、すごいわね…黒峰の演技、女の子にしか見えなかったわ  
よっ」

「本当ですね、私、驚いちゃいました」



「それはそうじゃ。羊一の演技はワシ直伝じゃからの」

二人の言葉に鼻がたかそうに言う秀吉。

「まあ、アイツはロクな使い方してないけどな…  
お、どーしたムツツリーニ」

「…羊一から」

現れたムツツリーニから紙を受け取り読む雄二。

「…わかった、須川に頼んでくれ」

「…了解」

ムツツリーニが去ってしばらくして…

ピンポンパンポーン《連絡致します》

「放送、ですか？」

「ああ、そつだ。」

雄二は笑いをこらえつつ言った。

「なんでも、羊一が考えがあるんだとさ」

.....

ちよつと時間を戻して、ここは渡り廊下。

ただ今、FクラスとDクラスが絶賛、交戦中だ。

「……ちつ、平賀の野郎、斥候の数増やしやがったな？」

Dクラスの側の陣営に目立たないように溶けこんでいるのは羊一だ。

Dクラスの斥候をそいつの好みの女子に変装

人気のない場所におびき出し、闇に葬る

というのを繰り返していたが、さすがにそろそろ相手に警戒された

らしい。

先程から斥候の数が増え、斥候も男子から女子に変更された。

おかげで斥候を取り逃してしまっていた。

そろそろ潮時だと判断した羊一は目立たない地味めな男子生徒に変装し、Dクラス側に潜りこんでいた。

「最初っからDクラスに忍びこめりゃ楽だったんだが…あそこには清水がいるからな」

清水美春という女子生徒には、女装していてもすぐバレる。

男子生徒では試したことはないが、あの観察眼は侮れないためできるだけDクラスには近づきたくなかったのだ。

しかし、その美春も先程鉄人に連行されたらしいので今は安心して  
いる。

「よし、明久も頑張ってるみたいだし、俺も仕事しますか」

そうつぶやき、

羊一はこっそりとできるだけ目立たない位置に待機していたムツリーニに近づき一枚の紙を手渡す。

『これに書いてあることをやるように伝えてくれ』

『…了解』

アイコンタクトで意思疎通を一瞬で終わらせ、すぐに離れる二人。

「さて、あとは待つだけ…」

そして、しばらくして…

ピンポンパンポーン《連絡致します》

「きたっ！」

《船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

《生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです》

この放送はさっきムツツリー二に渡した紙で指示したものだ。

実際、この放送の効果は凄まじく、

『吉井隊長…アンタア男だよ』

『ああ、皆、吉井隊長の死を無駄にするな!』

Fクラスの士気高揚に成功した

「ふう、これで少しはもつかな?」

そう言って安堵する羊一。

『誰だあ!!こんな放送したのはあ!!!』

血涙を流し、絶叫する明久。

.....

「むう…そろそろ限界か…」

先程の放送で一度盛りかえたものの、明久の部隊も残り五人まで  
追い詰められていた。

しかし、そこに…

「明久、あと少し持ちこたえろ！」

「雄二か！」

見れば、雄二達、援軍が遠くからやって来ていた。

「援軍だ！合流される前に吉井達を全滅させる！面倒なことになるぞ！」

しかしDクラスも前線部隊の塚本から指示がとぶ。

その指示の下、一斉にFクラスに襲い掛かりあっという間に明久に  
までたどり着いた。

「吉井明久！覚悟っ！」

「負けてたまるかあつ！」

『サモン！』

明久の足元に現れる魔法陣

そして、特攻服を着たデフォルメされた明久が現れ…

「吉井明久。貴公の相手をーあがあつ！」

突っ込んできた相手にぶつかり痛みのフィードバックにのたうちまわる明久。

「…たくつ、何してんだか…仕方ない、助けてやるか」

そう言って息を大きく吸い込み叫ぶ。

「ああっ！霧島翔子のスカートが捲かれているぞっ！」

『なにいつ!』』

その場にいた生徒（女子含む）が羊一の指差した方向を見る。

『ほらっ!今のうちだ!明久』

『羊一!うん、わかった』

一瞬のアイコンタクトで明久はすぐに行動に移す。

上靴を脱ぎ、それを近くの窓に投げつける。

ガシャアアアーン!

『何だ!?何事だ!?』

突然のことに全員の注意がそれる。

「ああっ!島田!なにするんだ〜!」



羊一が言つと同時に明久が、

「島田さん、君はなんてことを！」

と叫びながら消火器を噴射する

ブシャー——！

『うわぁ！なんだ！』

消火器の煙りで前が見えなくなり混乱が拡大する。

そのうちに明久が合流に成功し…

「だあああつ！」天井のスプリンクラーに消火器をぶつける。

シューアアア——

スプリングラーが作動。視界が開ける。

「でかした、吉井！あとは任せろ！」

「くっ！撤退だ！」

塚本の号令のもとDクラスが撤退していく。

「深追いはするな！明久達の部隊を回収して俺達も引くぞ！」

雄二の指示で教室に一度撤退していくFクラスだった。

#### 第四問（後書き）

次で決着です。

羊一の召喚獣、次こそは出したいです。…出せるかなあ？

お付き合いありがとうございます。よければ、また読んでください。

## 第五問（前書き）

Dクラス戦、決着です。

自分の文章読み返してみたら読みにくかったので修正してみました。  
少しはマシになったかな？

## 第五問

「明久、羊一、よくやった」

雄二がらしくもない言葉を口にして去っていった

「雄二が羊一はともかく僕を褒めるなんて、珍しいね」

「多分、さっきの放送が原因だな。見ろ、あの晴れやかな笑み」

「…あの野郎、僕の不幸を喜んでやがるな？」

と、そこで明久が思い出したように言う。

「そつだ羊一、さっきはありがとう。」

そう言ってお礼をする明久。

「ああ、そんなことか。気にするな」

「いや、本当に助かったよ。やっぱり持つべきは優しい友達だね」

「そうか…じゃあ明久。お前に一つ伝えたいことがある」

「なんだい？親友」

「さっきの放送は俺が指示した」

「シヤアアアツ！！」

明久が獣のような声をあげて家庭科室から盗んだ包丁で羊一に切りかかる。

羊一はポケットから機械を取り出し操作する。

『僕、初めて会う前から君のこと好きーにしたいと…』

「すみませんでしたっ！！」

襲い掛かった姿勢からそのまま土下座に移行する明久。

「今度やったら…わかっているよな…」

「もちろんでございます、羊一様」

一瞬で忠誠を誓う明久。

「…油断させて後ろから…やれる、僕なら殺れる…！」

…前言撤回。懲りない明久。

「おい、馬鹿ども」

『誰が馬鹿だつ！…！』

「…仲良いのか、悪いのか、どっちなんだ？お前ら」

雄二が呆れたように言う。

「まあ、いい。そろそろ決着をつけるとしよう」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、  
頃合じゃろつ」

「……（コクコク）」

「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おっっ！』

こうしてFクラスはDクラスとの決着をつけるため出陣した。

.....

「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

ここは渡り廊下。

FクラスがDクラスに総攻撃をかけている。

Fクラスは個人の戦力では敵わないため集団で襲い掛かる必要がある。

そのために生徒の下校時間を狙い出陣。下校中のドサクサに紛れて敵に近づくと姑息な作戦だ。



『Dクラス塚本、討ち取ったり!』

一際大きな声があがる。

「うまく塚本君を討ち取ったみたいだね」

「みたいだな。俺達も仕事するぞ、明久」

「そうは言うけど…僕ら何してんの?」

今、羊一達は生徒が帰った教室にいる。

外は戦闘の音で騒がしいが教室内は二人以外おらず、静かだった。

すると…

《タッタラタララ、タッタ、パフ!》

「おお、メールだ」

「…なんで笑のテーマなの?」

「趣味だ」

「…僕、君という人間が時々、わからなくなるよ…」

羊一がメールの内容を確認する

「ていうか、携帯使っていないの？」

「よくはないが、バレなきゃいいだけの話だ」

「羊一が観察処分者になったのも当然な気がしてきたよ…で？なんのメール？」

明久は羊一の携帯を覗き込む。

「…山口…って誰？」

「ああ、捕獲しといたDクラスの斥候の一人だ。さっき放流しといた」

「？　なんで、そんなことを」

「ああ、ちょっと説得して今はDクラスの情報を流してもらってる。」

「説得？どつやって？」

「ああ、ちょっと…」

羊一はメールを確認しながら言う。

「ちょっと、彼が昔、好きな女の子を思い、書いたポエムを朗読してあげたら快く協力してくれた」

「君は鬼かつ!!」

説得ではなく脅迫まがいの精神攻撃だった。

「…いつか羊一には天罰がくだると思うよ」

「そんなことはどうでもいい…ふん…どうやら敵さんも本隊がでるらしいな」

「えっ！それってマズイじゃん」

「いや…そんなことはない」

そう言って羊一はニヤリと笑った。

.....

教室内での悪だくみから少しして…

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラス代表の平賀の声が渡り廊下に響いた。

Dクラスの本隊がついに動き出したのだ。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あっという間に雄二の周りがDクラスメンバーで囲まれる。

「ふう、これで終わりだな…坂本！」

平賀が勝利を確信して言う。しかし…

「ふっ…」

「な、何が可笑しい！」

雄二は余裕の笑みを浮かべていた。

「塚本…この勝負、俺達の勝ちだ」

「何をバカなことを…」

塚本が言い返そうとした時、

《タッタラ、タララ、タッタ、パフ！タッタラ、…》

「な、なんだ！？この気の抜ける音楽は！？」

日曜、夕方が似合うテーマが渡り廊下に響き渡る…

すると…

『ギヤアアアアっ!!』

雄二達を囲んでいたDクラスのメンバーが悲鳴をあげてその場につきまぐる。

「ど、どうしたんだ、アイツら!」

「アイツら…全員Fクラスに捕まってたヤツらだ!」

「あの解放されて帰ってきたってヤツらか!?!」

「あんなに錯乱するなんて…Fクラスにどんな恐ろしいことをされたの!?!」

突然のことに混乱するDクラス

「クツクツク」

「だ、誰だ！」

笑い声がする方を見る平賀。

「作戦成功ってヤツだ。これであっちはしばらく大丈夫。今のうちに大将首をいただくぜ」

「それはいいんだけど…彼らに何したのさ、羊一」

そう言っつて羊一と明久が教室から出てきた。

羊一の手の録音機械からは音楽が流れている。

「くそっ！平賀を守れ」

「わかったわ！向井先生！Dクラス玉野美紀、いきます！」

「同じく、近藤啓太、いきます！」

「なっ！近衛部隊！？」

「ちっ、仕方ねえ…行くぞ！」

『サモンっ！！』

二人の声に反応して召喚獣が現れる。

明久の召喚獣は特攻服に木刀。

羊一の召喚獣はゲームに出てくるようなファンタジー風の学者姿にいくつもの本を背負っている。

「何で羊一の召喚獣は武器持ってないの？」

「何言ってるんだ。しっかり持ってる」

「どっくに？」

「背負ってる本だ」

「雑魚だっ！！」

明久が頭を抱えるうちに敵の二人がつっこんできた。

「ヤアあ！」

「危なっ！」



明久は玉野の攻撃をかわす。

「ヤアあ！」

「おつと」

スカッ

「ハアっ！」

「よつと」

スカッ

「タアっ！」

「あらよつと」

スカッ

「ああっ！ムカつくっ！」

「そう言われても……」

観察処分者で召喚獣の扱いに慣れている明久は玉野の攻撃をことごとく避けていく。

「こっちは大丈夫そうだ。羊一の方は…」羊一の方の戦いを見る明久。

「な、なんだ！なんで俺の召喚獣が動かないんだよ！？」

近藤の召喚獣は床に置かれたR18と書かれた本から目が離せないようにまったく動かない。

「く、黒峰！俺の召喚獣に何をした！？」

「いや、べつに特別なことはしてないぜ？」

羊一は余裕の笑みを浮かべ、説明する。

「その本には一種のウィルスが入ってて、それに感染した召喚獣の動きをちよつとの間、止められるんだ」

「なあ！？」

驚く近藤を無視して羊一は説明を続ける。

「たしかに強力な能力だが、一回使うともうその戦闘では使えないし、止めておける時間も短い……」

「他にも点数が減ったりとイロイロ制約があるんだが……今はどうでもいい」

羊一はそう言って近藤の召喚獣に自分の召喚獣を近づかせる。

召喚獣の手には分厚い国語辞典。

「なあ、アンタ。知ってるか？」

「本って意外と凶器なんだぜ？」

明久はそこで目をそらした。

後ろから何かを殴る音が何度も響き、その内なにも聞こえなくなっ  
た。

「ふう、こっちは終わったぜ、明久」

「そ、そっかあ。」

爽やかな笑顔の羊一の召喚獣が持つ本についた赤いモノの正体は気にしないようにすることにした明久だった。

ともかく一人は倒した二人。

しかし、

「むう…さすがに、少し、疲れてきた…」

羊一がつぶやく。

召喚獣の疲労が羊一にフィードバックされ始めた。

羊一の体力はスライ 並なためあまり長い間戦ってられない

「残念だったな、黒峰！どうやら召喚獣の前にお前の限界が来たらしいな！」

平賀が羊一の様子を見て、言う。

「惜しかったな、今のお前と彼の二人では俺を倒せない」

平賀が言う。

「そろそろ錯乱したヤツらも落ち着いた頃だ…終わりだな、黒峰、  
吉井」

「……………」

平賀のその言葉に…

「…ああ、終わりだ、お前がな」

羊一と明久はニヤリと笑う。

『姫路さん、よろしく』

「は？」

「あの、す、すいません。」

「え、あれ、姫路さん？なんで？」

混乱する平賀。

「Fクラスの、姫路瑞希です。えっと、平賀君に勝負を申し込みます」

「は、はあ…」

「さ、サモンです」

「え？あ、あれ」

よく状況が理解できずに召喚獣をだした平賀だったが…

「い、いめんなさい！」

召喚された瑞希の召喚獣に一撃で葬られた。

「あれ？」

呆然とする平賀にニヤニヤした顔の羊一が言う。

「誰も攻め込むのが俺と明久の二人だけとは言ってない、本命は姫路だったんだよ」

こうしてDクラス戦は幕を閉じた…

## 第五問（後書き）

羊一には明久の言う通り天罰がくだることでしょう…

次回も読んでやってください。



## 第六問（前書き）

第六問です。

イロイロ挑戦してみました…

とりあえず、どうぞ。

## 第六問

「いやあ、勝てたなあ……」

「お疲れじゃ、羊一」

秀吉が羊一にねぎらいの言葉をかける。

今は試召戦争が終わったあとの放課後である。

あの後すぐ雄二が号令を出し、解散となった。

二人は家が近所であるために一緒に帰宅しようと廊下を歩いている。

「しかし、雄二の提案には驚いたの」

「……ああ、あの『Dクラスと教室を交換する代わりにBクラスの室外機を壊させる』ってやつか」

「そうじゃ。雄二は何を考えておるのか……羊一は検討がついておるか？」

「さあな、まだわからん」

二人が話しながら歩いていると前から人が歩いてきた。

「おお、姉上」

「おりよ、優子じゃん」

「…ああ、アンタらか」

歩いてきたのは秀吉の双子の姉、木下優子だった。

秀吉と羊一は普通に声をかけたが、優子は嫌そうに顔をしかめる。

「…新学期そろそろ何やってんのよ、アンタら」

「何、というとっ？」

トゲのある声の優子に、羊一が聞く。

「惚けたって無駄よ…」

「惚けてなんてないさ、なんのことだか…」

「女装して、教室に登場…」

「ぐっ!?!」

「そのままの格好で屋上で食事…」

「うぬっ!?!」

「あまつさえ、そのまま試召戦争…」

「え〜と、それは〜」

徐々に声が振るえ始める優子。

「あ、あの〜優子、さん?」

「……………なに」

とても低い声。

ここで対応を間違えれば爆発は必死。

羊一は少し考えて言った。

「…そんなに怒るから秀吉も、モテないんじゃないかね？」

ブチイツー！！

何かが切れる音がした。

「…し、」

「し？」

「死ねえええつー！！」

「ギヤアアアつー！？ちよつ、優子さん！？やめ、俺、きよじゃ…」

ゴキヤツー！！

とても鈍い音が羊一の中で響き、羊一の目の前は真っ暗になった。

……

「見知らぬ天井…じゃないな」

「目覚めて一言目から何を言っておるのじゃ、羊一」

羊一は気がつくともベッドに寝かせられていた。

ベッドの隣には秀吉が呆れたような顔をして立っていた。

「ここは…保健室か。見覚えのある天井だ」

「天井に見覚えができるほど保健室に通っているのか、おぬしは…」

秀吉と羊一がそんな会話をしていると、

「起きたのか、黒峰」

そんな声とともにベッドの周りのカーテンが開けられる。

「起きたならさっさと帰れ、私にはまだ仕事が残っている」

「あ、どもです。榎木先生」

彼女はいわゆる保健室の先生である『榎木夏月』  
夏に月で『かずき』と読む。

長い黒髪でスタイルがよく、しかもなかなかの美人の先生である。  
名前に『夏』がつくのに性格はクールで無愛想。

常にぶっきらぼうな話し方をする。

しかし、『そんな所もイイっ!』という人が数多くおり、学年主任  
の高橋先生とともに『文月学園の二大クールビューティ』とされて  
いる。

「いやゝ助かったっす」

「まったくだ、もう少しで死んでたぞ、お前」

そう言つて夏月はちよつとどいて後ろをみせる。

後ろにはよくわからん救命道具が散乱していた。

羊一はガタガタと震える。

「やったヤツの腕がよかつたようだ。運がよかつたな」

「…ハイ」

震えながら答える羊一。

「わかつたら帰ることだ。じゃあな」

そう言っつて自分のデスクに戻る夏月。

「…じゃあ、帰るか、秀吉」

「そうじゃな。では失礼したのじゃ、先生」

そう言っつて二人は保健室を出て歩きだす。

「まったく、殺されるとこだった…」

「あれは自業自得じゃろ」

呆れて言っつ秀吉。

そしておもむろに言っつ。

「昔は三人で仲良くやっつておつたのに…」

「…何年前の話してんだよ」



寂しそうに言う秀吉に羊一はため息をついて言う。

三人は小学校の頃からの幼なじみだ。

秀吉が言うように昔はよく三人で遊んだものだった。

しかし今は…

「姉上とおぬしは会えば喧嘩ばかりじゃ」

「たいていは負けるけどな…」

自嘲げみに言う羊一。

そんな羊一に珍しく少し苛立ったように秀吉が言う。

「…おぬし、まだ小学校での事を引きずっておるのか？」

「……………」

何も言わない羊一に秀吉はさらに言う。

「あれ以来じゃ、ワシらの関係がおかしくなったのは…」

「…ああ、あの時からだな」

「この体質のことでイジメを受けてた俺をかばった優子が逆にイジメにあった時からだ」

羊一はそう言いながら思い出す。

当時、まだ体質のことを気にして引っ込み思案だった羊一はイジメを受けていた。

それをいつも助けてくれたのが優子だった。

羊一をイジめるやつに真っ向から立ち向かい、羊一を助けてくれていた。

しかし、いつしかイジメの対象は羊一から優子に移っていった。

イジメの輪は広がり、遂にはクラス全体が優子のイジメに参加するようになった。

しかし…

「アイツは、優子は、俺の前だといっつも笑ってやがったんだ」

つらくない訳がない。

悲しくない訳がない。

しかし優子は笑っていた。

羊一を安心させるように、責任を感じないように…

その後イジメは時とともに無くなっていったが、その経験は羊一達  
の關係に暗い影をおとした。

「おぬしは姉上を避けるようになった」

「そうだったな、あの頃はひどかった」

羊一は心を閉ざし、優子達と距離をとるようになった。

優子はそれでも話かけてくれていたのだが…

「結局、大喧嘩に発展。それ以来…って感じかな」

羊一が自嘲げみに言う。

「あれは、おぬしのせいでは…」

「いや、あれは全て俺の責任だった」

秀吉の言葉を遮り、言う。

「あれは、俺が弱かったせいで起こったことだ」

あの時、羊一は弱かった。

身体ではなく心が弱かった。

自分の体質を受け入れ、戦うことができる強さがなかった。

自分の弱さ故に少女を傷つけ、自分の弱さから目を逸らしたいがために少女を遠ざけた。

「…羊一」

「あの時、俺は何もできなかった…だが、今は違う」

羊一は秀吉の目を見て言う。

「俺は強くなりたい、強くなって今度こそ友達を助けられるようになりたい」

「……………」

「そのためだったら、この体質だって最大限に利用する。卑怯なことで何でもするって決めたんだ」

「…そうか」

羊一の言葉を聞いて、秀吉は一つため息をつき言っ。

「おぬしの本音を初めて聞いた気がするのじゃ」

「ああ、これは俺の野望だからな。野望ってのは腹の奥に閉まってくもんだろ？」

「まったく、卑怯じゃの」

「俺にとっては褒め言葉だ」

その言葉に二人して笑う。

「まあ、助けるためにはもう一度、仲良くならなくてはの」

「ぐ…それ言われると」

「まず、気まずいのをごまかすために姉上をいじってしまう癖をど

うにかするんじゃ」

「ぬう〜いきなりの難問だ」

「ワシも協力するから頑張るのじゃ」

そんな会話をしながら歩く二人。

と、そんな二人の後ろを物影に隠れながら追いかける一人の人影。

「…何なのよ。アイツ」

優子だった。羊一を保健室送りにした後、しばらくして気になり、様子を見にいったところ、歩いている二人に遭遇。思わず、尾行を敢行し現在にいたる。

「そんなこと、一言も言わないし…これからも言うつもりなさそうだし…何なのよ」

優子はブツブツとつぶやく。

心なしか顔が赤い。

声の調子もいつもより若干高い。

「ていうか、私はそんなこと気にして…ああっ！もっっ！」

「グダグダ考えるなんて後回し！」

そう言っつて優子は二人の方に走る。

何だか、今日は気分が良い。

今日ぐらい愚弟と、あのどうしようもない幼なじみと帰ってやるのも良い…そんな気がした。

「ちよつとアンタ達！待ちなさいよ！」

優子は前に行く二人に届くよう声をあげた…

ちなみに、

この後、羊一が優子に死亡寸前まで追い込まれたことをここに追記しておく…



## 第六問（後書き）

こんな感じですか。

これは大丈夫なんだろうか？

できれば次も読んでください。感想、意見、その他も書いていただけると嬉しいです。

## 第七問（前書き）

第七話です。

羊一君への作者からのプレゼントです。フフッ…

## 第七問

今日は何かおかしい…

羊一は学校への道を歩きながら思う。

実際、今日は朝からロクなことがない。

目覚ましが鳴らなかったのを始めとして、母の朝食の作り忘れ、父のトイレ占拠、ペットの猫の反乱。

外に出れば犬に吠えられ、近所のオバちゃんに足止めをくらい、自転車に轢かれかけ、飛んでいたカラスからは爆撃を受けた。

「今日は厄日か…？」

さらに普段は一緒に登校している秀吉とは何故か、行き違いになった。

そのため羊一は一人で学校へ向かっている。

「これだけ続くと何か変な力でも働いてる気が…」

そうつぶやく羊一の脳裏に昨日の明久の言葉が浮かぶ。

『…いつか羊一には天罰がくだると思うよ』

「…ないない。今時、天罰なんか」

羊一は自分の考えを否定し、笑いながら曲がり角を曲がる。

しかし…

「…おはよう、黒峰。良い朝ね？」

「…島田、その台詞は俺のネクタイを離してから言ってくれないか？」

曲がり角を曲がった瞬間、美波にネクタイを凄い力で握られた。

「…どうしてウチが朝からアンタを待ち伏せしてたか、解る？」

美波が笑顔で（しかし手の力は抜かず）聞く。

「…あ、愛の告白？」

「違うわ」

「…ですよわっ」

若干、手の力が強くなった。

「…わからない？」

「…恐れながら、まったく」

「そう。じゃあ、教えてあげる」

美波は一拍おいて言う。

「昨日アンタらがウチにかぶせた器物破損の罪のことよおっ！！」

「ウゝアアアアっ！し、絞まってるっ！絞まってます島田さんっ！

「！」

「アンタらのせいで彼女にしてくれないランキングが上がったじゃない！！」

そんな声をあげ、絞める美波。しかし、羊一が意識を失いかける直前に解放する。

「まあ、こんなものでしょ」

「ウゝえほ！？こゝ、殺さないのか？」

「…アンタ、ウチのこと何だと思ってんのよ」

美波は呆れた様子で言う。

「ウチだって相手にあわせて力を加減するわよ。虚弱体質のアンタにはあれぐらいで十分でしょ」

「…けっこう本気で絞めてたような…」

「何か言った…?」

「何でもありません、島田様」

「あっそ、ならいいわ」

そう言っつて、学校に歩き始める美波。  
羊一も追いかけて隣を歩く。

「しかし、さっきの言葉の通りだと明久への暴力はあれでちょうどいいのか?」

「むしろ足りないくらいよ」

「…強く生きるよ、明久…」

羊一は心の中で友人に祈りを捧げた。

と、その時。

「お姉ちゃん！」

「えっ！？は、葉月！どうしたの！？」

「？ 島田の妹か？」

美波が振りむいた方向から走って来るのは妹の葉月だった。

葉月の手には一冊の教科書が握られている。  
どうやら姉の忘れ物を届けにきたようだ。

しかし、二人に追いつく寸前…

ガッ！

「ふえ？」

「へ？」

道の石に躓き、バランスを崩す葉月。

進行方向には羊一が立っていた。

ドカアッ！

葉月の体は慣性の法則に従い、頭から羊一にぶつかり押し倒す。

幸い葉月にはケガはなく、体も軽いためにそこまでの衝撃もなかった。  
普通の人ならば何の問題なかっただろう。

しかし羊一は虚弱体質だ。

故に…

「す、すいませんです、お兄さん…あれ？何でお兄さん白目をむいてるですか？」

「ちよっ！？黒峰！？大丈夫…い、息してない！？え、あの…い、医者…っ…！！！」

………



「や、やはり…い、いや天罰なんて…」

羊一はあの後、美波に学校の保健室に運ばれた。

羊一の蘇生に関して半ばプロになってきている榎木夏月先生がいるからだ。

羊一は夏月先生から、『私はお前の主治医じゃない』とイヤミを言われつつ保健室を後にし、一時間目を過ごした。

「しかも、今日は午前中は全部補給テスト…」

そう、Dクラス戦で消費した点数を補充するためのテストが今日だった。

「憂鬱だ…」

そう言ってため息をつきながらトイレに行くため廊下を歩く羊一。

「あ、その君。ちょっといいかな？」

「うん？」

一人の女子生徒に呼び止められた。  
羊一は相手を確認する。

「…たしか、Aクラスの…」 「そ、ボクは工藤愛子。はじめまして、だね」

そう言つて女子生徒、工藤愛子は名乗つた。

「はじめまして、黒峰羊一です。趣味は罵倒と虐殺と幼児虐待です」

「へえ、変わった趣味だね」

「…嘘です、ごめんなさい…」

ネタをスルーされて落ち込む羊一。  
そんな羊一の様子を見て笑う愛子。

「フフっ、聞いてた通り面白い人だね。ボク、君のこと気に入つちやたよ」

「そりやども…で？なんか用？俺、忙しいんだけど。主に下の用事で」

「そう？何なら解決してあげようか、その用事。…もちろん実技で」

「…遠慮しとく。後ろからエライ殺気がする…さっさと用とやらを」

話してくれ」

後ろ（Fクラス方向）からの殺気からは目を背け、聞く。

「うん、君だよな？優子の幼なじみの男の子って」

「ああ、そっだが？」

羊一がそう答えると、愛子は興味深そうに観察する。

「ふうん…これが優子のねえ…なるほど」

「…人をまるで珍獣を見るような目で見ないでくださる…？」

「アハハっ、ゴメンゴメン…  
ねえ、よかつたらボクと友達になってくれない？君とは仲良くなれ  
そっちな気がするよ」

「突然だな…まあ、いい。んじゃま、よろしくな」

「うん、よろしくね。…とじろで…」

そう言って羊一に近寄り言う。

「…優子とはどんな関係なのかな」

「どんなも何も…」

「ただの幼なじみじゃないんでしょう？」

「？ たしかにちょっと仲悪いが…」

「…それ、本気で言ってるの？」

「ああ、俺はもうちょい仲良くしたいとは思ってたがなあ…」

そう言ってため息をつく羊一。

「仲良くって…付き合いたいってこと？」

「…ノーコメント」

そう言って目を逸らす羊一。

「はあ…。なるほど…？」

優子は面白いものを見たように笑う。

「まあ、いいや。今日は「ねくら」いで…じゃあ、優子ともどもよろしく、ねっ！」

バチンッ！！

愛子はそう言って羊一の背中を叩く。

愛子は挨拶のつもりでやったため、そこまで力を入れていなかった。

常人ならば何も問題はなかっただろう。

しかし、再び言うが、羊一は虚弱体質だ。

故に…

「あれ、何で倒れ…ちよつと！？黒峰君！？何で血吐いてるの！？あ、うえ！？い、医者あー！ー！！！」

………

「…天罰、なのか…？」

暗い顔をしながらつぶやく羊一。

あの後、愛子に呼ばれた羊一の蘇生に関してはブラックジャック並の夏月先生のおかげでなんとか生き残れた。

夏月先生からは『…お前は私のファンか何かか…』と気持ち悪そうに言われた。

羊一はそれにもめげず、二時間目、三時間目のテストを乗りきった。

「まずい…真面目に、しんどい…」

羊一が青い顔をしてつぶやく。

実は、愛子とのことでFFF団に目をつけられたらしく、テスト終了と同時に襲われた。

得意の脅しも、今の嫉妬に狂った彼らには通用せず、仕方なく逃げてきた。

今、羊一は彼らから絶賛逃亡中である。

「つ、次のテストまで、どこかに、隠れよう…」

そう言う羊一の目に、ある部屋がとまった。

『女子更衣室』

「…いや、さすがに、なあ？」  
扉の前で悩む羊一。

すでに階段も封鎖された今、他の部屋よりは生存率は高そうだが、  
いや、しかし…

と思い悩む羊一の耳に声が聞こえてきた。

『ヤツはこの階のどこかにいるぞ！捜せっ！』

『見つけたら！？』

『決まっている！！異端者には死の償いをつ！』

「チイっ！…ええい！悩んでも仕方ない。お邪魔します！」

羊一は扉を開き、中に隠れる。

ドタドタっ！！

…足音が遠ざかる。

「…ふう、なんかあったな」

そう言って扉から目を離し、振り返る。

「……………」

先客と目が合った。

「…やあ、奇遇だね。清水さん」

「…ええ、奇遇です」

先客は清水美春だった。美春の手には何かの機械が握られていた。

「…ふう、」

美春は手にした機械を自分のかばんにいれ、チャックを閉める。

「誰かあ…！」

「待ったあ…！話し合おうっ！まずはそれからだ！」



「女子更衣室に入ってくる変態豚野郎とは話すことなどありませんっ！」

「それに関してはスイマセン！だからあ、そ、そうだった！」

大声を出そうとする美春に羊一は言う。

「アンタの知らない島田の情報を何でもいいから教える！それではないか！」

ピタッ…

「…何でも？」

「あ、ああ」

「…どんな情報が？」

「くみたいな感じ」

「な、そんな情報どこから!?!？」

「まあ、イロイロと、な。どうだ？」

「…わかりました。いいでしょう」

「ふう、交渉成立だな。（ゴメンっ！島田あ…）」

心の中で美波に謝る羊一だった。

「しっかし、さっき隠したのってカメラだろ？」

「…それが何か？」

「いや、何かっつー問題じゃない気が…」

「これもお姉様を汚い豚野郎から守るためです！」

熱っぽく語る美春。

「ああ、そうかい…まあ、確かに島田はかわいいからな」

「…あなたも、お姉様を狙う豚野郎ですか？」

「違う」

「お姉様の魅力がわからないなんてっ！なんということうっ！」

「…どないせえ言うねん…」

呆れる羊一。

しかしふと気になって聞く。

「そんなに島田が好きなのか？」

「いいえ、違います」

「えっ！？どついついっ…」

「好きなのではありませんっ！愛しているのですっ！…！」

「…さいですか…」

完全に呆れている羊一。  
しかし美春は止まらない。

「そうです！愛しています！…これは誰にも邪魔できない私達の愛  
なのですっ！…！」

かなりヒートアップしている美春

「ああ…今も目を閉じればお姉様との…ああッお姉様」

「…スイマセン、ちょっと？清水さん」

そう言う羊一だったが、美春は妄想に浸っていて聞こえていない。

…そして、

「もうっ！お姉様ったらっ」

ブンっ！

妄想に浸っていた美春がかばんを持っている手を振る。

妄想の中での照れ隠しに振られたかばんは通常の人でもけっこう痛いだろう。

まして、羊一はしつこいようだが、虚弱体質だ。

故に…

「ふう、私としたことが…あら？豚野郎が何故か血まみれで倒れる…まあ、外に棄てときますか…」

.....

「天罰だ…間違いない…神様は俺を殺す気なんだ…」

羊一がガタガタ振るえながら言う。

その後、廊下で発見された羊一は羊一の蘇生に関しては神に匹敵する腕の夏月先生にギリギリのところで助けられた。

夏月先生には『…次は見捨てるからな…』と絶対零度の視線と共に言われた。

今は長かった午前中がようやく終わったFクラス教室だ。

「一応、テストは、受けたが…」

後半、ほとんどの問題。何を書いたか覚えがない。

点数は絶望的だろう。

「やはり天罰！いや、むしろ呪い！？神の呪いか!？」

「羊一、変な電波受信してないでお昼にしようよ」

明久が言う。

「あ、ああ。でも俺、今日昼飯は食えないんだ。母さんが弁当も作ってないから……」

「？ 何言ってるのさ、羊一」

明久が不思議そうに言う。

「今日のお昼は姫路さんの作ってきたお弁当をもらっただけでしょ。忘れたの？」

「……………」

「？ 羊一？」

固まる羊一に首を傾げる明久。

「ほら、みんな先に行ってる。僕らも急がないと」

「……………も、」

「も？」

「もう嫌だアアアアアアアツ！！！」

「ああつ！羊一！何で窓から飛び出そうとするのっ！？？」

「離せえっ！明久！俺は、俺は自由の旅に出るんだ！苦しみも痛みも感じずにすむ旅に！」

「それは確実に死んだ人が出る旅だよねえ！？？」

「そうさ！俺を殺せよ神様あ！俺の事が嫌いなんだろうお！？俺もてめえの事が大っ嫌いだ、ボケエっ！！！」

「い、いいから、落ち着けて…須川君！ちょっとロープ持ってきて…！！！」

羊一と明久の叫び声が響き渡った…





## 第七問（後書き）

こんな感じですか。

どうでしたでしょうか？

原作のキャラが…

感想、指摘、等をくださると嬉しいです。

## 第八問（前書き）

八話目です。

わかりにくかったらスイマセン。

## 第八問

「まっさか。そんなはずないじゃない」

「いや、マジなんだって！」

「またまた」

珍しく焦ったように言う羊一に明久は笑って返す。

二人は昨日約束した瑞希のお弁当を食べるために屋上を目指している…はずなのだが…

「本当なんだよ！姫路の弁当は危険なんだ！」

羊一はロープで縛られ、明久にはほ無理矢理、屋上に連れている。

羊一は虚弱体質なため、明久でも比較的、楽に連れて行ける。

羊一は拘束から抜け出すのは不可能だと判断し、先程から明久の説得をしようとしていた。

…が…

「何言ってるのさ。だってあの姫路さんが作ってくれたお弁当だよ

「マズイ訳ないじゃない」

「いや、マズイどころじゃなく、命の危険が！」

「またまた」

明久はまったく取り合ってくれない。

と、二人がそんなことをしていると…

「よう、何やってんだ？お前ら」

「…新しい型のプレイ？」

両手に飲み物の缶を持った雄二とムッツリーニが歩いて来た。

「どーしたの？雄二。先に屋上に行ってたはずじゃなかった？」

「『どーした』は俺のセリフなんだが…いや、ちょっと飲み物を買ってたんでな」

「…その、付き添い」

二人が言う。

「ふん。じゃあ、秀吉と島田さんは先に？」

「いや、島田は来れなくなった」

「え！？どうして！？」

「…2・Dの女子に追いかけられている」

「ああ。いきなり現れて…お、噂をすれば、だ」

雄二がそう言って窓の外に見える校庭を指さす。

『お姉様っ！情報を確かめさせてくださいっ！！』

『情報ってなにっ！？ていうか確かめるってなにを！？』

『もちろんこのことです！』

『っ！？な、何でアンタがそのことを！？』

『！！その反応！やはりこの情報は真実！ならばなおさらこの手で確かめねばっ！』

『もう、何なのよおっ！？』

校庭を走る二人の女子生徒が見えた。

「…スマン、島田。…いや、この場合は逆に助けたのか？」

羊一がつぶやく。

「ところで、お前らは何してんだ？」

「いや、実は…」

雄二の質問に明久が先程からの騒動を二人に話した。

「んな馬鹿な。あの姫路に限ってマズイなんざありえない」

「…まったくだ」

二人も明久と同じように笑って羊一の言葉を否定する。

「…どうなっても知らんぞ？」

「まったく。さては俺達を脅して姫路の弁当を一人で食おうって腹だな？」

「…無駄」

「ムツツリーニの言う通り無駄だよ。僕らはそんな作戦には引つ掛からないよ?」

そう言っている内に屋上に出るための扉の前に着いた。  
この扉を開けるとそこが屋上だ。

「本当に、行くのか…?」

「もちろん!この扉の向こうは僕らにとっての楽園、いや天国だよ?」

「……………そうか。そこまで言うなら、もう何も言わない……」

「? まあ、いいや。姫路さん、秀吉。お待ちせよ」

明久が扉を開いた。

「き、木下君っ!?!どうしてそんなに震えてるんですか!?!倒れた時に頭を打ったんですか?」

天国には、死体と一人の美少女（必殺料理人）がいた…

「何も言わず…仲良く死のうや…」

………

「…そうか。僕らがあまりに遅かったから先に食べ始めることにしたんだ」

「は、はい。そしたら木下君が急に倒れちゃって…」

「…そ、そうか…」

瑞希の言葉に明久は引きつった笑顔で返す。

その後、秀吉を保健室に運び、屋上に戻ってきた四人。

四人とも正直、戻りたくはなかったが瑞希がまだ屋上に待っている



ため仕方ない。

「木下君、どうしたんでしょうか？」

「ち、ちょっと姫路さんの料理の美味しさを表現しようとして倒れた時に頭を打ったって言うてたよ？」

ウソである。

秀吉はまだ意識が戻っていない。

「そ、そうなんですか？美味しいって言ってもらえて嬉しいです！」

しかし、瑞希は明久の言葉に嬉しそうに言った。

そう、彼女自身に悪気はない。ただ彼女が自覚のない必殺料理人だったただけだ。

「ハハハ、秀吉にも困ったものだね？」

「まったくだな」

「仕方ない」

「ああ、姫路の料理だからな。仕方ないさ」

と、四人は笑顔で話す。

しかし、実際は瑞希にバレないように、必死にアイコンタクトで会話を  
をする。

『ど、どうしよう、雄二！』

『どうするったって、もう後には退けないだろっ！？』

『…しかし、あの弁当の威力は未知数…！』

『ああ、かなりの強度をほこる秀吉の胃袋をもってしてあのザマだ  
……』

四人の脳裏にガタガタと震えていた秀吉の姿がよぎる…

『正直、めっちゃ帰りてえ……』

四人の気持ちは一致している。  
しかし…

「そ、それじゃあ皆さんもどござ…お口にあつか、わかりませんけど…」

と言って、不安そうに弁当箱を差し出す瑞希…

『……に、逃げられねえ…！』

四人は冷や汗をかきながら思う。

今の状況で帰れるヤツがいたら、そいつはおそらく人間ではない。

『…食うしかない…この、『必殺弁当』を…！』

と、そんな時、雄二が決断をくだす。

『…仕方ない…腹を括ろっ』

『！　雄二、本気なの！？』

『ああ…しかし、だ…犠牲はなるべく少ないほうが良いとは思わな  
いか？』

『…確かに』

『そうだな。今後の試召戦争のことを考えるなら、犠牲は少ないの  
が良い…』

『ああ。だが、四人中、一人や二人だけ食べるのは不自然だ。三人  
が弁当を食べる必要がある…つまり』

四人は、思う。

『生き残れるのは…一人だけ…!!』

その瞬間、四人の間に確かに電流が走った。

それからの四人の行動は早かった。

「第一回っ！」

「姫路さんのお弁当争奪っ！」

『ガチンコ、トランプ対決ーっ!!』

『イエーーツー!!』

「ふ、ふえ？」

突然の出来事に混乱する瑞希。

しかし、四人はさっさと話を進めていく。

「明久！ルール説明だ！」

「オツケー！ルールは簡単！」

このトランプから一人一枚ずつ引いていき、最後に確認！最も数が少なかった人はお弁当が食べられません！」

そう、勝負の方法は単純。

明久が昼食の後、皆で遊ぼうと持ってきていたトランプ。

そこから、ジョーカーを抜いたものから、一人一枚ずつカードを引く。

最後に全員のカードを確認し、最も数字が少なかった者が負けというものだ。

敗者…つまり、この勝負での唯一の生存者である…

「み、皆さん！お弁当ならたくさんあるので、そんな勝負は」

「いや、姫路さん！男には、どうしても…戦ってでも勝ち取らないといけないモノがあるんだ！」

「吉井君…」

そう、勝ち取らないとならないモノ…自分の命っ！

「…わかりました。そこまで言うなら…」

瑞希は四人の妙なやる気に首を傾げるが、勝負を見守る。

「…皆、準備は良いな？」

雄二の言葉に他の三人が頷く。

「では…いくぞっ…！」

『デュ ルツ！！！！』

…意外とノリがいい四人だった。

………  
明久 side

『この勝負、勝てるっ！』

明久は心の中で自身の勝利を確信した。

実は、明久が持ってきたこのトランプにはある細工がしてあったのだ。

『このトランプは一枚だけ角を少し切った『印』のカードがある』

『そして、その『印』のカードから上が数字の大きなカード、下には小さなカードを集めておいたのさ』

前にテレビでやっていたマジックの方法を使ったモノだ。

つまり、印を見ればある程度、カードがわかるのだ。

「いける！生き残るのは僕だ！」

.....

ムツリーニside

『...勝てる...!』

ムツリーニは自分の作戦を考え、思う。

ムツリーニには作戦があった。

『...明久のあのランプ...確かに印がある...』

明久がランプを取り出した時ムツリーニは印があるのに気がついていた。

常人ではわからなかっただろうが、常日頃サービスショットを捉えるために鍛えた目は見逃しはしなかった。

さらにムツリーニは思い出す。



この手口は先日、たまたま見たマジックの番組（マジシャンの助手がバニーだった）でやっていた。

ならば話は簡単。

『…『印』の下を引けばいい』

ムツツリーニは思う。

『…まだ死ぬわけには…いかない！』

………  
雄 side

『甘いな！明久、ムツツリーニ！勝つのは俺だ！』

雄ニはひそかにそう思った。

雄ニは明久がトランプに仕掛けをしているのを見抜いていた。

『前におふくろが見てたテレビでやってた手品だな？翌日、明久も見たと言って騒いでたしな』

さらに雄二は思う。

『しかし、甘いな。明久！そのトランプには細工済みだ』

実は、明久が一瞬カードから目を離れた時に『印』の上と下を入れ替えていた。

これで、カード束の上には数字の小さなカード、下には大きなカードが集まる。

『おそらく、目ざといムツツリーニや羊一も明久の細工に気付いているだろう』

だが、これで自分以外の全員が大きな数を引く。

『悪いな、生き残るのは俺だ！』

.....

「…よし。全員引いたな？」

雄二が確認する。

三人は頷く。

「じゃあ、いくぞ…せえの！」

バツ！！！！

『！？』

明久とムッツリーニの顔が驚愕に歪む。

明久…13

ムッツリーニ…11

そして…

「な、なんだとっ!？」

雄二…12

雄二が思わず声を出す。

おかしい。

自分は確かに上から引いた。

ならば何故こんな数字が出る…

そう考える雄二はふと、最後の一人…羊一を見た。

「悪いな…お前ら…」

羊一…3

「雄二…惜しかったな…お前がトランプに細工した後…俺も細工させてもらった。」

「な、なんだと!？」

「明久のトランプは…ここさ」

そう言っつて制服のポケットからトランプを取り出す。

「な、ならこのトランプは」

「ああ、俺が用意した特別製だ」

「特別製…?」

「あ！雄二！見てよ、コレ！」

そう言っつてカードの束を見せる明久。

「…全部、キングやクイーン、ジャック…だと…!？」

ムツツリーニが言った。

羊一はさらに説明する。

「そう、つまりそのカードの束から引く限り…小さな数などでやしないんだよ!」

「でも、それならどうして羊一のカードはそんなに小さな数なのさー」

「ああ、それは…おっと」

そう言う羊一の制服の裾から一枚のカードが落ちる。

『き、キタネエーッ!』

「フフフ…」

とても黒い顔で笑う羊一。

三人は、異議を申し立てようとしたが…

「あ、終わっただんですか？」

「ああ、残念だが負けた…姫路。この三人に弁当をあげてやってくれ」

「わかりました。…ハイ、どうぞ」

そう言って、ちょっと離れた所の弁当を持ってくる瑞希。

「…た・べ・る・よ・な？」

『…ハイ』

そう言って弁当箱を受け取る三人。

「いやあ、残念だな。姫路の弁当が食べないなんて！」

『…野郎…!!』

羊一に殺気をぶつける三人だった。

しかし…

「はい、コレは黒峰君の分です」

「…へ？」

そう言つて羊一にタツパーを渡す瑞希。

「本当は、デザートなんですけど…お弁当の代わりにどうぞ」

「あ、いや、俺は」

『た・べ・る・よ・な？』

「…ハイ…」

羊一が泣きながらタツパーを受け取る。

「あの、黒峰君。なんで泣いてるんですか？」

「…嬉し涙さ…ああ、姫路」

「あ、ハイ。なんですか？」



「ちょっと、保健室の夏月先生に伝言を頼む」

「ハイ、いいですよ」

「ああ、『またよろしくお願いします』って伝えて」

「？ わかりました」

「多分、めっちゃ渋ると思うけど、『後で何でもします』って言うてくれ」

「わかりました。じゃ、ちょっと行ってきます」

そう言って屋上を出ていく瑞希。

「…これで多分死にはしない…と思いたい…」

羊一はそう言って三人を見る。

「…結局、全員食べることになっちゃったね…」

「…ああ、あの戦いは何だったんだろうな…」

「…無駄だった」

「ああ、盛大にな…」

四人はそう言った後、深く深呼吸をして、言った。

『……………いただきますっ！！！！』

その後、瑞希に伝言を受けて、不機嫌そうな夏月先生によって屋上の四つの死体が発見された。

## 第八問（後書き）

こんな感じですよ。

感想や指摘をいただけるとありがたいです。

これからも読んでやってください。

## 第九問（前書き）

第九話です。

今回、あの人に妙なフラグっぽいのを立ててみました。  
では、どうぞ。

## 第九問

「ここは…何処だ…？」

羊一は見覚えのない場所に立っていた。

辺り一面、真っ暗闇。

しかし、なんとなくの気配でもものすごく広い場所であるわかる。

羊一は周りを見回す。

やはり何も見えない。…と。

「よお、兄ちゃん。何やってんだ？」

「うおおっ！？び、びっくりした」

暗闇からいきなりオッサンが現れた。

羊一は、現れたオッサンを観察する。

オッサンは三十代くらいで、やせていて、なぜか作業着姿だった。

「どうした、兄ちゃん。こんなところぞ？」

「あ、いや、ちょっと道に迷いまして…」

「あ、そうなん。じゃ、こっちだ」

そう言っただけで歩きだすオッサン。

羊一は慌ててあとに続く。

「しっかし…兄ちゃん。その若さで何やったん？」

「は？何がすか？」

オッサンの問いに意味が解らず聞き返す。

「またまた隠すなって。ここにくるなんて、よっぽど悪いことしてたんぞ？」

「…あの、スンマセン…こっつて…何処すか…？」

かなりイヤな予感がしながら聞く。

「……? 地獄だけど」

……

「だらっしゅあっ!?!」

「お、気がついたか……」

羊一が勢いよく起き上がるとそこは見覚えのある保健室のベッドの上だった。

目の前には夏月先生もいる。

「ここは……地獄ですか?」

「……何なら、今から送り返してやるっか……?」

「滅相もございませんっ!!」

ベッドの上で土下座をする羊一。

夏月先生はそれを見て舌打ちをして言う。

「チツ…まあ、いい。さつさと教室に行け。午後もテストだろう?」

「あれ?テストって午後も?」

「お前な…Fクラスは明日の午前までテストだぞ。自分の受けるテストぐらい覚えておけ」

「…スンマセン」

本気であきれた羊一。

と、羊一はベッドから下りた時自分の体調が少しよくなっていることに気がついた。

「あれ?疲れがとれてる」



「ああ、お前が寝てる間にビタミン剤注射しといた。体調も少しはマシになっただろう」

そう言う夏月先生。

「マジですか！イヤ、何やかやで夏月先生って優しいっすねえ」

「っ！？だ、誰がだ！」

思わず、声が裏返る先生。

心なしか、顔が赤い。

その反応を見て羊一の中の意地悪心がうずいた。

「あれ？照れてんですか？」

「わ、私は照れてなどっ！」

「そうですか？」

羊一はニヤニヤしながら続ける。

「校内で人気なのも頷けます。こんなにモテてるのに何で彼氏つくらないんですか？」

今度はウザい女子高生口調でせめる。

「そ、そんなもの！」

「あ、まさか…誰か他に好きな人でもいるんすか？」

と、冗談で言ってみる羊一。

「っ！！」

しかし、先生は先程よりもさらに顔を赤くして黙りこむ。

「へ？その感じ…もしかして、マジで？」

予想外の事に思わず演技を忘れる羊一。

すると…

「フ、フフフ…黒峰え」

なにやら先生の背中に黒いオーラが見える。

「ヤベエ…やり過ぎた…」

「そうか…そんなに死にたいか!!」

「遠慮するっす!!」

そう言っつて保健室から逃亡する羊一。

その後ろからは何かが破壊される音が断続的に響いた。

羊一はそのまま教室に逃げ帰り、先に復活していた明久達とテストを受けた。

………

そんなことがあった日の放課後。

Fクラスの教室にはいつものメンバーが残っていた。

雄二が今後について説明するためだ。

「次の試召戦争の目標はBクラスだ」

「え、Bクラスなの？」

雄二の言葉に美波が驚きの声を上げる。

「ああ。正直、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

雄二らしくない降伏宣言。

しかし、Aクラスの上位グループ…特に代表の霧島翔子の戦力はケタ違いだ。

Fクラスの点数ではまず勝ち目はない。

「なら、最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんなことはない。あくまでも目標はAクラスだ」

雄二は美波の言葉を否定する。

雄二の言葉に首を傾げる一同。

「Aクラスは一騎打ちに持ち込む」

「…どっやって」

ムツツリーニが聞く。

「ああ、そのためにBクラスを使う」

雄二はそう言って説明を始める。

「まず、下位クラスが負けたら設備がどうなるか知っているな？」

「え！？えーと…」

「…姫路、明久に教えてやってくれ…」

あきらめたように言う雄二。

「下位クラスは負けると設備ランクを一つ落とされるんですよ」

「そう、つまりBクラスならCクラスの設備になるわけだ…では上位クラスが負けた場合は？」

雄二の言葉に羊一が答える。

「たしか…相手クラスと設備が入れ替わるんだろ？」

「そう、それを使ってBクラスに設備入れ替えを盾にAクラスを攻めさせる」

「なるほど。Bクラスは最低クラスの設備より、一つ下の設備で済む方を選ぶだろうな」

雄二は説明を続ける。

「それをネタにAクラスと交渉する」

Aクラスとしては何の得にもならない戦いはしたがらないだろう。

「じゃがそれでも問題はあるじゃろう。」

Aクラスとしては試召戦争の方が一騎打ちよりも確実じゃからな…  
それに」

秀吉が瑞希を見て言う。

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？」

「ああ、そうだな。姫路がこっちにいるのは相手にはバレてるだろうな」

秀吉の言葉を受けて羊一も言う。

「俺も一応、Aクラス並だが…トップらへんのヤツらには敵わないしな」

「それに関しては考えがある…心配するな」

「…まあ、考えがあるならいいけど…」

雄二の言葉に明久が言う。

「まあ、とにかくBクラスとやるぞ…そこで明久」

「何？」

「ちょっと今からBクラスに宣戦布告してきてくれ」

「断る。雄二がやればいいじゃないか」

雄二と明久が揉めだす。すると…

「…明久。その役割、代わってやろうか？」

「えっ？羊一、いいの？」

羊一が明久に提案した。

雄二がそれを聞いて驚いたように言う。



「珍しいな。お前がそんなこと言っなんて」

「ああ、ちょっと…たまには良い事もしないとマズイなと思っただけだ…」

「？ まあ、よろしく頼む」

雄二は羊一という言葉に首を傾げながらも送り出す。

「ああ、ちょっと行ってくる。皆、先に帰っていいぜ」

「わかった。じゃあ、またな」

「じゃ〜な〜」

そう言って教室を出てBクラスに向かう羊一。

「え〜と、Bクラス、Bクラス…と、これが」

Bクラスの教室の前に着いた羊一はドアに手をかけてためらいなく開ける。

「ちわ〜、みかわや…じゃなくて、Fクラスです」

中にはまだ何人か人が残っていた。と、その中の一人が羊一に近づき話しかけてくる。

「何だ、Fクラスごときがここに何か用か？」

「そう言う、見るからに性格の悪そうな小物っぽいアンタは何者？」

「な、何い!？」

羊一の言葉に激昂する小物（仮）

「俺はこのBクラスの代表の根本恭二だ！」

「あ、アンタが代表？ちょうどよかった」

「ああ？」

根本と名乗った小物（仮）は不機嫌そうに言った。

「何をそんなに不機嫌そうなんだ、小物（仮）君？」

「名前が違う！？訂正しろ！！」

「ああ、ゴメン。間違えた。え〜と、小物（真）君」

「誰が括弧の中を訂正しろと言った！？根本だ！」

「わかった。今度は間違えない。根本（小物）君」

「合わせるなっ！！一番消さないとならないのが丸々残ってるじゃねえか！」

「いや、なぜか脳が覚えるのを拒むんだよねえ…で、誰だっけ、君？」

「根本だっ！ね・も・と！！」

「わかった！小物（仮）君だな！」

「最初に戻ってるうっ！！？」

頭を掻きむしる根本（小物）。

と、見かねた他のBクラス生徒が話しかけてくる。

「あの、結局…何しに来たの？」

「おお、そうだった」

ようやく、本題に入る羊一。

「明日の午後から試召戦争をBクラスに申し込みます。以上お  
さいなら」

「ま、待てえ！？まだ帰るなあ！」

さっさと帰ろうとする羊一を根本（仮）が引き留める。

「何か？手早く済ましてね？」

「何でそんなにデカイ態度なんだ…ま、まあ、いい」

根本（面倒なので次から普通）が気を取り直して言う。

「ふんっ！FクラスごときがBクラスに勝てるわけがないだろう。そんなことも解らないほどの馬鹿らしいな、お前らは！」

「お、まさに小物の名に恥じぬセリフだ。よし、お兄さんがアメをあげよう」

「いらんわっ！？ていうか同い年だろうが！」

「ほら、アメだよ。食ったら何か胃の中を這いまわる感触に襲われて悶絶する事になるけど」

「それは絶対にアメじゃないだろっ！？」

「スキありっ！ほいっ」

「ガっ！？」

根本がツッコミを入れて大口を開けたところにアメ（？）を無理矢理突っ込む。

ゴクンっ！

「ああああっ！？呑んじまったあ！？」

「あらら、知らね、俺、知らね」

「て、てめえっ…！うがぁ！？は、腹がぁ！？」

「ほね、さっさと病院にいかないと」

「あ、く、くそぉ！覚えてるお…あ、腹がぁ…」

根本はそう言い残し走り去る…つもりだったが、腹痛のため、内股で歩いて行った。

「フッフ…あの「ザ・小物」の代名詞のセリフまで言ってくれろとは…クククっ…ヤベエ、癖になりそうだぜい…」

後には満足げにイイ笑顔をした羊一とそんな羊一にドン引きしてい

るBクラスのメンバーが残った。

「おっと、もうこんな時間だ。じゃ、試召戦争のこと、よろしく」

そう言って去る羊一。

「…俺、アイツにだけは目をつけられないようにしよう」

「…私も…」

そうひそかに心に誓ったBクラスの生徒達だった…

## 第九問（後書き）

という感じでした。

根本君にイロイロしちゃってます。ファンの方、ごめんなさい。ちよっと性格違ってるかも？感想、指摘など、いただけるとありがたいです。

では、できればまた読んでやってください。



## 第十問（前書き）

第十問です。

ついに話数が二桁になりました。  
感想をくれた方ありがとうございました。

これからも読んでやってくださるとありがたいです。

## 第十問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

ここは、Fクラスの教室。

その教壇に立った雄二が皆をねぎらう。

昨日から引き続き、今日も午前までテスト。

今はテストが終わって昼食を取ったところだ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

モチベーションは全く下がっていない。

「今回の作戦のキモは敵を教室に押し込むことだ。そこで負けられない渡り廊下戦は姫路に指揮をとってもらおう！」

「が、頑張ります」

『うおおーっ!』

一緒に戦えるためか前線部隊の士気は最高潮だ。

「副指揮は羊一だ!」

『……………』

「おい、お前ら。そのテンションの落差はどういうことだ」

…雄二の言葉に若干士気が下がってしまった。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。

ついにBクラスとの試召戦争が始まった。

「よし、行ってこい! 目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー!』

雄二の声が響く中、Fクラスの面々が一斉に走り出す。

今回の作戦はとにかく勢いが重要となるため、Bクラスへと向かう廊下を全力で駆ける。

「いたぞ、Bクラスだ!」

「高橋先生を連れているぞ!」

正面を見るとBクラスのメンバーが十人程度で歩いてくる。

「生かして帰すな!」

こうして、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス

野中長男…総合 1943点』

VS

『Fクラス

近藤吉宗…総合 764点『

…この実力差である

圧倒的な実力差に第一陣がごとごとくやられていく。

「マズイな。めっちゃ、やられてるじゃん」

「何、人事みたいに…羊一も戦ってよ」

羊一に明久が言う。

「無理だな」

「何で!？」

「いや、俺の点数、今こんなだし…」

『Fクラス

黒峰羊一…数学 45点』

「雑魚だっ！？ど、どうしてそんな点数に！？」

「いや、昨日の午前中は死にかけてたからな」

羊一達がそんな会話をしていると、

「お、遅れ、まし、た…。ごめ、んな、さい…」

息を切らして瑞希がやってきた。全力疾走について来れなかったのだろう。

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かの声が響き、Bクラス生徒の目つきが変わった。

明らかに瑞希を警戒している。

「姫路、来たばかりで悪いが頼む」

「は、はい。行って、きます」

「ああ、ただ、サポートは任せてくれ」

「わ、わかりました。よろしく願いします」

そのままトタトタと戦場に向かう瑞希。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子がFクラス姫路さんに数学勝負を申し込めます！」

「律子、私も手伝う！」

「あ、よろしく願いします」

瑞希一人にたいして二人がかり。よほど警戒しているようだ。

「まあ、大丈夫だろうが…念のため」

羊一も参加する。

『サモン！』

喚声に応じて魔法陣が展開。

おなじみの召喚獣が顔を出す。

「おお？姫路、腕輪あるじゃん」

「あ、はい。数学は結構解けたので」

瑞希の召喚獣の左手首には綺麗な腕輪をしていた。

「そ、それって!?!」

「私たちが勝てるわけないじゃない!」

向こうの二人がそれを見て顔色を変える。

それはそうだろう。なぜなら…

「じゃ、いきますね」

瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

「ちょっと待ってよ!?!」

「律子!とにかく避けないと!」



大げさなくらい横に跳ぶ敵二人の召喚獣。

その直後、瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Fクラス

姫路瑞希：数学 412点』

VS

『Bクラス

岩下律子&菊入真由美：数学

189点&151点』

一定以上の点数を取った人の召喚獣には特殊能力を使える腕輪が装

備される。

「う、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

残った敵にも、大剣を振り下ろし、決着をつける。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「姫路瑞希、やはり危険な相手だ！」

Bクラスの残り八人に驚愕の表情が浮かぶ。

「…姫路、強いな」

「そ、そんなこと…み、皆さん、頑張ってください！」

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

瑞希の指示らしくない指示にしかし、Fクラスの面々には効果絶大だ。

「よし、姫路は下がってくれ。後は他のメンバーでやっていくぞ！」

『おっっ！』

羊一の指示でFクラスの前線部隊が攻め込む。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退しろ！」

そう相手が徐々に下がり始めた。

このまま行けば作戦はうまくいくだろう。

「よし、イケるな…明久、秀吉！」

「ん？」

「何じゃ？羊一」

羊一は二人を呼ぶ。

「お前ら、ちょっと教室に戻ってくれ」

「え、なんで？」

羊一の言葉に疑問の声をあげる明久。

「Bクラスの代表だが…」

「うん」

「…え、何だっけ…ね、何とかってやつ…」

「それは…根本のことか？」

「ああ、それ」

「え、根本ってあの根本恭二？」

「そう、あの卑怯で有名な小物だ」

「羊一には言われたくはないだろうけど…用心に越したことはない  
ね」

「そうじゃな」

「ああ、よろしく頼む」  
そう言っつて二人は教室に戻つて行つた。

.....

「むう、どうしたもんかね……」

羊一がつぶやく。と、

「羊一、待たせたね！」

「おう、帰つて来たか！」

明久が教室の方から走つて来る。

「明久、教室はどうだった？」

部隊に戻つた明久に教室の様子を聞く。

「羊一の予想道理、酷い有様だったよ」

「やっぱり、やられたか」

「うん。ちゃぶ台は穴だらけだし、シャープや消しゴムは折られた  
よ」

「うわ、地味な嫌がらせだな。さすがといつか、なんといつか  
…」

呆れた様子 of 羊一

「だね。こっちの方はどう？」

「ああ…島田が人質にとられた」

「なっ!？」

羊一の言葉に驚く明久。

「相手は残り二人なんだが…」

「どっする、羊一？」

「うーん…一応、考えはあるんだが…」

「？何か問題があるの？」

考え込む羊一に、明久が聞く。

「……これ、やったらイロイロと…な」

珍しく歯切れの悪い羊一に焦って明久が言う。

「羊一、何を迷ってるのさ！考えがあるならやるつよ！」

「…明久、一つ聞きたい」

「何？」

「俺の作戦…お前は絶対に達成できるか？」

真剣に話しかける羊一。

明久は羊一の様子に気圧されつつ、答える。

「…わかった。達成してみせるよ」

「…よっしゃ！明久、いくぞ！」

「うん！」二人は部隊の人垣を抜ける。

すると、Fクラスのメンバーが、二人のBクラス生徒の前に攻めあぐねていた。

その二人に美波が捕まえられていた。

足元には倒れている美波の召喚獣の首筋に相手の剣がそえられている。

「島田さんッ！！」

「そこで止まれ！」

二人の内の一人が叫ぶ。

「それ以上近寄ると召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにするぞー！」



Fクラスの数少ない女子を人質にして士気をくじく作戦のようだ。

そして、その作戦は今のところ成功している。

「羊一！」

「ああ、任せろ！」

羊一はそう言って何処からともなくメガホンを取り出し、電源を入れる。

『あゝ、君たプアアアン！』

「羊一！ハウリングしてる！」

『おっと、失礼。コホン…君達は完全に包囲されている！』

「あの、黒峰君…今は授業中なのですが…」

立ち会いをしている長谷川先生が注意するが、羊一は全く聞いている。ない。

『すぐに彼女を離しなさい！  
さもなければ、ある作戦を実行しなければならない！』

「作戦だと!？」

「騙されるな!ハツタリだ!」

「そつか…ならば仕方ない…」

羊一は大きく息を吸い、言う。

『総員突撃用意いーッ!』

『ええええええッ!?!』

その場にいた全員、驚愕だった。

「ちょっと!黒峰!ウチを見捨てる気!?!」

いち早くシヨックから立ち直り、怒り始める美波。

しかし、羊一はそんな美波に声をかける。

『島田！この作戦は明久の発案だ！』

「うえっ！？な、何を言ってる」

『須川！明久を黙らせる！』

「何をする気っ、す、須川君！放して！僕はアイツを止める必要が  
っ！」

明久を黙らせ、続ける。

『しかし！明久は条件を提示している！』

「…条件？何よ？」

『ああ、今なら大抵のことなら望みを聞くそうだ』

「えっ？」

「んんっ、んんー！」

さるぐつつわを噛まされ、呻く明久。

多分、「そんなこと言ってない!」と言っているが、誰にも伝わらない。

『さらに、これからは島田のことは「美波様」と呼ぶことも辞さないとのこと!』

「!?!」

羊一という言葉にかなり気持ちが悪らついた様子の美波。

「さ、さっきから何を言って」

敵が慌てた様子で言葉を発そうとした。

その瞬間、羊一の目が光った。

『よっしゃあ、今だ!総員突撃い!!』

「え、ちよつ、待っ!?!」

羊一の号令の下、一気に攻め込むFクラス。

残っていた二人は一瞬で蹴散らされた。

「ふう、これで一件落着！」

「なわけあるかあっ！！！」

「仕事終えてメガホンを下ろす羊一に自力で拘束を解いた明久がツッコむ。」

「な、なんてことをっ！」

「何言ってる。お前に最初聞いたろ？『絶対、作戦を達成できるか』って」

「こんな作戦とは聞いてない！」

「んなことは関係ない」

「酷すぎるっ！？」

「まあ、気にするな、明久：おお、島田」

「ひい！？」

羊一に詰め寄る明久の背後に美波が近寄って来た。

「吉井い〜？よくもウチのことを、見捨ててくれたわねえ…？」

「し、島田さんから今まで感じたことのない殺気が！？」

美波の殺気にビビる明久。

「さっきの話…覚えてるわよね？」

「い、いや、あれは羊一が勝手に…」

「覚えてるわよねえ！！」

「あ、はい…覚えてます…」

美波はその言葉に殺気を納め、悪戯っ子のような顔をする。

「そっか〜、なんでもするのね？」

「お、お手柔らかに…島田さん」

「（キッ…）」

「あ、いや、美波様」

「……『様』はいらないわよ……そうね、とりあえず今度の休み駅前の「ラ・ペデイス」でクレープ食べたいな」

「おのれ！僕を餓死させるつもりかッ!？」

「……………」

「ああ、奢ります！おごらせていただきますッ!！」

「さ、アイツらはほつといてBクラスにいくぞ」

そんな会話をする二人を置いて羊一は指示を与えていく。

今日の試召戦争も大詰めだ。

……………

「はあ、疲れたよ…」

「？ 明久、何をそんなに疲れた顔してんだ」

「…羊一がそれを言う…？」

明久がぐったりとしながら言う。

今はBクラス戦の後のFクラス教室。

Bクラスを教室に押し込んだところで今日は終了。

雄二がBクラスと協定を結んだため現在は休戦中だ。

「でも、あの根本君が休戦を申し込んでくるなんて…」

「まあ、またくだらないこと狙ってんだろ」

明久は不安そうだが羊一は興味なさそうに言う。

と、ムッツリーニが教室に入ってきた。

彼は今日、情報係だったため戦闘には参加していなかった。



ムツツリーニは雄二に近寄って報告する。

「…何？Cクラスが試召戦争の準備をしているだと？」

「（コクコク）」

ムツツリーニの報告に雄二が顔をしかめる。

「漁夫の利を狙うつもりか…いやらしい連中め」

Fクラスにとって、Bクラス戦の後、Cクラスと戦う余力はない。たとえ、この戦争に勝利したとしても、その後負けてしまっただけでは意味がない。

「雄二、どうするの？」

「そうだな…」

明久の言葉に考える雄二。

そして、

「Cクラスと協定でも結ぶか」

そう言った。しかし

「いや…やめといた方がいいと思うぜ?」

羊一がその意見を否定する。

その場にいた全員が羊一に視線を向ける。

「何でだ、羊一」

雄二が疑問をぶつける。

「いや…核心は無いんだが」

羊一は皆を見回し説明を始める。

「Cクラスの代表は小山って女子なんだが…Bクラスの代表の彼女らしい」

「！それは本当か!？」

雄二が驚きの声をあげる。

どうやら、知らない情報だったらしい。

「ああ。しかもこのタイミングでの試召戦争の準備。そして、この休戦協定……」

「ああ、怪しいとまではいれないが気になるな……」

説明に考え込む雄二。

「しかしCクラスとの試召戦争を避けたいのは事実じゃ」

「(コクコク)」

「そうですね……ぶっしまっしょっ」

秀吉の言葉にムツッリーニや瑞希も考え込む。と、

「いや…多分大丈夫だ」

羊一がつぶやく。

再び、皆の視線が羊一に集まる。

「ようは、BクラスとCクラスとの間の信頼関係を崩せばいいんだろ？」

「そりゃそーだが…」

「なら任せろ…フッフ」

羊一は極めて悪い笑みを浮かべる。

「…秀吉、羊一あの顔…」

「そうじゃな。あの顔は…また口クでもないことを考えておる顔じゃ」

「…また誰か犠牲者が…」

「諦めるのじゃ…明久よ。今、ワシらにできるのは」

「そつだね。僕らにできるのは犠牲者の冥福を祈るだけだ」

二人はそう言っつて、祈り始めた。

## 第十問（後書き）

こんな感じですよ。

次あたりでBクラス戦を終わらせたいとは思っています。

感想、指摘などをいただくとありがたいです。

第十一問（前書き）

十一話目です。

じじいじいす。

## 第十一問

「ねえ、根本君。本当にFクラスは来るの？」

「ああ、必ず来るさ」

そう言ってニヤリと笑う根本。

ここはCクラス。

試召戦争の準備をしているため、代表の小山友香を含め多数の生徒が残っていた。

しかし、なぜ、Bクラス代表の根本がCクラスに居るのか…それは…

「Fクラスにとって今、Cクラスを敵にまわすことは得策じゃない。必ず不可侵条約を結びに来るはず…」

根本はそこで一度言葉を切りニヤリと笑い、言う。

「そこでFクラスとの協定が生きてくる…」

FクラスとBクラスは明日まで『試召戦争に関する一切の行為を禁



止する』協定を結んでいる。

そこで彼女である小山が代表であるCクラスに試召戦争を準備させる。

FクラスとしてはB、Cクラスと連戦は避けたいはず。必ず代表である雄二が不可侵条約を結びに来る。

そこで、

「そこで条約を結びに来た坂本を協定を盾に攻め、首をとるってわけだ」

根本は二人の話が聞こえない位置で所在無さに立っている長谷川先生を見る。

長谷川先生はそのためにあらかじめ呼んでおいた。

「準備は万端。後は待つだけってわけね」

「ああ、Fクラスには精々、悪者として惨めに散ってもらおうぞ」

そう言ってニヤリと笑いあう二人。

ある意味お似合いなカップルだが…嫌な光景である…

と二人が悪たくみをしていると突然、教室のドアが開いた。

「ああ〜っ!!こんな所にいた〜!!」

『はあ?』

しかしドアの前に立っていたのは二人の期待した雄二ではなく…一人の女子生徒だった。

「もう〜。こんな所に居るなんて探しちゃいました〜」

彼女はそう言っただけで呆然としているCクラスの面々の間を歩き、根本に話しかける。

「へ?」

「ほら、一緒に帰りましょ?」

と言って少女は根本の手を取り腕を組む。

「え、いや、あの」

突然の事に頭が追いつかない根本。

すると

「……ちよつと」

その様子を見ていた小山が低いトーンで言う。  
額には青すじが…

「…この女、誰？」

「ゆ、友香！？い、いや俺にも」

「私は、恭二君の、彼女です！」

「（ビキッ！）」

小山の額にもう一つ、青すじが増えた。

「ち、ちが」

「ねえ、恭二君？『今の彼女は別れて、付き合っ』って言うてくれませんか！」

「（ビキ、ビキイ！）」

「あ、あと、『今の彼女は顔は良いけど性格最悪、マジありえねえ』とも」

「（ビッシイッ！！）」

「ゆ、友香！？ご、誤解だあ！こんなヤツ、知らない！」

怒りのためにプルプル震え始めている小山に必死に弁明する根本。

しかし

「し、知らないなんて、酷い！私に…あんなコトまで、させておいてっ…！」

「んなあ!？」

根本の言葉にそう言って泣き崩れる少女。

『…二股かよ』

『ああ、しかもヤバくなったら知らないとシラをきる』

『…サイテー』

『ええ、女の敵ね』

まわりからヒソヒソと会話する声。

さらに絶対零度の視線が根本に突き刺さる。

しかし、少女の告白はまだ終わらない。

「『俺と付き合いたかったら、何でもやれ』って言って…私、嫌だ  
ったけど…仕方なく…」

『ザワ… ザワ… ザワ…』

「しかも写真まで…」

『！！ ザワザワザワザワッ』

『聞いたか、今の！？』

『ああ、強制的に、しかも写真までとは…なんて野郎だ…』

『くずだ、くずだとは思ってたけど、ここまでの変態だったとは思わなかったわ』

『ええ、同じ人類とすら思いたくないわね』

さらに騒がしくなるCクラス教室。

もはや、教室には根本の味方はいなくなっていた。

「根本君…ちよつとこの後、職員室に来なさい。イロイロと話したいことがある」

長谷川先生ですら、蔑みの視線を送っている。

「ち、違うつ！？俺は何もしてないっ！ゆ、友香！信じてくれえ！

「！」

そう言っつて小山に縋り付く根本。

「…………ふ」

「ふ、ふ『ふ』？」

「ふざけんなあ、こおの、変態やろおおおっ！……！」

「ギャアアアアアッ！？」

「死ね、死ねえ、！！」

「ち、ちよっ！？連続かかと落とすはっげばあっ！……？」

『小山！手伝っぜ！』

『ああ！コイツは生かしておけねえ！』

『死ね、この、ク……虫、この……』

『皆、掃除用具入れからモップを持って来たわ！これで殺りましょ  
う！』

見ていたCクラスメンバーも参加を表明する。

「皆…わかったわ！

皆でこの男に生きてることを後悔させてやりなさいっ！…！」

『イエス、マムツ！！！！』

この時、Cクラスは確かに、一つの目的のために団結した。

そう、根本恭二の抹殺という目的のために…

…数分後

ガラッ！

「二度と私の視界に入らないでっ！！！」



ビシヤッ！

「ゲブウ！」

「ふんッ」

ピシヤッ！

ボロ雑巾のようになった根本を生ゴミを棄てるように教室の外に蹴りだす小山。

その後、教室のドアをピシヤリと閉めた。

「な、何でこんなことに……」

全く意味がわからない様子で、廊下に倒れている根本。

とにかく治療が必要だ。

そう考えた根本は保健室を目指して歩きだす。

すると、

「あ、いたいた〜」

「!?! て、てめえ!」

先程、爆弾発言を連発し、根本をある意味社会的に抹殺した少女だ。

「てめえ、さっきは意味のわからねえ嘘つきやがって!」

根本はそう言いながら掴みかかるが、少女はヒョイと身をひるがえし手の届かないところに移動する。

「ていうか、てめえは誰だ!?! 俺はお前なんて会ったこともないぞ  
!」

「ひど〜い。わからないんですか〜?」

少女は笑いながら言う。

「だからわからねえよ! ウソつくんじゃないやねえ!」

「ウソなんてついてませう、ん！」

ガッ！

「うわっ！？」

また少女に掴みかかった根本は足をかけられて廊下に倒れた。

「私達、確かに会ったことありますよ？」

「だ、だから知らな」

「だ、か、ら、う、」

「ウソじゃねえって言ってんだろ？」

いきなり少女の印象がガラッと変わった。

声色が一気に変わり、口調も先程とは違い荒くなる。

何より、表情がまったく違う。

ニコニコ笑顔が今では邪悪なニヤリ笑いだ。

「お、お前、黒峰かつ！？」

「大正解」

驚く根本に少女…羊一が拍手を送る。

「しかし酷いなあ、根本くうくん」

羊一はニヤリ笑いのまま言う。

「協定を破るなんて。試召戦争に関する一切のことは禁止したじやないか」

「づぐつ！？」

「まあ？協定違反を盾に攻めても、いいんだけどお」

「！？」

羊一の言葉に焦る根本。

しかしそれを無視して羊一は言う。

「ま、そんな、くだらねえことはしないけどね。…どっかの小物と違つて」

「うぎっ！？」

「まま、どうでもいいが、そんなこと」

「……………」

もはや何も言えなくなった根本。

「じゃ、また明日。あ、長谷川先生え、根本君ここに落ちてます」

「おお、ありがとう。  
君も大変だったね…根本君のことは先生達に任せなさい。必ず真人間にしてみせるぞ」

長谷川先生はそう言って魂の抜けた根本を職員室に引きずっていった。

.....

「と、そんなところだな」

『.....(汗)』

翌日、いつものメンバーが揃ったところで昨日の報告をする羊一。

それを聞いて皆ドン引きである。

しかし、雄二がなんとか話を進める。

「ま、まあ、これでCクラスのこととは考えなくて良さそうだな」

「そうかい。そりゃよかった」

「ていつか.....」

明久は昨日の羊一の女装を思い出す。

新学期初日にも羊一の女装を見たが、昨日はまったく違っていた。

羊一曰く、「本気出せばあんなもん」とのこと。

確かに本気（+秀吉の協力）の羊一には不覚にもちよっとときめいてしまった。

「ムツツリーニも写真撮ってたし」

「（ブンブンっ！）」

明久の言葉を必死に否定するムツツリーニ。

「…ちなみにあの写真の人気は？」

「…なかなかの売れ行き」

即答だった。

「まあ、羊一、ご苦労だったな」

雄二はヒソヒソ話している二人を無視して話を進める。

「作戦もうまくいったし、俺達もBクラス戦に集中するぞ」

「でも、根本はもう再起不能じゃない？」

「うーん、そのはずだが……」

美波の言葉に羊一は顔をしかめる。

「あそこまでやりゃ、今日の朝にでも降伏するかもと思ったが……まだ、何かあるのかもな」

「そうか、姫路さんも気をつけてね？」

「……………」

「姫路さん？」



「あ！は、はい！何ですか？」

明久に話しかけられ驚く瑞希。

「姫路さん大丈夫？体調悪いの？」

「だ、大丈夫ですっ！！」

「あ、そ、そう？なら頑張ろうか」

「は、はい…」

瑞希はそう言ったがどこか沈んだ表情をしている。

明久は気になりはしたが、

「お、そろそろ時間だな…皆、Bクラス戦の準備だ！」

雄二の言葉に頭を切り替えた。

Bクラスとの決着はもうすぐだ。

『準備、完了しましたッ!』

「よし、昨日の決着をつけてやれっ!全員、出撃!！」

『おっっっ!!!』

FクラスメンバーがBクラス教室に向けて走り始めた。

「……………びっ、っ、っ…」

…一人の少女の苦悩に気づくこともなく……………。

## 第十一問（後書き）

こんな感じですよ。

…羊一がイヤなヤツすぎたかも

…根本君ファンの方、ごめんなさい。

今回でBクラス戦、終わらせるつもりでしたが、延びてしまいました。すいませんです。

これにこりず次も読んでやってください。

## 第十二問（前書き）

第十二問です。

『羊一よ たまには良いこと してみない？』

作者、心の俳句。

というわけで、たまには正方行な羊一です。

## 第十二問

「ドアと壁をうまく使っんじゃー！戦線を拡大させるでないぞッ！！」

秀吉の指示がとぶ。

その声に応えるようにFクラス生徒がBクラスの教室のドア付近を取り囲んでいた。

ちょうど教室にBクラス生徒を閉じ込める形になっている。

場所はBクラス教室前。

現在、Fクラスは雄二の作戦通りBクラスの教室の入り口を固め、敵を中に閉じ込めていた。

今のところ、作戦は成功していた。

しかし…

「…姫路さん、どうしたんだろう…?」

明久は自分の部隊に指示をしつつ、後ろに居る瑞希の様子を観察した。

瑞希の様子が明らかにおかしい。

彼女は前線部隊の総司令官だが、指示を出さないどころか戦闘にも参加せずにと俯いている。

今は補給テストにいった羊一に代わり秀吉が副司令として指示を出して踏ん張っている。

「やっぱり、おかしい…一体何があったんだ、姫路さん…」

明久が一人悩んでいると、

「明久！大丈夫だったか？」

「羊一！テストが終わったんだね」

羊一が補給テストから帰ってきた。

羊一は周りを見回して状況を確認する。

「…姫路は、まだダメそうだな…」

「うん。羊一がテストにいった後もずっとあの調子だよ」

「チツ！……こりゃ、何か、されたのかもな……」

「え！？姫路さん、何をされたの？」

「それがわかったら苦労しねえって……」

羊一がため息をつき、言った。

すると、二人のところに秀吉が走って来る。

「明久、羊一！まずいことになったのじゃ！」

「秀吉、どうかしたの？」

「うむ、右側出入口口教科が現国に変更になったの」

「何っ！？数学教師はどうした！？」

「どうやらBクラス内に拉致されたようじゃ」

「くそっ！まずいな…」

秀吉の報告に羊一が悔しそうに顔をしかめる。

と、

「わ、私が行きますっ！」

瑞希が名乗り出る。

しかし、

「あ……………」

瑞希はどこかを見たかと思うと、また俯いて黙ってしまふ。

「…姫路さん」

「明久…ちょっと来い」

明久が話しかけようとしたところで羊一が明久の腕を掴んで教室前から少し離れる。



Bクラス前の喧騒から離れたところで羊一は明久にだけ聞こえるように話しかける。

『もしかしたら、姫路がああなった原因がわかったかもしれん』

「え、本当っ!?!」

『バカっ!声がかいっ!』

『う、ゴメン』

『実は、さっき姫路が見てたのは…根本だ』

『ええっ!?!』

『いや、正確には根本が持ってた「手紙」を見てた。明久。お前、何か心当たりがないか?』

『「手紙」…』

明久は少しの間、目を閉じて記憶を探った。

『！　もしかしてっ！』

『何か知ってんのか？』

『うん…詳しくは言えないけど、その手紙は姫路さんにとってとても大事なモノなんだ』

明久の脳裏に数日前の放課後の出来事が浮かぶ。

放課後、教室に忘れ物を取りに来た明久は一人残っていた瑞希に出会った。

瑞希は慌てて書いていた手紙を隠そうとしたが、明久は中を見てしまった。

その手紙は、ラブレターだった。

その後、明久が敗北を受け入れ「良い返事が貰えるといいね」と言った時、

「はいっ！」

瑞希はとても嬉しそうに笑ってそう言った。

根本の持っているのはその時の手紙だ。

ギリツ…

明久は奥歯を噛みしめる。

根本はなんらかの方法であの手紙を手に入れ、それをネタに瑞希を脅しているのだろう。

『…なるほどな。それなら、昨日の協定も頷ける』

羊一が明久の様子を見てつぶやく。

『あの根本がわざわざ協定を提案したのは、既に姫路を無力化する方法があったから…』

そう考えると、あの協定はBクラスにとって圧倒的有利に働く…』

羊一はさらに続ける。

『てつきり昨日の作戦が本命かと思ってたが…しつかり、仕留められなかった時の対策はとつていやがったってわけか…』

羊一はそこで俯き…顔を上げた。

「…やってくれたなあ、根本。すっかり騙されたぜえ…」

再び、顔を上げた羊一の顔は見ていた明久がちょっと見とれてしまふような綺麗な笑顔だった。

「明久」

「な、何？」

羊一に話しかけられ、現実には引き戻される明久。

「その手紙…取り戻したいか？」

「…うん。絶対に…」

羊一の言葉に明久は真剣に答える。

「…そうか。…多分、お互いに考えてることは一緒だな」

「…うん、そうだね」

『あの野郎、ブチ殺す』

二人はそう言って走りだした。

.....

しばらくして、

ここはBクラス教室前。

羊一は腕を組み、雄二に報告しに行った明久を待っていた。

その顔は終始、笑顔だった。

しかし、一緒にいた秀吉はきがきではなかった。

羊一と幼なじみの秀吉は知っている。

彼があ顔をしている時は本気で怒っている時だ。

あ顔を見せた後、彼を怒らせた相手はたいてい酷い目にあっていた。

「秀吉、明久は戻って来たか？」

羊一がどこか不気味なニコニコ顔のまま話しかけてきた。

「う、うむ…あ！今、戻って来たようじゃ！」

そう言って、秀吉は廊下の向こうを指さす。

秀吉が示した方から明久が走って来ていた。

「羊一！」

「よう、明久。雄二は何て言ってた？」

「うん、『姫路の役割を代わりに果たせ』だつてさ」

「…なかなか、難しいことを言ってくれるな」

羊一はそれを聞いて笑顔を引っ込め、真剣な顔で考え込む。

雄二の作戦は先程、伝令によって伝わってきた。

しかし、その作戦には瑞希のような圧倒的な個人の火力が必要だった。

今の戦闘はBクラスの前後の扉の二カ所で行われており、場所の条件から一対一となっている。

これは少しでも時間を稼ぐためと、雄二の作戦に必要な行動だった。そんな状況で教室の奥に陣取る根本に近づくために入り口から一気に攻め込む。

それが瑞希の役割だ。

「…お前の考えは？」

羊一が明久に聞く。

「…一応、ある」

明久はそう言っつて自分の考えを説明した。

それを聞いていた羊一はとても面白そうにニヤリと笑う。

「面白れえ…なら、俺ができるだけ敵を引き付ける」

「わかった。頑張つて！」

「お前もな」

明久はそう言っつて走つて行つた。

羊一はそれを見て、自分はBクラス教室の左側の扉を目指して歩きます。



「さあて、俺は俺の仕事しますか…」

怠そうな声とは裏腹にその顔は楽しそうな笑顔だった。

………

「くう…まずい。もう限界だ！」

「堪えるしかねえ！踏ん張れ！」

「て言ったって…」

そんな会話が廊下に聞こえる。

場所はBクラス教室の左側の扉。

ここでは古典の竹中先生が居る。

そのため、文系が得意なBクラスにおされ気味だった。

そんな時、

「おい、援軍に来たぞ！」

羊一がやって来た。

「おお、黒峰！ありがてえ！」

「ああ、後は任せる！」

羊一はそう言って扉の前に行き叫ぶ。

「サモンツッ！！」

その声に応え、足元に魔法陣が展開、召喚獣が現れる。

「竹中先生っ！Bクラス斎藤が受けます！サモンツッ！」

相手も召喚獣を出す。

『Fクラス

黒峰羊一…古典 458点『

VS

『Bクラス

齋藤猛…古典 224点』

「な、なんて点だッ!？」

「これでも一応、成績はAクラス並でな」

羊一の召喚獣が背負っている本から辞典を取り出し、敵の召喚獣の頭を思い切り殴りつける。

キュボツ!!

「なあっ!？」

一撃で相手の召喚獣の頭が吹き飛んだ。

「く、よくも齋藤を!竹中先生!」

Bクラスの他の生徒が召喚をしようとする。

しかし

「させるかつ、オラァッ！」

羊一は召喚される前に召喚獣を使って扉を閉める。

「まだまだあ！」

さらに閉めた扉を召喚獣に殴らせる。

ズガンッ！！

羊一の召喚獣に殴られ、扉が真ん中から歪む。

『な、くそっ！開かねえ！』

Bクラスの生徒が扉に取り付き開けようとするが、歪んだ扉は動かない。

「よしっ」

羊一がガッツポーズをする。

「く、黒峰君、なんてことをっ!？」

竹中先生が慌てて召喚フィールドを解除する。

「何をしてるのですか!？これは問題に」

竹中先生が怒ろうと声をあげる前に羊一は素早く近づき、耳打ちする。

「…先生、ツラがズレてます」

「ッ!？」

先生は慌てて頭を抑えてトイレに走り去った。

「これでよし…お前ら!明久のところに行ってくれ!何故かは聞くな、行けばわかる!」

「わかった！皆、行くぞ！」

羊一は指示をして、今度は右側出入り口に向かった。

そこでは秀吉が現国で勝負をしていた。

羊一は秀吉に近づき囁く。

『秀吉！俺達はここですでできるだけ敵を引き付ける。やるぞ！』

『わかったのじゃ』

秀吉はそう言って頷く。

「先生！俺も召喚します！サモンッ！」

羊一が再び召喚をする。

『Fクラス』

黒峰羊一…現国

446点  
『』

「来たぞっ！黒峰だ！」

「いや、大丈夫だ。今は木下が戦ってるからそれが邪魔してヤツは俺達に攻撃できない」

「よし！まずは木下を倒せ！ヤツの召喚獣はもうすぐ倒れる！」

Bクラスの一人がそう言っつて秀吉の召喚獣に斬りかかる。

ズバツ！

「くっ！」

秀吉の召喚獣は攻撃を避けられず斬られ、片膝をつく。

『Fクラス

木下秀吉：現国

12点』

秀吉の点数はほとんど残っていない。

あと一撃喰らえば補習室行きは免れないだろう。

しかし

「やらせねえ……」

羊一の召喚獣の左手首の腕輪が光り輝く。

その光が秀吉の召喚獣を包み込む。

すると召喚獣の受けたキズが見る見る内に癒えていく。

点数も最大値まで回復している。

「助かったぞ、羊一よ」

「ああ…大分、敵も集められたな」

「ウム…時間もそろそろじゃ」

「そうだな。秀吉！敵は任せる。回復は任せる」



と、Bクラスの教室の壁がドンツと音をたてた。

しかし、Bクラス生徒の大半は羊一達に気を取られて気にしなていない。

羊一はそれを見てひそかに笑みを浮かべる。

と、その時

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいぜ」

根本が馬鹿にしたように言ってくる。

「ふん、この暑苦しさもてめえほど不快じゃねえぞ」

「はっ！負け犬の遠吠えにしか聞こえねえよ」

「猿山の上で騒いでるボス気取りの小物よりよほどいい」

「…てめえ、この状況が理解できてないみたいだな」

「何言ってるやがる。しっかり理解してるぞ」

羊一は一度言葉を切り、不敵な笑みを浮かべ言う。

「てめえがすっかり、追い詰められているのはなあ」

「はあ？何言ってるやがる。追い詰められてるのはお前らの方だろうが」

根本が心底、馬鹿にした声をあげる。

しかし羊一はあくまで不遜な態度を崩さない。

と、

ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！

「？　なんだ、さっきから」

根本がうつろさそうに顔をしかめる。

暑苦しい教室内という状況とも相まってかなりイラついているようだ。

「まあ、いい。おら！お前ら、さっさとそんな雑魚どもなんぞ片付けちまえ！」

根本がクラスメイトに怒鳴り付けるように指示を与える。

羊一はただ、黙って目を閉じた。

「けっ！ どうした！ 散々ふかしといて諦めたのかあ？」

根本が叫ぶが羊一は無視する。

そして

「プッ……」

思わずというように吹き出した。

「何がおかしいー！」

「いやあ、てめえが無様に負けるところを想像したらな」

「ワケのわからねえことを」

「ほれ、聞こえるだろう？」

羊一は根本を無視して耳に手をあて、言った。

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

壁からの音はさらに激しさを増し、壁が大きく震えている。

「な、なんだ？」

「わからねえのか？なら、教えてやる…」

「てめえの破滅の足音ってヤツね」

「だぁぁーっしゅぁぁーっ！」

ドゴオッ

羊一の言葉と明久の召喚獣がBクラスの壁を破壊するのは同時だった。

「んなっ!?!」

根本は驚きに顔をひきつらせる。

Bクラスの生徒は今、大半は教室の出入り口付近に集められている。

そのために根本の周りは今、手薄だった。

『よっしゅ! 吉井に続け!』

『根本の首を取れ!』

さらに明久が開けた穴からは続々とFクラスのメンバーが入ってきていた。

それはBクラスの左側出入り口を固めていたメンバー達だった。

「くっ！？だ、誰か俺を守れっ！！」

根本の声に反応し出入り口付近の生徒が戻ろうとする。

しかし

「行かせるなっ！教室内のヤツらと協力して挟み打ちにしろ！手が開いてるヤツは教室に入って足止めに参加だ！」

『おっっ！！』

羊一の指示がとび、Bクラスメンバーは大半が足止めされる。

「くたばれ、根本恭二いっっ！」

明久達が根本に駆け寄ろうとする。

「遠藤先生！Fクラス島田がー」

「Bクラス山本が受けます！サモン！」

「くっ！近衛部隊か！」

まだ教室内に残っていた近衛部隊がその行く手をふさぐ。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように笑う根本。

しかし、そんな根本の耳に羊一の声が届く。

「失敗？とんでもねえ…大成功だ」

ダン、ダンッ！

そんな音と共に、

「Fクラス、土屋康太」

ムツツリー二と体育教師がBクラス内に降り立った。

二人は屋上からロープを使って降下。

そして雄二の作戦の通りにDクラスによって破壊され空調が動かなくなったために開けられた窓から教室に侵入を果たしたのだ。

「み、認めない…」

「…Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「お、俺は認めないぞ！こんな奴らにこの俺が負けるはずが」

根本が何か叫んでいる。

「ふん、根本。良いこと、教えといてやる」

羊一は廊下で肩の力を抜き、近くの壁に背を預け、つぶやく。

それが、根本には聞こえないだろうことを理解しつつ…

「俺達をナメんじゃねえよ」



「サモン」

『Fクラス

土屋康太…保健体育 441点』

VS

『Bクラス

根本恭二…保健体育 203点』

根本の声にならない悲鳴が廊下にこだました。

こうして、Bクラス戦は終結したのだった。

## 第十二問（後書き）

こんな感じですよ。

…結局、羊一そんなに活躍できなかったかな？  
まあ、たまには良いでしょう。正方も…

次からはまたロクでもないことをすると思います。

では、できればまた読んでやってください。

## 第十三問（前書き）

第十三問です。

この回は羊一による羊一のため（あとちよつとした人助け）の根本君イジメの回です。

そのような話が苦手、不快に感じる人は…ごめんなさいでした。では、短いですがどうぞ。

## 第十三問

「うづう…痛い、痛いよお…」

「…確かに。扉って、こんなに硬いんだな…」

明久が手をおさえてのたうちまわる横で羊一も顔をしかめる。

二人は先程までのBクラス戦で召喚獣で教室の一部を破壊した。

この作戦は物に触れる観察処分者の二人にしかできない。

しかし、召喚獣からのフィードバックで痛みの一部が、二人を苦しめていた。

「二人とも、ご苦労だった」

そう言いながら雄二がやって来た。

Bクラス戦が終了したのを知りやって来たのだろう。

「まあ、勝てたんだ。良かったじゃないか」

「良かねえよ…手は痛てえし、この後はたっぷり鉄人とのハートフルコミュニケーションだ」

「…嫌なこと思い出しちゃったね」

ドアと壁の違いはあれど、教室の設備を破壊したのは違いない。

初犯でなかったなら停学、悪ければ退学になったかもしれない。

「まあ、いい。羊一、ちょっと手伝ってくれ」

雄二がそう言った。

「？ 何をだ」

「ほれ、アイツのことだ」

雄二はそう言って背後を指さす。

「……………」

そこには、先程までの強気が嘘のようにおとなしい根本が座り込ん

でいる。

「…あああ、そうだった、そうだった」

それを見た羊一はとても意地の悪い笑みを浮かべた。

「さあて、嬉し恥ずかし戦後対談といこうか」

そう言つて雄二と二人根本に近寄る。

「本来なら設備を明け渡して貰うところだが…特別に免除してやらんでもない」

「…条件はなんだ」

雄二の言葉に力なく根本が問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄い言い様だが、それだけのことは彼もやってきた。

本人も反論する気がないのか黙っている。

「そこで、お前からBクラスに特別チャンスだ」

雄二はそう言って、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。ただし、宣戦布告はするな」

「…それだけでいいのか？」

「ああ、俺からは、な」

雄二がニヤリと笑う。

「後は…先生、お願いします」

「どぉーれい」

そう言っつて羊一がニコニコ顔で雄二の後ろから現れた。

根本の顔が急激に青ざめていく。

「やぁ、根本君。さっきはどうも」

「あ、ああ」

「今日はイロイロやってくれたねえ？」

「あ、あれはっ」

「ああ、良いんだ。俺は別に怒っちゃいない…あれは戦争だったんだ。仕方ない」

羊一はそう言っつて優しく微笑む。

「そうさ。戦争なんだからな。どんな事をしても関係ない…」



羊一は頷きながら話し、そこで一度、言葉を切る。

「だから…これからやる事も仕方ないってことだよなあ、根本くうくん？」

「ひい!?!」

言葉と共に、羊一がニタリと笑う。

悪魔のように、鬼のように、それでいて映画のヒロインのように。

そんな複雑な、しかしわかりやすく嫌らしい笑みを浮かべ、羊一は語り始める。

「そうだな…手始めに、これに着替えてもらおうか」

そう言って羊一はいつの間にか取り出した女子用制服を見せる。

「ば、馬鹿なことを言うな!?!」

根本が反論をしようとする。

しかし、

「まあ、待て。まだ説明途中だ…あ、ゴメン。ちょっとコイツ黙らせて」

「わかりました！」

「ちょっと、ま!?!」

あっという間にBクラス生徒に抑え込まれた。

「てめえら、何を!?!」

「うるさい!これで教室は無事なんだ！」

「そうだ、喜べ。お前一人が不幸になることで他のBクラス全員が幸せになる」

「あなたの尊い犠牲は忘れないわ…多分」

「…なかなか良い友人関係をお持ちのようで」

さすがの羊一もBクラスの手の平の返しっぷりに驚く。

「まあ、いい。で、これに着替えたら…次はコレ」

と言って羊一は制服の内ポケットから黒塗りの手帳を取り出す。

手帳にはデフォルメされたヒツジの絵が描かれていた。

「そ、それは？」

「知らないのかね？ならば、教えてあげよう！」

羊一はそう言って手帳を天にかざす。

「これこそ、文月学園七不思議が一つ、『クロヒツジ』の秘密兵器  
！」

「『ドキッ！黒歴史だらけの秘密手帳』」

何処かの猫型ロボットのごとく言う羊一。

しかし、羊一の言葉に教室内が騒がしくなる。

『あ、あれが「クロヒツジの秘密手帳」なのか！？』

『確か、「クロヒツジ」は現れた所にはそれを残す。そして中にはその人の知られたくない黒歴史がたっぷりと…』

『な、なんて恐ろしい…』

Bクラス生徒だけでなく、Fクラスまで震えていた。

「さうて、これをAクラスまでの道のりの間、大きな声で朗読してもらおうか」

「ぬがあっ！？」

「暴れんかって…よろしく」

「了解。オラアッ！」

「ふう！？」

再び、強制的に黙らされる根本。

「まあ、俺も鬼じゃあない。次は君にとって、喜ばしいことだよ？」

「よ、喜ばしい、こと？」

かなり息も絶え絶えな根本。

それでも「自分にとって喜ばしいこと」と言われると気になるらしい。

「ああ。君…昨日、彼女とケンカしたらしいじゃない」

「……………」

嫌な予感に思わず黙る根本。

羊一は心底、楽しそうな笑顔で言う。

「Aクラスの後には謝ってきなよ。もちろん、女子用制服で」

「鬼いーいーっ!!」

抑えつけられたまま、叫ぶ根本。

「あ、もちろんその間も朗読は続けてもらっつから」

「もう、嫌あーいーっ!!」

あまりのことに若干、女口調になる根本。

彼の精神もそろそろ限界だ。

『お、鬼だ…』

『いや、悪魔だ』

『私、初めて根本君が少しかわいそうに思えてきたわ…』

その様子に周りの生徒もドン引きである。

「フフフ…まあ、こんなところかな？じゃ、頑張つて〜」

そうやって近くのBクラス生徒に手帳を渡し、教室から出ていこうとする。

「ふ〜、すつきり 明久に雄二、後はよろしく」

「お、おう。任せろ、先生」

「お、お疲れ、先生」

「なんで二人して俺を先生呼ばわり？…あ、そうだ、忘れてた」

そうやって羊一はぐったりしている根本のところに戻って言う。

「その制服、保健室のだから。夏月先生に返してきてな？…ちゃん  
と、なくさないように、しっかり、着て行くんだよ？」

「~~~~~っ!？」

根本の言葉にならない叫び、本日二回目であった。

ちなみに…

この一件以来、根本恭二はヒツジが大の苦手になったのは、また別  
のお話…



第十三問（後書き）

という感じですよ。

たびたび根本君ファンの方、ごめんなさい。

羊一、やはり性格が…

こんな主人公ですが、これからもよろしく願います。

第十四問（前書き）

第十四問です。

じじじ

## 第十四問

あの後、根本の頑張りを腹を抱えて笑い、羊一は別の用事を済ませた。明久と職員室に向かった。

明久は多くは語らなかったが、どうやらうまくいったらしい。（何やら「もう一度、もう一度」とぶつぶつ言っていたが）

それから鉄人の親身な指導を受け、二人とも身も心もボロ雑巾のようになつて家に帰った。

そして点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなったFクラスメンバーが雄二から最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。ここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったからだ。感謝している」

壇上の雄二が珍しく素直に礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二のその言葉に教室の皆がどこか、しんみりとした雰囲気になった。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、勉強だけじゃないことを、教師ども付きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前に、クラス全員の気持ちが一つになっていた。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

先日すでに聞いていた羊一達は驚かなかったが、他のメンバーはかなり驚いている。

『どづいづことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

教室がざわめきに包まれる。

「そりゃそーだ…やるのは雄二と霧島だろ？」

周りのざわめきに羊一が呆れたように雄二に聞いた。

「そつだが、何かあるのか？」

「いや、馬鹿のお前が勝てるわけが」

シュツ！！

ガツ！

「う危なっ!？」

羊一に向かってカッターが投げられる。

羊一は近くにいた明久でガードする。

明久はかろうじて鞆で防ぎ難を逃れた。

「チッ」

「まったく、危ねえ野郎だ」

「一番危ないのは羊一だよ!？」

「次は当てる」

「やってみな…こっちは最強の盾がいるんだ」

「…羊一、その盾って誰のことかな？」

「（無言で明久を指さす）」

「見えないっ！僕には友達を盾扱いする鬼畜なんて見えてないっ！」

「まあ、そんな雑音はともかく」

雄二がコント？をする二人を無視して話を進める。

「まあ羊一の言うとおり確かに翔子は強い。まともになり合えば勝ち目はないかもしれない」

雄二は羊一の言葉を認め、言った。

「だがそれは今までだってそうだったろ？」

「それは今回だって同じだ。俺は絶対に勝つ」

「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を見せてやる」

しかし、それでも雄二は皆の目を見てそう言う。

そこには絶対の自信が見てとれた。

『おおおーっ！！』

それを見てクラス全員が叫ぶ。  
全員が雄二を信じていた。

「さて、具体的なやり方だが…一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

雄二が具体的な作戦の説明を始めた。

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

秀吉の疑問に雄二が答える。

さらに雄二が付け加える。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、純粋な点数勝負とする」



その言葉にまたざわめきがおこる。

その中から明久が代表して疑問をぶつける。

「でもそれだと注意力勝負になっちゃうから延長戦になったらマズインじゃない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ。賭けにしても分が悪いぞい」

秀吉も明久に同意した。

しかし雄二は呆れたように答える。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「…ならどうすんだ？」

羊一が聞く。

「ああ、俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある問題？それって何？」

明久が聞く。

「その問題は…『大化の改新』」

「大化の改新？」

「ああ、しかも掘り下げた問題じゃなく、単純な問いだ」

「単純っていうと…何年に起きた、とか？」

「お、ビンゴだ島田。それが出たら、俺達の勝ちだ」

雄二が自信ありげにそう言う。

「そうなの？そんな問題、僕でも間違えないよ」

「そうか。ちなみに明久、大化の改新は794年じゃなく645年だからな」

「お願い…僕を…見ないで…」

「…お前…マジかよ…」

羊一が明久に哀れみの視線を送る。

「とにかく、翔子は間違える。これは確実だ。そうすれば俺達の勝ちだ」

雄二が断言する。…と

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その…仲が良いんですか？」

瑞希がおおずおおずと聞く。

それに雄二は何でもないように言っし。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？そして羊一もそのカッターの山をどうするつもりだ！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「なぐに、ちよつとした実験さ…人ってどれくらい刺されたら死ぬんだろうなぐ？」

明久は怒りの、羊一はニヤリ顔で言う。

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、僕に教卓を投げようとししないで！？」

「まあ落ち着くのが皆の衆」

パンパンと手を叩き場を取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「幼なじみぐらい、普通じゃる。ワシと姉上も羊一と幼なじみじゃし」

「総員、次の獲物だあつ！」

「うおい！？雄二に向けてた上履きをなぜこっちに向ける！？？」

「うるさい、裏切り者！一人どころか二人までも！キサマには拷問ですら生温い！」

秀吉の言葉にまたクラスが騒がしくなる。

「と・に・か・く！落ち着くのじゃ！」

秀吉が再び声をあげ、騒ぎをおさめる。

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

秀吉の言葉に皆、納得したように静まった。

しかし、

「そうかあ？だって霧島って、たしか雄二のこと」

「だあああつー!？」

羊一が秀吉の言葉を否定しようとしたが雄二が必死に羊一の口を塞ぐ。

雄二は羊一を教卓まで連れていき小さい声で話す。

『お、お前、なぜそのことを!?!』

『おいおい、俺を誰だと思ってんだ。そんな情報くらい知らなくてどうすんだ』

『てめえ、今それを言われたら俺はどうなると思ってやがる!』

『ん〜…奇怪なオブジェ?』

『分かってるなら言うな!』

『…さっきの返事に納得してんのもどっかと思っが…おつ?どっか?どっか?よっかな?』

雄二の返答に呆れつつも、ニヤつきながら言う羊一。

しかし、雄二は何かを思いだし不敵な笑みを浮かべる。

『ふん、そんなこと言っているのか?』

『は？』

『聞いたぜ？お前、木下優子のことが好きらしいな』

『っ！！？』

雄二の言葉に瞬間的に顔を赤くして慌てる羊一。

『あべぶなばかつ！！？』

『日本語を話せ…秀吉から聞いたんだが、本当らしいな』

『ぐっ！！？』

『さて、取り引きだ…お前が口をつぐむと言っなら俺も黙っというてやる…どうするっ？』

『チッ！わかったよ。黙ってりゃ良いんだろ』

『それで良い。交渉成立だな』



雄二はそう言って教卓に戻り、解放された羊一は自分の席に戻った。

「さて、待たせたな…とにかく俺達は幼なじみで、昔、間違えて嘘を教えていたんだ」

雄二は気を取り直して言う。

「アイツは一度教えたことは忘れない。」

一度覚えたことは忘れない。

それが今回は仇になる。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は」

『システムデスクだ!』

#### 第十四問（後書き）

こんな感じですよ。

優子が羊一の弱点になりつつある気がする…

では次もできれば読んでやってください。

第十五問（前書き）

第十五問です。

羊一にまた新たな設定がくっついてしまいました。すみません。

では、ごうそ...

## 第十五問

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は雄二を筆頭に明久、瑞希、秀吉、ムッツリーニに羊一と首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いなの？」

現在雄二と交渉をしているのは優子だった。

優子が訝しげに言う。

無理もない。

Fクラスが一騎打ちでAクラス、しかもそのトップに挑むこと自体が不自然なのだ。

裏があると考えるのが普通だろう。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができのありがたいけどね、わざわざリスクを犯す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。

しかし、雄二は交渉を進める。

「Bクラスとやり合う気はあるか？」

「Bクラスって…昨日来ていたあの…」

優子が何か嫌なものを思いだしたように顔をしかめた。

「なんか、女子の制服着て泣きながら手帳に書いてあることを読みあげてたけど…」

「さあな。情緒不安定なんじゃないか？」

雄二がどうでもよさげに言う。

「さて、まだ宣戦布告はしてないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間がないと戦争はできないはずだよな？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争の泥沼化を防ぐために敗北したクラスは三ヶ月の間、自ら戦争を申し込むことはできない。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなってる。規約には問題ない」

「ちなみにBクラスだけじゃなくDクラス、もしかしたらCクラスも攻め込むかもしれねえぜ？」

雄二の言葉を羊一が引き継ぐ。

「…アンタねえ」

「?なんじゃい」

「…何でもない」

「?」

何か言いたげにしていた優子だったが気を取り直して雄二に向き直り言う。

「…わかったよ。代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え?本当?」

意外とあっさりとした返事に驚き、明久が声をあげる。

「あのBクラス代表と戦いたくないってのもあるけど、ちょっと個人的に、ね」

そう言って含みのある言い方をする優子。

「でも、こちらからも提案。お互い五人ずつ選んで戦い、三回勝った方の勝ち、っていうなら受けるよ」

「う…」

明久が思わず呻く。

AクラスはFクラスから瑞希が出てくる可能性を警戒しているようだ。

Aクラスとしても自分達の代表が負けるはずが無いと思っではいるが、万が一ということもある。

その万が一の可能性を潰したいのだろう。

「これは競争じゃなくて戦争だからね。君達の言葉を鵜呑みにはできないよ…油断ならない奴もいることだし」

優子はそう言って横目で羊一を見る。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」



「雄二、本気なの!？」

雄二の耳を疑うような返事。

「ただし、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう」

雄二はそう提案する。

相手の条件を呑んだのはこちらの交渉を有利に進めるためだったの  
だろう。

「え?うーん…」

優子はその提案に悩む。

優子としてはクラスを代表しての交渉であるため、慎重になるのも  
頷ける。

と、

「…受けてもいい」

「うわっ！」

後ろから声がして、驚く明久。

そこにいたのはAクラス代表である霧島翔子だった。

いつの間にか近づいていたようだ。

まるで武道の達人のようである。

「…雄二の提案を受けてもいい」

と、静かな、しかし凜とした声で翔子は言った。

「あれ？代表。いいの？」

「…その代わりに、条件がある」

「条件？」

「…うん」

頷いて、翔子は雄二を見た後に瑞希をじっくりと観察して再び顔を

雄二に向けて言う。

「…負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ!」

「負ける気満々だな、おい」

羊一と明久がムツツリーニツッコむ。

「…じゃ、勝負内容は五つの内三つはそっち、二つはうちが決める、  
っていうのはどうかな?」

優子は少し考えてそう提案する。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二!何を勝手に!まだ姫路さんが了承してないじゃないか  
!」

即答する雄二に明久が食ってかかる。

「明久、心配すんな。姫路は大丈夫だ」

「羊一？なんでそんなこと」

「あゝ、詳しいことは言えないんだが…絶対に大丈夫というのは確かだ」

「？…まあ、羊一がそう言うなら」

羊一の言葉にひとまず納得する明久。

「…勝負はいつ？」

「そつだな。十時からでいいか？」

「…わかった」

翔子は独特の雰囲気です。そう言うと自分の席に戻っていった。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

そう言って教室に戻ろうとすると、

「ちょっと、その犯罪者予備軍」

「…優子。まがりなりにも幼なじみ呼び留める言葉がそれか？」

優子が羊一を呼び留める。

「まあ、いいや、いつもの事だし…で、何か用かい？皆に追いつきたいんでなるべく早いとありがたいんだが？」

羊一がそう言って優子に向き合う。

「アンタ、またやらかしたらしいわね」

優子がため息まじりにそう言った。

「昨日のBクラスの代表、アンタの仕業でしょ？」

「ギックーン」

「…実際に口で『ギックーン』なんて言う奴、漫画にもいないわよ」

優子はさらにため息をつきながら言う。

「さらに、Bクラス教室のドアの破壊…何がしたいのよ、アンタ」

「…わ、若気の至りってヤツですよ…多分」

「…もういいわ」

優子は呆れたように言う。

その後、少し考えた後…

「…そうね。これも良い機会かも」

「？何のこと」

羊一が聞こうとするのを遮り、言う。

「羊一。私と賭けをしない？」

「は？」

優子の突然過ぎる提案に面食らってしまう羊一。

そんな彼を無視して優子は続ける。

「さっき代表も言ってたでしょ？あれと同じ条件で私たちも賭けを  
しましょう。良いわね？」

「は？い、いや、突然、何を」

「い・い・わ・ね・？」

「わかりました。わかりましたから、その握った手から力を抜いて

いただけます？大分痛いんで」

「ん、よろしい じゃ、後で。逃げるたら…わかってるわよね？」

「もちろんでございませす、はい」

そう言い残して優子は教室に戻っていった。

「…何なんだ、いったい」

羊一はひとまずFクラス教室に向かいつつ『なぜ、優子はあんな事を言い出したか』を考え始めた。

「いきなりのあの提案、しかもその提案をほぼ無理矢理、吞ませたことを考えると…よほど俺に何かをさせたいんだらう」

では、その羊一にさせたい『何か』とは？

「俺にさせたいこと、というと…俺の行動に関係することか？」

羊一は今までの自らの行動パターンを反芻する。



パターン1

小学生の頃、イジメに巻き込み、助けてもらったにも関わらず優子を避けて大ゲンカ

パターン2

新学期初日から女子の制服でクラスへ

パターン3

女装して裏で暗躍

パターン4

Bクラス代表に多大なる心の傷

エトセトラエトセトラ…

「…あれ？」

羊一は自分のこれまでを振り返り一つの事に気づく。

「…俺、幼なじみにはしときたくないタイプの人間じゃね？」

いまさらである。

しかし、その事に気づいた羊一はダラダラと汗をかき始める。

「つーことは、俺にさせたいことって…」

羊一の脳裏に一つのイメージが浮かぶ。

『アンタが幼なじみって事実自体が不快なの！もう私と関わらないでっ！！』

「ゴフッ!?!」

自分の考えでダメージを受ける羊一。

「そ、そうか…そういうことなのか…」

羊一は一人、廊下で立ちすくむ。

自分の今までを反芻した結果、その考えにたどり着く。

幼なじみ、それも好意を持っている相手にそんなことを言われたなら…考えたくもない。

ならばどうする？

起きたことは変えることはできない。

なら、これからの態度を改めるのか？

「…いや、それは、いくらなんでも、できねえな」

羊一は即座にその考えを捨てる。

羊一にとって、今の自分はある種の誇りだった。

なぜなら

「今の俺はあの時の『師匠』の教えの賜物だしな」

昔、優子と大ゲンカをした後、公園で泣いていた羊一。

その羊一に声をかけ、話を聞き、思い切りぶつとばし、小一時間説教をした変わり者。

その人が言っていた『どんなことをしてでも強くなれ』という言葉が今の羊一の根幹を成していた。

「結局、あれ以来一度も会えず仕舞いだけど…師匠、元氣かな？…はっ！？」

話がズレていることに気づき軌道修正に入る羊一。

「いかんいかん、今はそれは良いんだ…ならどうするか、だ」

そうしてしばらく立ち止まり無言で考える。

そして

「…！…そうか、要は負けなけりゃ良いんだ！その後のことは後で考えりゃいい！…」

そう結論づける羊一。

そうと決まればこうしてはられない。

羊一はFクラスに向け、走り始めた。

.....

「...？優子、どうしたの」

「どうしたって何が？」

「...何か、楽しそう？」

「なにそれ？...そう言う代表だって、さっきからソワソワしっぱなしだけど」

「...何でもない」

「あ、そう。なら、私も何でもないわ」

「…その答えは卑怯」

「…と、そろそろ時間ね。じゃ、代表、頑張ろうか」

「…うん、頑張る」

こうしてFクラスとAクラスの戦いがイロイロな思惑が交差するなか、始まる…

第十五問（後書き）

という感じですよ。

優子の性格が…ファンの方に怒られないか、心配です…

感想、指摘などいただけると嬉しいです。

第十六問（前書き）

第十六問です。

主人公、最低！な回です。

どうぞ



## 第十六問

「では、両名共準備は良いですか？」

今回はAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ」

「…問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。

こっちの方が広く、なにより腐った畳のFクラスでは締まらいため、こちらでやることになったのだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスの側からは佐藤という女子生徒が出てくる。

そして、Fクラスからは…

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

雄二からの突然の指名を受け、驚きを隠せない明久。

「ああ、お前なら見事に俺達の先発を務めることができるはずだ」

雄二のその言葉を聞いた明久は一つため息をつき、言う。

「ふう…やれやれ、僕に本気を出せってこと」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

雄二と明久の会話に教室がにわかに騒がしくなる。

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

味方であるはずのFクラスの皆の声。

まあ、普段の明久を見てみると普通だが…

「吉井君、でしたか？あなた、まさか…」

対戦相手の佐藤が明久を見て何かに気付いたかのように戦く。  
その様子に明久は不敵な笑みを浮かべる。

「あれ、気付いた？」ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久はそう言いながら袖をまくり、手首を振って、軽い準備体操をする。

「それじゃ、あなたは…！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕…」

明久は大きく息を吸い、この場にいる皆に告げる。

「…左利きなんだ」

『Aクラス

佐藤美穂…物理 389点』

VS

『Fクラス

吉井明久…物理 62点』

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！そして羊一！その大量のカッターを床に置くんだけ！」

なぜだか、さつきAクラスから帰ってきてから羊一の様子がおかしい。

何かかなり焦っているようで、Fクラスに帰って来るなり、『諸君！我々は勝たなければならぬ、絶対にだ！』とかなりのやる気だ。

「まあ、落ち着け、羊一。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

明久が怒りに身を震わせる。

高橋先生はソレを無視して次の参加者を募る。

「では、二人目の方どうぞ」

「…（スック）」

ムッツリーニが立ち上がった。

科目選択権がここで生きてくる。

ムッツリーニは保健体育の単発勝負ならAクラスにも負けはしない。

「じゃ、ボクが行こうかな」

そう言っつてAクラスから出て来たのは、

「あれ？工藤か？」

「やあ、黒峰君。久しぶり、っつてほどでもないね」

出てきたのは工藤愛子だった。

「知り合いなの？羊」

「ああ、少し…待て皆、なぜまたカッターを俺に向ける？」

と、また殺伐とした空気がAクラス教室に流れた。

「では、教科は何にしますか？」

後ろの空気は全く気にせず、高橋先生がムツツリー二に尋ねる。

「…保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子がムツツリー二に話しかける。

愛子にはかなり余裕が見て取れる。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ…キミと違って、実技で、  
ね」

その発言にさつきと違う意味で外野が騒がしくなる。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよ  
かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、そんなの要らない  
のよ…」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「明久、大丈夫だ。お前にもいつかそういう機会が来るから……」

明久が死ぬほど哀しそうな顔をして泣いている。

さすがの羊一も今の明久には同情をきんじえない。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。サモンっと」

「…サモン」

二人の召喚獣が、それぞれの武器を手に現れる。

ムッツリーニは子太刀の二刀流。

一方愛子は、

「なんだあの巨大な斧は!？」



見るからに破壊力抜群の巨大な斧。

オマケに腕輪までしている。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子が艶っぽく笑いかけ、腕輪を光らせながら召喚獣が動く。  
ありえないスピードで近づき、雷光をまとう巨大な斧をムッツリー  
二の召喚獣に振り下ろす。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「ムッツリーニっ!」

明久が思わず声をあげる。

しかし…

「…加速」

その瞬間、ムッツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「…え？」

「…加速、終了」

ボソリと、ムツツリーニがつぶやく。

一呼吸置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス

工藤愛子…保健体育 446点』

VS

『Fクラス

土屋康太…保健体育 572点』

まさかの点数にAクラスからざわめきがおこる。

「そ、そんな…！この、ボクが…！」

優子は相当ショックらしくその場に膝をつく。

「これで一対一、五分ですね。次の方は？」

自分のクラスが負けたはずなのだが、高橋先生は淡々と作業を進める。

「次は俺がやる」

と羊一が一步前に入る。

「わかりました。Aクラスからは誰が？」

「アタシがいくよ」

Aクラスからは優子が出て来た。

「やはりお前が出てくるか」

「それはそうよ。アンタの手の内はよく知ってるからね」

「チッ」

優子は羊一の幼なじみだ。

羊一のやり口は大抵お見通しだった。

「科目は？」

「英語Rで」

羊一が科目を選択する。

羊一は科目はどれでも良かったため結構、適当だった。

「じゃ、行くわよ。サモン！」

「サモン」

『Aクラス

木下優子：英語R 395点』

VS

『Fクラス

黒峰羊一…英語R 389点』

二人の戦力差はほとんど無く、拮抗していた。

「さあ、戦いましょうか」

「……」

羊一は無言で構える。

『ねえ、雄二。なんか羊一、いやに静かじゃない？』

『さあな。なんか作戦でも考えてるんじゃないか？』

外野で雄二と明久が話す。

明久の言う通り、羊一は先程から妙に静かだった。

優子もそれに気付き、警戒していた。

と、

「優子」

「…何？」

羊一が突然、真剣な顔をして優子に話しかける。

優子も警戒しつつ先を促す。

「実は…お前に前から伝えたいことがあったんだ」

「えっ？」

あまりに意外な展開に固まる優子。

羊一はさらに続ける。

「これはとても大切な話だ。心して聞いてほしい」

「え、あ、う、うん」

羊一の真剣な顔と雰囲気にもまれ、黙って話の続きを待つ優子。少し顔が赤くなっている。

羊一は一呼吸置いて言った。

「実は…お前のことを…」

「好きにしたいと明久が言ってた」

「……は？」

「うえええええっ！？何で僕っ！？」

「いや、マジで。ほら」

カチッ

『僕初めて会う前から』木下さん』のこと好き・にしたいと思ってました』

「あの時の！？しかも微妙に改造されてるっ！？いつの間に！？」

「アア〜キイ〜？」

「吉井君？」

「うわぁ！？何か二人から今までになく嫌なオーラがあ！？」

と、優子がフリーズし、外野の明久が二人の怒れる鬼に襲われていると、

「フハハハア！今がチャンスう！覚悟お！！」

羊一が召喚獣を優子の召喚獣に襲いかからせる。

『最低だあああっ！？』

Aクラス、Fクラスのメンバー全員が叫ぶ。



「勝てば官軍っ！！終わりだあ！」

羊一の召喚獣が優子の召喚獣の頭上から英訳辞書を振り下ろす。

と、

ガキイっ！！

「へ？」

羊一が間抜けな声を出す。

辞書による一撃は優子の召喚獣のランスによって弾き返された。

羊一の召喚獣が大きくバランスを崩し倒れる。

「……………」

優子は無言で召喚獣を倒れている羊一の召喚獣の上にマウントポジションをとらせる。

「……………」

チャキツ！

そして構えるランス

「あ、あの、す、すみませんでした…どうか、命だけは…」

「…大丈夫よ、羊…」

優子はとても魅力的に微笑む。

「一撃では、終わらせないから」

数分後…

「では結果を発表します」

『木下優子…WIN』

V S

『黒峰羊一…DEAD』

自業自得の結果である…

「さて、次は？」

あくまでも淡々と進行させる高橋先生。

「あ、は、はいっ。私です」

Fクラスからは瑞希。

そしてAクラスからは、

「僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

彼は久保利光。

学年でも屈指の実力者だ。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちょっと！何を勝手に」

「構いません」

クレームをつけようとした明久を止める瑞希。

「それでは……」

高橋先生の下、勝負が始まり……一瞬で終わった。

『Aクラス

久保利光…総合 3997点』

V S

『Fクラス

姫路瑞希…総合 4409点』

教室中からざわめきがおこる。

「ぐ…！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ…？」

久保が瑞希に聞く。

瑞希はその質問に微笑んで答える。

「…私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？…さっきのような男がいるクラスだが…」

「…く、黒峰君も一生懸命だったんですよ！…多分、きっと」

必死に羊一を擁護する瑞希。

本当に良い子である…かなり苦しいが。

「これで二対二です。次は」

「…はい」

Aクラスからは翔子。

「俺の出番だな」

Fクラスからは雄二。

代表対決だ。

「教科は？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点の上限ありだ！」

雄二の宣言でAクラスにざわめきがおこる。

「わかりました。問題を用意しますので少し待ってください」

高橋先生がそう言って出ていく。

先生の背中を見送り、明久が雄二に言う。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

二人は固く握手をかわす。

「……(ピッ)」

ムツリーニがピースを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられたな」

「……(フッ)」

ムツリーニの次は瑞希が近づく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

優しい表情で笑う瑞希。

と、

「準備ができました。参加者の二人はこちらへ」

高橋先生がそう言う。

「じゃ、行ってくる」

「うん、頑張ってるね、雄二！」

そう言って雄二を見送る皆。

と、



「…皆、必死に先程の羊一のことを忘れようとしておるようじゃな」

「そりゃ、そうでしょ。それぐらいのことはしたんだから」

そんな会話をする秀吉と美波。

全くもって、その通りである…

こうして、Aクラスとの最終戦が始まり…そして、結果は…

## 第十六問（後書き）

こんな感じですか。

羊一、好きな人にやる作戦ではない…

知ってました？アレ、この小説の主人公なんですよ？

感想、指摘をいただけるとありがたいです。

で、できたら次も読んでやってください…

第十七問（前書き）

第十七問です。

今回でバカテス一巻が終了です。

では、どうぞ。

## 第十七問

「う、うん。こ、こは…」

羊一は目を覚ます。

どうやらベッドに寝かされているらしい。

天井の感じから察するに、また保健室に運び込まれたらしい。

羊一はベッドに寝たまま、横を向く。

そこには人が椅子に座っていた。

「…秀吉？」

秀吉は羊一の方に顔を向ける。

「アタシよ」

「……………」

「…なんでアタシってわかった途端に凄い勢いで土下座に移行する

のかしら？」

椅子に座っていたのは秀吉ではなく、優子だった。

羊一は黙って土下座を続ける。

「アンタ…何年もアタシ達といて、まだ見分けがつかないっての？」

「いや、あの、ちょっと寝ぼけてまして…決して、本気で秀吉と優子様を間違えたわけでは」

「…なんで様をつけてんのよ」

「すみませんでした。優子閣下」

「誰が閣下よっ！」

「それで、私ごときに何か御用でございましょうか、優子大總統」

「…もう良いわ」

優子はため息をつき、話を進める。

「とりあえず、結果報告。アンタとの勝負はこっちの勝ち」

「…勝負ってより一方的虐殺」

「何か言った…?」

「いえ、何でも」

「そう…で、その後、姫路さんが一勝して二対二に並んで、最終戦で代表同士での対決になったのよ」

「おお、スゲー!」

優子の報告に素直に嬉しそうな顔をした。

「で、日本史のテストの結果」

「おう!」

「ウチの代表が97点」

「!?!百点じゃなかったのか?」

羊一が驚く。

無理もない。

そのテストは小学生レベルのはず…

それである翔子が満点ではないということは…

「雄二の野郎…本当にやりやがった」

羊一が口の端を持ち上げ、笑う。

百点をとってないということは雄二の言っていた問題が出たのだから。

ならば！

「で、坂本君の点数」

「ああ！もちろん、」

羊一が興奮を抑えきれないように先を促す。

優子はゆっくり、結果を言った。

「……53点」

「……………は？」

一瞬、羊一が完全に石化した。

羊一はなんとか自力で石化からの回復を果たし、優子に聞く。

「……………ゴメン。幻聴が聞こえた…もう一回、言ってくれ」

「53点」

「…マジで…？」

「マジで」



「……フ、フフフ」

羊一は優子に確認をとってから、低く笑い声をあげる。

「あの野郎っ、ぶち殺すっ！！」

「待ちなさいよ」

「ちよっ！優子、ものすごい速さで腕をきめようとするな！？俺はこれから雄二に喉を引き裂くという体罰を与えなければ」

「待ちなさいって。坂本君なら勝負の後、代表に拉致されたわよ」

「くっ！？逃げられたか！」

ひとまず雄二の追跡を諦め、おとなしくベッドに座り込む羊一。

そろそろ、腕も限界だったし…

「というわけで、勝負はアタシ達の勝ち…つまり」

「っ、っまりっ？」

優子は笑って言う。

「賭けは私の勝ち。『なんでも一つ言っつことを聞く』ってヤツ…覚えてるわよね」

「…はい」

羊一がいきなり、おとなしくなる。

勝負に負けた（しかもあんな方法まで使っつ）以上、反論は許されない。

そう、何を言われようとも…

羊一は刑を待つ死刑囚のように優子の次の言葉を待つ。

「アンタにやらせる事は…」

「……………」

「アタシと……友達にやりなさい！」

「……………ふえ？」

優子の言葉に羊一はまたフリーズする。

優子は羊一を置き去りに早口でまくし立てる。

「アンタと幼なじみって事実は消えないし、アンタは全然生活態度改める気配はないし、クラスは違うからクラスメイトとして注意もできないから、私が恥ずかしくないよう、アンタの性格を直すため仕方なく、仕方なく！友達になってあげるって言うてんの！わかるっ！？」

「あ、はい、すみません」

優子に詰め寄られ、たじたじな羊一。

早口で言葉を発したからか、それとも別の理由でか、優子の顔はほ

んり赤くなっている。

「でー？どつなのよ！」

「あ、いえ、こんな俺でよければ…よろしくお願いします…」

「…あつそ。ならいいわ」

優子はそう言っつて椅子から立ち上がつて羊一に背を向ける。

「じゃ、アタシは帰るから」

「お、おう」

優子は保健室の入り口まで歩いて行きドアを開けて、そこで振り返つて言っつ。

「じゃ、またね」

「…ああ」

優子はその言葉を言い残し、帰っていった。

あとに残された羊一は一人、ベッドの上で今のやり取りを反芻する。

「……友達に、なれた、な」

羊一はそつつぶやき、とても、とても嬉しそうに微笑む。

…と

「お、黒峰。やっと起きたか」

「……いきなり気分が悪くなってきました」

「人の顔を見て随分な言葉だな」

優子が去ったのと入れ違いに鉄人が保健室に入ってきた。

「で？人の素晴らしい記憶を踏みにじってまでの用事なんすか？そ  
うでないならちょっとその棚の薬、一気飲みしてくれませんか？」

「それは遠回しに死ねと言っているぞ黒峰……まあ、いい。今から我

がFクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

「ん？我が、だと？」

羊一はその瞬間、嫌な予感に背筋に汗をかきはじめた。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげ、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なにいつ！？」

羊一がベッドの上で悲鳴をあげる。

生活指導の鉄人といえば、『鬼』の二つ名を持つほどの厳しい教育をする先生だ。

「黒峰、お前と吉井、坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の『観察処分者』二人とA級戦犯だからな」

「そうはいかねえ！必ず監視の目をかいくぐり、暗躍しまくってやるー！」

「…お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

鉄人のため息まじりの台詞。

羊一の様子に呆れているらしい。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間、さらにお前には俺が直々に『世の中のルール』というものを教えてやるっ」

「おのれ鉄人！こうなったら必ず弱みを調べあげ、卒業式で大々的に発表してくれる！」

「斬新な答辞だな、おい」

鉄人はそう言っつて、ため息をつきながら羊一に近づいてくる。

「な、なんでこっち来るんだ？」

「お前は今日このあとヒマらしいからな。職員室でたっぷり常識というものを指導してやる」

「い、いや、俺、このあと、ちょっと用事が」

「さっきすれ違ったAクラスの木下から『アイツ、今日ヒマなんでよろしく願います』と言われた」

「あ、アイツ、まださっきの事根に持ってやがるな!？」

「木下にも頼まれたからな。今日は覚悟しろよ?」

鉄人は手をボキボキと鳴らしながら近づいてくる…

「あ、いや、ちよつ、ま、まあ!」

夕日でオレンジ色に染まった学校の廊下に羊一の叫びが響き渡った…



第十七問（後書き）

こんな感じですよ。

優子、めっちゃ良い子。

前回、あんな事した馬鹿に…（感涙）

まあ、これで一巻が終わりました。

これからも頑張っていくしますので、できたらよろしくお願いします。

**番外編 第壹問（前書き）**

番外編です。

今回、主役は羊一ではなく…

とりあえずごうぞ

## 番外編 第壹問

文月学園、ある日の朝。

平日の朝、いつものように生徒が思い思いに登校している。

「ぬ、ぬぬぬ」

そんなさわやかな朝に合わないうめき声が校舎の入り口、下駄箱の方から聞こえてくる。

「むう……」

うめき声の正体…文月学園の保健の先生、榎木夏月は下駄箱の影に隠れ、一人、悩んでいた。

「……………」

彼女は着ていた白衣のポケットから一枚の便箋を取り出す。

これが彼女の悩みの原因だった。

そして、手紙の中身は……

「…あの人への、ラブレター」

夏月はそうつぶやき、無表情で、しかしほんのり顔を赤くそめた。

彼女は決心していた。

今日、自分の思い人に自分の気持ちを伝えようと…

この手紙はそのためのものだ。

「…しかし、まさか私が、な」

ふと我に返り、自嘲気味に笑う夏月。

普段の自分は無愛想で口調もぶっきらぼう。

性格も良く言えばクール、悪く言えば冷たい。

その事は自覚しているし、その姿は自分の自然体だから直しようがないし、直す気もない。

「この手紙一つでこんなところで一人うめいて、何をやっているのやら…」

そう言ってため息をつき気を取り直す。

「全く我ながら…さっさと渡してしまえば良いのだ。そう、さっさと…」

ぶつぶつ、つぶやきながら立ち上がったところに

「あれ？夏月先生。何やってんすか」

「うひゃい!?!」

驚きのあまり変な声を出してしまいがちながらも手紙を白衣のポケットに突っ込み、振り返る。

「どうも、夏月先生」

「…お前か…」

「…なんでそんなに嫌そうに顔をしかめるんすか」

声の主はちょうど登校してきたところの黒峰羊一だった。

この少年はその体質のため、よく保健室を利用する。

まあ、たいてい命の危険に陥っているが。

「…まあ、良いや。で、先生は何やってんすか？」

羊一が聞く。

「…なんでもない」

「そうすか？朝から変な声、出して」

「なんでもないと言っている！さっさと教室に行け！」

「あ、ちょっと…」

夏月はそう言って羊一に背を向け、保健室を目指して歩いて行ってしまふ。

「…行っちゃった…何なんだ」

残された羊一は首を傾げる。

と、

「ん？何だ、この手紙」

羊一は自分の足元に便箋が落ちているのを見つけた。

彼はそれを拾い上げ、しげしげと眺める。

「下駄箱に、手紙…これは…あの伝説の、ラブレターってヤツか！？」

羊一は戦慄を覚える。

まだこのようなモノが実在しているようとは。

と、そこまで考えて羊一はふと思い出す。

「あれ、この手紙、何か見覚えがあるな？」

羊一は少し考え、思い出す。

「おお、そういや、Bクラス戦の時の『姫路の大切なもの』とそっくりなんだ」

少し前にあったBクラス戦の時、根本の脅しに利用されたあの手紙にそっくりなのだ。

「姫路がラブレターを出す相手といたら、やっぱり…」

羊一はそうつぶやき、明久の下駄箱に視線を送る。

「だよなあ…さて、どうすんべこの手紙」

普段の自分ならこれを利用した明久イジリに全力を費やすところなのだが…

羊一の脳裏にあの時の瑞希の様子がよぎる。

「……やめた。さすがにそれは冗談でしたじゃあ、すまされん」

羊一はそう思い、明久の下駄箱を開け、中に手紙を入れる。



「これでよし。さうて、俺も教室に行きますかね」

羊一はそう言って自分の教室に向かった。

.....

「.....ない」

夏月は保健室の中で白衣のポケットに手を突っ込んだ状態で固まっていた。

その後、保健室に戻る前に書類等を届けに職員室に行き、そこで船越先生に捕まった。

船越先生は優秀な数学の先生なのだが、結婚や恋愛の事に関してはちよつと暴走気味になってしまうようだ。

先程も長々と生徒に紹介されたお兄さん（三十九歳：お兄さん？）との仲が全く進展しない事を愚痴られた。

朝からぐったりしつつ、保健室に着いた頃にはもう一時限目が始まりそうという時間だ。

夏月は白衣に手を突っ込み、そこで気づいた。

「…あの、手紙がないっ!？」

夏月の顔が一気に青ざめる。

どこがで、落としてきた!？

どこに!？

さっきの職員室か!？

「いや、それなら落とした時に船越先生が気づくはず…」

ならば、どこだ!？

とそこでひらめく。

「下駄箱かっ!」

あそこに落とす可能性が高い。

あの場には羊一もいたが、話しかける間も与えずさっさと歩き去ったため、落とし物を伝えるのも無理だっただろう。

ならば話は簡単だ。

羊一に聞けば良い。

そう思った夏月はすぐに廊下に飛び出し、Fクラス教室目指して走る。

と、

「うわっ!?!」

「むっ!?!」

曲がり角で人とぶつかりそうになる。

夏月は謝るうとして気づく。

「黒峰!？」

「あ、ども。また会ったっすね」

羊一がそこにいた。

なぜ、今、彼がここにいるのか気になりはしたが夏月としてはありがたい。

「黒峰！先程私が出た後に、下駄箱で何か見つけなかったか!？」

「へ？ま、まあ、見つけましたが？」

「本当か!？」

羊一の言葉に一瞬安堵する夏月。

しかし

「ええ、うちのクラスの明久あてのラブレターを」

「…は？」

羊一の言葉に固まる。

羊一が今朝の下駄箱での出来事を話す。

「…と、そんな感じですね」

「……………」

あまりのことに何も言えない夏月。

さらし

「で、さっきHRの時にそれがクラスの連中にバレましてね」

「明久は逃亡、クラスの奴らは明久を追っていて、俺も面白そうなので明久を追ってるところです」

「……………」

羊一の話聞き、夏月は無言で微笑む。

そして羊一の肩に手をおく。

「なんすか、って！？肩が今まで感じたことがない程に痛いつ！？」

「黒峰…私を、いますぐ、吉井のところまで、連れて行け」

夏月の笑顔の裏に何かどす黒い殺気のようなモノを感じる羊一。

肩に置かれた手は羊一が気絶しない、しかし痛みは感じるような絶妙な力加減で握られている。

ここでへたな返答をしたら自分の肩は一瞬で奇妙なオブジェとかしてしまふ。

そう悟った羊一は冷や汗をかきつつ言う。

「…イエス、マイロード」

.....

「ま、まだ肩が痛むじえ」

「早く走れ。さもないと…砕くぞ」

「……どうして、こうなった」

前を走る夏月の腰まである長い黒髪を見ながら走る羊一は密かにつぶやく。

「黒峰、本当に吉井は屋上を目指すのか？」

「間違いないっす。あの単細胞生物なら、きっと」

「……友人にその評価はあんまりだと思っぞ？」

羊一の答えに呆れまじりに言う夏月。

今二人は羊一の予想した『明久が行くだろう場所』の屋上を目指し、廊下を走っている。

「…あの、先生はそもそもなぜ明久を追って」

「…理由は聞くな」

「いや、しかし」

「…肩以外もやって欲しいか？」

「理由など不要。どうぞ、わたくしを使いまわして下さいませ」

羊一は夏月の黒いオーラに理由を聞くのを止めて無心で走る。

すゑじ

『馬鹿め！貴様が屋上を目指すのは予想していた！』

『く、もっ少しなのに！』



屋上に上がるための階段のところまで明久が数人の覆面の集団に囲まれていた。

「ね？いたでしよう？」

「……本当に噂どつりのヤツらしいな……」

夏月は呆れたようにため息をつく。

二人は集団のちよつと前で立ち止まる。

「で、どーします先生？」

「用があるのは吉井だけだ……」

「他の連中は？」

「少し、眠っていてもらおう」

夏月はそつつぶやく。

羊一はその様子に、ニヤリと笑う。

「わかったっす…じゃ、よろしく」

「……普通、逆だろう？私はか弱い女だぞ」

「……………」

羊一は何も言わず愛想笑いをした。

ここでツッコミでもしたら…考えたくもない。

夏月は手を白衣のポケットに突っ込み、集団に近づく。

明久や覆面の集団…FFF団もようやく夏月に気づいたようで振り返る。

『な、なぜ、夏月先生がここに!?!』

『わからん!しかし、やはり先生が美人であるということはわかる  
』!』

『ああ、スタイルも良いしな!』

『今日もいつもの仏頂面。しかし、そこが良い!』

『さすがは「文月学園」大クールビューティ!』

「…こんなのばかりなのか? Fクラスは?」

夏月は顔をしかめながら近づき言う。

「お前達、私はそのバ…もとい吉井に用がある。どいてくれ」

「夏月先生! 今、僕のこと何て言いかけたんですか!?!」

明久が人垣の向こうからツッコむ。

『なんだと!?! 夏月先生が吉井に用だと!?!?』

『なんでコイツばかり!』

『やはり、殺るしかない!』

『ああ!八つ裂きだ!はりつけど!火あぶりだ!東京湾だ!』

夏月の言葉にFFF団が騒ぎ出し、再び明久に襲い掛かろうとする。

「…聞こえなかったのか?」

夏月のその言葉と共に、

人垣が吹っ飛ばされた。

覆面の集団が宙に舞い、廊下に叩きつけられる。

『うぐえ!』

カエルが轢かれたような声を出して叩きつけられた団員が沈黙する。

「私は、どいてくれと言っただ、馬鹿ども…」

そう言って夏月は黒髪をはらう。

そのしぐさはこの場面だけ見たらまるで映画のワンシーンのように  
絵になっていた。

明久が夏月の足元にへたりこんでいる。

羊一もさすがに驚きを隠せず、固まっていたがなんとか夏月に話し  
かける。

「せ、先生…拳法かなんかやってたんすか？」

「いや、特には…ただ」

「た、ただ？」

「ただ、ちょっとした暗殺拳的なものだ。たいしたことはない」

『なお悪いわっ！？』

明久と羊一が二人して叫ぶ。

夏月はそれに呆れたように言う。

「何をそんなに驚いている。本当にたいしたものではないぞ？我流だしな」

「アンタが作ったんかい！？」

「ああ、最近はお弱い女には何かと物騒だしな」

「先生の方がよっぽど物騒だよ！？」

「だからちょっと護身の意味で自作してみた。仕事柄、人体の急所には詳しいのでな」

「てか、学校の保健医が自分の学校の生徒に暗殺拳かけるなよ！？」

「大丈夫だ、さすがに殺してはいない」

「そういう問題！？ていうか、このことがバレたら問題になっちゃいますよ」

「それも大丈夫」

夏月はそう言ってポケットから注射器を取り出し、倒れている生徒達に注射していく。

「…ふう、これでコイツらは起きた時にはここ数時間の記憶はないだろう」

『何を注射したっ!?!?』

「…知りたいか?」

『いえ、いいです』

「ふむ、なら話は屋上でしよう」

夏月はそう言って階段を上がり始める。

『…羊一、皆大丈夫かな?』

『…わからん。大丈夫ってんだから大丈夫なんじゃないか?』

『…僕、ちよつと保健室行きにくくなったよ』

『…それを言うな。多分、俺はこれからもお世話になるんだから…』

二人は夏月に着いて行きながらアイコンタクトで会話する。

と、その間に屋上に着いたようだ。

先頭の夏月が扉を開ける。

「ふん、よく来たな明久…ってアレ？」

「夏月、先生？それに黒峰君も。何で吉井君と一緒にいるんですか」

屋上には雄二と瑞希の二人がいた。

明久の思考をよんで先回りしていたようだ。

「坂本に…姫路、だったか。少しこの声…もといバカに用があつてな」



「先生！逆になってます。本音が隠せてませんよ！？」

「はあ、そうなんすか…で、その大バカになんの用が？」

「雄二！先生は『大』はつけてなかったよ！？」

明久が騒いでいるが、二人とも無視して話を続ける。

「それは……」

「先生が言いよどむとは珍しい…用とは何ですか？教えてください」

雄二が問い詰める。

その場にいた全員の視線が夏月に集まる。

「ぬ、い、言わないと、駄目か？」

夏月が少し顔を赤くして雄二に言う。

雄二はその反応に多少驚きつつも頷く。

「……………そうか」

「ええ、一応、こんなヤツでもうちのクラスの一員で、俺はクラス代表なんで」

雄二がきっぱりと言う。

その雄二の言葉に夏月はため息をつき、覚悟を決める。

「……………じ、実は、その、私の手紙が間違えて吉井のところが届いてしまったらしくてな」

「手紙？…まさかそれは」

雄二の言葉に夏月は顔を真っ赤に染めて俯き小さな声で言う。

「……………そう、ラブレターだ」

『……………』

四人は驚きのあまり声も出ない。

まあ、一人、羊一だけは別の意味でも驚いていたが。

『ヤツベエ……てことは、俺が拾った手紙って先生の？』

その様子には夏月はちょっと涙目になりつつ言う。

「わ、私にだって好きな人だっている！ラブレターの二つや二つ、書いて何が悪い！？」

「せ、先生！わかりました！わかりましたから暴れないでください  
！」

瑞希が必死に夏月をなだめる。  
しかし、夏月は止まらない。

「自分でだってわかってるさ！キャラじゃないって！でも、良いじゃないか！私だってたまにはクールじゃないことしたって！……うう」

しまいにはその場へたりこんで泣き始めてしまう夏月。

「ああ、な、泣かないでください！？大丈夫ですよ、ね？だから泣き止んでください」

瑞希が必死になくさめている。

他三人の男どもはとりあえず夏月のことは瑞希に任せて臨時の作戦会議を始める。

『まさかの展開だな』

『そうだね、あの夏月先生がラブレターなんて』

『まあ、先生、普段クールだけど時々感情的になるところもあるし』

『さすがは保健室常連。で、この後、どうするっ？』

『どっつするって言ったって』

『まあ、落ち着かせるのは姫路に任せて…ていうか、さ』

『何だ、羊一』

『…気になるよな、夏月先生の、好きな人…』

『……確かに』

二人が羊一の言葉に頷く。

『……聞いてみるっ？』

『いや、それは…』

『だが、今のところ、それしかないんじゃないかね？俺達も協力しますよ、的なノリでいけば』

『…そうだな。気になるのをほっとくのも寝覚めが悪い』

三人は作戦会議を止めて夏月達に近づく。

「あ、坂本君。先生、だいぶ落ち着いたみたいです」

「……………」

まだ涙目だが、先程よりだいぶ落ち着いた様子で夏月が座っている。

「あゝ、何と言っか……」

「……………」

夏月が無言で雄二に視線を向ける。

「ま、まあ、意外ではあったが、決しておかしなことじゃない。な、なあ、明久？」

「うえ！？あ、そ、そうだね！」

「た、確かに！決して変じゃないぜ？先生！」

三人がしどろもどろになりながらも言う。

「そうですよ！全然変じゃありません！」

瑞希が一人、自信を持って言う。

「そ、そうか？」

夏月が小さな声で言う。

「ええ！私もこの前、ラブレターを書きましたし」

「!？」

瑞希の言葉に夏月が驚く。

雄二も驚くが、他二人はその事はすでに知ってるので驚かない。

「そ、それで」

「あ、でも、結局わたさないで今も持ってるんですけど」

と言って制服のポケットから手紙を取り出す瑞希。

「はあ？な、なぜ？」

夏月は首を傾げた。

瑞希は微笑みながら言う。

「私、決めたんです。好きな人には直接、告白しようって。そうア  
ドバイスしてくれた人がいて…」

瑞希はそう言って明久を横目でチラッと見た。

「だから、私にはもうこれは、いりません」

瑞希はそう言って夏月の前で自分の手紙をビリビリに破る。

「…」

「ふう、これでもう、後戻りはできません」

そう言って優しく微笑む瑞希。



夏月はそこに確かな強さのようなモノを感じた。

そして夏月は

「…ふっ」

「？あ、あの私、何かおかしかったのですか？」

面白そうに微笑む夏月に瑞希が怪訝そうに聞く。

「いや…おかしくないさ。おかげで、私も覚悟ができた」

夏月はそう言って立ち上がり明久に近づく。

「吉井、手紙を渡してくれ」

「え、あ、はい…どつぞ」

夏月は明久から手紙を受け取り、少し眺めて…

ビリビリと手紙を破った。

「せ、先生！？良いんですか？」

瑞希が慌てて聞く。

その瑞希に夏月はどこかすっきりとした様子で言う。

「いいさ、私も君を見習うことにするよ…ありがとう。君のおかげで何か憑き物が落ちたようにすっきりしたよ」

「そ、そんな…私なんて」

「いや、本当に助かったよ…代わりに言うてはなんだが、君の恋、私も応援させてもらうよ」

「…はい、先生も頑張ってください！」

二人は微笑みあって握手をかわす。

『……………』

その二人の様子を無言で見ている男三人。

完全に蚊帳の外である。

と、夏月が三人にも頭を下げる。

「君達も悪かったな。取り乱して…」

「い、いや…別に」

雄二を筆頭に三人それぞれ恐縮している。

三人とも頭のなかは

『ヤベエ…完全に好きな人を聞くタイミング、逃した!』

という気持ちでいっぱいだった。

しかし、何か良い感じの雰囲気が屋上に漂っている。

この良い雰囲気の中、今さら「先生の好きな人、誰なんですか？」  
なんてことが聞けるほど三人は馬鹿ではない。

『どうする、どうするのよ、俺!?!』

と、悩む三人。

そんな三人には気づかずに

「さて、ではそろそろ私も仕事に戻るとしよう」

「はい、私達も教室に戻りますね」

と二人が言う。

マズイ!

そう三人が考えた時、

「お前ら!授業に出ずにこんなところで何をしている!」

「げ、鉄人」

羊一が嫌そうに顔をしかめる。

Fクラス担任になった鉄人がいた。

先程からの騒ぎを聞いてやってきたらしい。

「授業に出ないで何をしている！下には他の奴らが倒れていたが、お前は何をした！」

鉄人が羊一達男三人を見て言う。

「あれは俺達じゃなく、夏月先生が」

羊一が弁明しようと夏月の方を見る。

「に、西むりや先生っ!？」

夏月が真っ赤な顔で慌てていた。

『はっ?』

あまりの展開に固まる四人。

「む、榎木先生。なぜここに？」

「い、いや、あの」

鉄人が夏月に気づいて話しかけるが、夏月はどもる。

会話になっていないが鉄人は勝手に納得した。

「なるほど、先生はコイツらを注意しにきたのですな？」

「ふえ！？ち、ちが」

「ならすいませんでした。私の監督不行き届きでご迷惑を」

「い、いえ、別に迷惑なんて！」

必死に否定する夏月だが、声が小さく聞こえにくい。

と、

「ん？先生、どうしました、顔が真っ赤ですが？」

「な、なんでも！？」

「風邪ですか？…ふむ、ちょっと失礼」

「にやっ！？」

鉄人が手を夏月の額にあてる。  
熱を測るつもりらしい。

しかし

「~~~~っ!？」

夏月の顔はさらに真っ赤になる。  
湯気でも出てきそうだ。

「ぬ！かなりの熱だな…先生、すぐに保健室へ」

鉄人が焦ったように言う。

「こゝ、これは、ちが」

「この熱で保健室まで歩かせるのはマズいな…仕方ない、先生！少し我慢してください！」

「ふにゃ！？」

鉄人が夏月の体を軽々と抱き上げる。

ちょうど俗に言う『お姫様だっこ』の体勢になった。

「?!?!?!、!?!?!」

もはや何を言っているのかわからない夏月。

鉄人は固まっている四人に言う。



「俺は先生を保健室に届ける。お前達は教室に戻って次の授業の準備だ、いいな？」

その声になんとか首を縦にふる四人。

「よし、俺も先生を届けてすぐに戻る」

鉄人はそう言うと保健室に向けて走り出す。

さすがは鉄人。

とても人、一人を抱えた速さではない。

あっという間にいなくなった鉄人。

後に残った四人はしばらく固まっていたが、やがて

「…教室に、戻る、か」

「そう、だな」

「だね…」

と教室に向けて歩き始めた。

「しかし、まさかの相手だったな」

「だね、まさに『まさか』、だったよ」

「…確かに、な」

「あ、あはは…」

四人はそんなことを言いながら教室を目指した…

……

「はあ、全く。とんでもない目があった」

夏月は保健室で一人つぶやく。

あの後、鉄人は夏月を保健室まで届け、ベッドに寝かせた後、他の暇な先生に後を任せ、教室に向かった。

夏月は後に残った先生をなんとかごまかし、ことなきをえた。

それから、しばらく時間が経った今は昼休みだ。

夏月は一人保健室でため息をついていた。

「全く」

…前言撤回。

ため息の後に嬉しそうに笑顔になっていた。

「しかし…『榎木先生』か」

夏月は少し暗い顔になってつぶやく。

親しい人や生徒は、自分のことを夏月と呼ぶ。

しかし、鉄人は柁木と苗字でよんでいた。

「やはり…全然、気になる存在にはなれていない、か」

夏月を保健室に運ぶ時も、全く自分を意識している様子はなかった。

まるで、生徒にするように、接していた。

「まだまだ、だな」

夏月はそこでふと瑞希の顔を思い出す。

あの少女は自分よりも年下なのに、あんなに頑張っていた。

「……そうだった。私も頑張ろう、彼女のように!」

夏月はそうつぶやき、座っていたベッドから立ち上がる。

まずは、そうだ。彼を昼食にでも誘ってみよう。

夏月は白衣を翻し、保健室のドアを開けた。

その背中には、少し、自信のようなものが見えるような気がした。

番外編 第壹問（後書き）

こんな感じですよ。

かなり長くなってしまった。

まあ、こんな感じで今後もやっていきます。

よろしくお願いします。

## 第十八問（前書き）

自分で二週間ごとと言っておきながら…

自分勝手ですいません…

休みと忙しいのがまちまちな状況です。

本当にごめんなさい。

これからも、更新速度がまちまちなってしまつかもです…

とりあえず、どうぞ

## 第十八問

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

ここ文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

そのため、LHRの今の時間はどの教室を見ても活気があふれている。

そして、我がFクラスはというと…

「貴様ら…準備もしないで野球とは、何を考えているっ!!」

鉄人の怒鳴り声が響き渡っていた。

Fクラスのほとんどは先程まで、準備もせずに野球をしていたのだ。

今はやって来た鉄人に全員捕獲され、教室にて説教の真っ最中だった。

「あまつさえ、逃げようとして俺の股間目掛けてボールを投げる始



末

「全く、誰がそんな危険な事を…」

「もう忘れたのか？お前だ、黒峰」

「…サーセンwww」

「…全く、反省が見られんが…まあ、それは後にして」

鉄人は額に青筋をたてつつも、話を変える。

「お前達、もう少し真面目にやったらどうだ。稼ぎをだせばクラスの設備を向上できるかもしれんぞ？」

鉄人の言葉に、急にクラスの皆の目が輝きだした。

「そうか！その手があったか！」

「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

一気に活気づく教室内。

少し前にあった試召戦争に負けたため、現在のFクラスの設備は痛んだござとみかん箱である。

不満がでるのも頷ける有様だ。

皆のその様子を見た鉄人は満足そうにして、言う。

「ようやくやる気になったようだな…ならば、すぐに出し物を決める。俺は少し職員室に行ってくる」

そう言って鉄人は教室を出ていった。

「雄二、代表が前に出て会議を進めなきゃ」

明久が隣の雄二に言う。

「ああ？嫌だね、めんどくさい」

しかし、雄二はそう言って寝たふりする。

「めんどくさいって言っても。それじゃあ、誰が会議を進めるのさ」

「誰かにやらせれば良いだろ？羊一とか」

「俺かよ！？俺だって嫌だ」

「なら、明久を雑用にさせる。好きに使え」

「ふむ、まあ、それならやっても良いかな」

「良くないよ！？僕は一切了解してない！？」

「しゃーねーだろ？結局、誰かがやらにゃーいかんのだ」

「そ、そんな」

羊一は明久の襟を掴んで引きずり無理矢理黒板まで連れていった。

そして、明久にだけ聞こえるように囁く。

『それに、だ、明久。清涼祭で稼いで設備を変えるのはお前にも利益があることだぜ?』

『?』

『まあ、正確にはお前の大好きな姫路の、だがな』

『僕の大好きなっていうのは置いとくとして…どづいづいと?』

『ああ、あれ見てみる明久』

羊一はそう言って、瑞希の方に目を向けた。

明久も同じように見る。

「ケホケホッ」

二人の視線の先では瑞希が咳をしていた。

『……なるほど』

『そういうことだ。体の弱い姫路にはこの教室の環境はちと厳しい。このままだとマズイ、だろ?』

『わかった。だから設備を変える必要があるんだね?』

『そうだ。俺も人の事言えるほど、健康に自信は無いんでな。できたら設備を改善したい…協力してくれ』

『うん、わかったよ』

羊一の言葉に頷く明久。

二人は立ち上がり会議を始めた。

「ん〜、じゃあ明久は意見を黒板に書いていつてくれ」

「はいはい、う〜ん、黒板も汚いなあ」

明久がため息をつきながら短いチョークを手にする。

「じゃ、何か意見あるヤツ、手をあげてくれ」

羊一の言葉に

「よし、ムッツリーニ」

「……………（スクツ）」

ムッツリーニが立ち上がる。

「……………写真集の販売」

「…土屋の言う写真集って、かなり危険な予感がするんだけど」

ムッツリーニの意見に自分の席に座っていた美波が思い切り嫌そうな顔をする。

確かにあのムッツリーニの言う写真集だ。

普通の物ではけしてないだろう。

「どうせ、女子の盗撮写真でしょ？女子からしたら覗かれてるみたいで嫌よ」

「……盗撮なんてしていない」

美波の言葉を必死に否定するムッツリーニ。

正直、無駄だと思う……

「まあ、意見は意見だ。明久、書いてくれ」

「はいよ、えつと……」

候補一…写真集『秘密の覗き部屋』

「次。じゃあ、姫路！」

「あ、はい。私は占いの館みたいなのが良いかと思えます」

「あ、それ良い！ウチも瑞希の意見に賛成」

瑞希が提案した。

美波も先程までしかめていた顔に笑顔を浮かべ、賛成する。

二人とも、年頃の女の子だ。占いのようなものはやはり好きなんだろう。

「なるほどな、それなら俺も協力できそうだ」

「え、羊一。占いなんてできたの？」

明久が驚いたように聞く。

「ああ、俺の情報網を最大限に利用した的中率九割以上の占いができるぜ」

「…それはもう、占いとは言わないよね」

ニヤリと笑う羊一に明久がつぶやく。

美波や瑞希もその言葉にちょっと慌てて言う。

「あ、あまり占いでそういうのは、ちょっと…」



「そ、そうよ。良くない結果が出た時に傷つく人もいるだろうし。占いは「当たるも八卦、当たらぬも八卦」ぐらいがちょうど良いの  
「！」

「ぬ。まあ、二人がそういうなら…明久、書いてくれ」

「う、うん。あれ？…こうかな？」

候補二「…占いの館『当たるも八卦、当たらぬも八卦』」。

「さて、他に意見は…む、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川が立ち上がる。

「中華喫茶？秀吉にチャイナドレスでも着せようっていつのか？」

「羊一よ、なぜそこで姫路達でなくワシの名前がでるのじゃっ！？」

秀吉が思わずという感じに声をあげる。

しかし、須川は話を続ける。

「いや、その提案は非常に、ひじょうに！魅力的だが、違う」

須川は断腸の思いで羊一の意見を否定して、続ける。

「俺の提案するのは本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉からわかるように、こ」と『食べる』ことに関して中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化により中華の淘汰が言われるが、そもそも」

何やらヒートアップして熱弁をふるう須川。

「あゝ、貴重な意見、ありがとう。明久、よろしく」

「あ、う、うん？」

須川の話を途中で切り上げさせ、羊一が指示した。

しかし、明久は困り顔で首を傾げている。

「どうした？はよ、書きんしゃい」

「りよ、了解」

候補三…中華喫茶『ヨーロッパアン』

と、明久が書き終えたところで教室の扉がガラガラと音を立てて開き、筋骨隆々のごつい身体のコリラ…もとい、鉄人が入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つつす。」

羊一が言つと、鉄人は明久が書いた黒板の字に目をやった。

候補一…写真集『秘密の覗き部屋』

候補二…占いの館『当たるも八卦、当たらぬも八卦』

候補三…中華喫茶『ヨーロッパ』

「…補習の時間を倍にした方が良くもしれんな」

「しまった！僕らがバカだと思われている！」

「お前のせいだろっ！！せ、先生、バカはコイツだけです！」

「羊ー！？貴様、僕をバカ扱いして逃れるつもりだな！」

明久の言葉に羊一が焦って叫ぶ。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、思わず背筋が伸びる一同。

「先生…僕、先生のこと見直しまし」

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

「…同級生だったら、シバいてやれるのに」

明久が怒りのあまりふるえている。

「まあ、そんなことは置いとくとして…」

羊一が、話を戻して皆を見回して言う。

「とりあえず、この三つの中から決めるっつーことで…決めてくれ  
や」

羊一がそう言うところクラスがまた騒がしくなる。

『利潤が多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真集の方が』

『けど、女性客が来ない可能性があるぞ』

クラスの中に活気があふれ、色々な意見が飛び交う。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。旧校舎だと、特徴がないのは致命傷じゃないか』

『なら、占いの館は？』

『確かに女に人気はありそうだが、男の客が遠ざかる。』

『たった二日でそれは厳しいな』

喧々囂々。まとまりがない。

雄二を除くいつものメンバーや壇上の明久まで騒ぎ出す。

教室全体が喧騒に包まれていた。

…と

「…皆、ちょっと良いか？」

羊一が一言、言った。

その言葉に、騒がしかった教室が静かになり、クラス全員が羊一に視線を向ける。

「一つ、思ったんだ」

羊一が、ゆっくりと、言った。

「一つに決めるの面倒だから、どうせなら、全部やっちゃわね？」

シーン……

羊一の言葉に教室全体が数秒間、静寂に包まる。

そして…

『……………それだよ』

教室全員が賛成する。

「…お前らな…」

鉄人が一人、教室のすみでため息をついた。

羊一の意見の下、Fクラスの出し物が決まった……

世界初！  
おんりく

占い、写真つき中華喫茶『ヨーロッパピアン』



近日、開店！？

## 第十八問（後書き）

短いですが、こんな感じですよ。  
できたら次も読んでやってください。

第十九問（前書き）

第十九問です。

どうぞ

## 第十九問

「おい、明久。ちょっといいか？」

帰りのHRも終わって放課後。

帰ろうとしている明久を羊一が呼びとめた。

「ん、何か用？」

「いや、実は…な」

羊一が少しすまなそうに言う。

「少し調べてみたんだが、教室の改修は無理だとわかった」

「え！…？ど、どういふこと！？」

「いや、設備については喫茶店の利益でなんとかなるんだが…教室自体の改修ともなると」

「そっ…ど…ど…」

「そこで明久、一つ相談なんだが」

と、羊一がそこまで言った時、

「アキ、黒峰、ちょっといい？」

美波が話しかけてきた。

「あ、ゴメン。話し中だった？」

「いや、かまわねえ。なんだ、島田？」

「そつっ..なら言っけど」

美波が二人の顔を見て言う。

「その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

美波がそう言うと羊一が少し驚いたように言う。

「あれま。島田も同じこと考えてたのか」

「え？なら羊一の相談も」

「ああ、雄二を引っ張り出せないかってヤツだ」

二人の考えを聞いた明久は少し考えながら言う。

「うーん、それは難しいなあ…さっきもそうだったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

美波が何かを期待したような眼差しを明久に送る。

「え？別に僕が頼んだってアイツの返事は変わらないと思うけど」

「いや、明久。お前なら大丈夫だ。だって」

「そりゃ確かによくつるんではいるけど、だからと言って別に」

「だってお前ら、愛しあってたんだろ？」

「もう僕お婿にいけないっ！」

ニヤつきながら羊一が言った言葉に明久が泣きながら叫ぶ。

二人の後ろでは羊一の言葉に同意するように美波が頷いていた。

美波はともかく、羊一は確実にわかったうえでやっている。

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「…あ、明久？」

と、羊一と帰ろうとやって来ていた秀吉の動きが止まる。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか…」

「ひ、秀吉！違うんだ！さっきのはただの言葉のアヤで！それと、

僕らの間にあるのは決して歳の差じゃないと思う!」

「そうだ!お前のようなバカにうちの秀吉はやれん!」

「だからといって、そういう障害でもないから!ていうか、羊一、秀吉とは同い年だろ!」

顔を赤くして俯く秀吉の前に羊一が立ち塞がり(しかしニヤつきながら)言った。

と、そんなコントを無視して美波が明久に言う。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと?」

「え?あ、うん。そういうことになるかな」

頭を振って気持ちを切り替えた明久が言う。

「なんとかできないの?このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような

…」



目を伏せ、沈んだ面持ちになる美波。

その様子を見てまだ少し顔を赤くした秀吉が聞く。

「ところで、おぬしらは何の話をしておるのじゃ？そんなに思いつめた顔をするとは、随分と深刻な話のようじゃが」

「深刻ってほどじゃないんだけど」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」

「…どういうことだ？島田」

美波の言葉に羊一が聞く。

「本人には言わないで欲しいって言われたんだけど…」

「大丈夫だ。秘密は守る」

「…実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

美波の言葉に明久が全身の動きを止めた。

しばらくすると、何やらプルプルとふるえ始める。

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけてるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「あゝ、もう。しょうがねえな。ほれ、明久、目を覚ませ」

羊一がガクガクと明久の肩を揺する。

と、

「羊」…僕がモヒカンになってしまったら、秀吉のことは、頼んだよ?」

「…そろそろ本格的に病院に担ぎ込んだ方がいいんじゃないかね? まあ、治らねえとは思っが」

「…どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんわ」

三人がそれぞれ呆れていると明久（の意識）が戻ってきた。

「美波！姫路さんが転校って、どういことさ！」

明久が微妙な目つきの美波に詰め寄る。

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「…島田。さっきから、聞いてるが姫路の転校と教室の設備の話は

関係ないように思っただが？」

羊一の言葉に美波が頷く。

「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由は『Fクラスの環境』なんだから」

「…そういうことが」

美波の言葉に羊一が納得したように言う。

「つまり、今のFクラスの現状が姫路の今後の成長に悪影響を与えると、姫路の両親が考えて」

「…それをさけるために、転校ってこと？」

「ええ。それに瑞希は身体も弱いから」

「そうか、それが一番マズイよね…」

明久はLHRの時に瑞希が咳をしていたのを思い出し、つぶやく。

一応、掃除はしてはいるが決して衛生的とは言えない教室である。

このまま冬になってしまったら冷たい隙間風にあたりつづけ、瑞希でなくとも体調を崩してしまうだろう。

「なるほどのう。だから喫茶店を成功させ、その利益で設備を向上させよう」と

「うん。瑞希自身もウチと二人で召喚大会にでて優秀することで『お父さんを見返す』って言ってるけど、教室もどうにかしないとね」

「…あれ？でも、さっき羊一が」

「ああ、喫茶店だけじゃ無理だな」

羊一が先程明久に言ったことを二人に話す。

「…じゃあ、喫茶店の利益だけじゃ、教室自体の補修は無理なの？」

「ああ、どうしたって学校側の協力が不可欠だ」

「むづ…どうにかならんのか？羊一よ」

秀吉がそう聞くと羊一は

「一応…考えは、ある」

「それは？」

「簡単だ。学園長に直訴すりゃあいい」

「それだけ？」

「ああ、それで問題ないだろう。曲がりなりにもここは教育機関だからな…ただ」

「ただ？」

「この学園長つーのが、また油断ならねえババアらしくてな。」

下手なこと言ったら何言われるかわかったもんじゃない」

「へえ〜。でも羊一ならそんなババア相手でも交渉できるんじゃない？」

明久の言葉に羊一は首を横にふる。

「いや、駄目だ。なんつーか、ホレ、俺は思ったことをすぐに口に出しちゃまうだろ？今回は失敗は許されないから、お前や雄二に頼もうと思っただけな」

「なるほど。でも、僕らだって同じようなものだよ？」

「お前らは大丈夫だ。お前ら俺と違って問題児として有名だからな。少しくらいの無礼は無視してくれるだろ」

「そっかあ。でも羊一、言っとくけど君、僕らのこと言えるほど、評判良くないよ？」

明久が青筋を立てながら引き攣った笑顔で言った。

「まあ、いいさ。で、さっそく雄二捕獲作戦を実行するわけだが…」

羊一が話し始めようとした、その時、

ブーツ、ブーツ、ブーツ、

「あ、電話…雄二からだ」

マナーモードにした明久の携帯が震えて着信を告げる。

どうやら雄二からのようだ。

それを聞いて羊一が明久に言った。

「明久、ちょい携帯貸して」

「え、良いけど」

明久は首を傾げたが、携帯を羊一に渡した。

ガチャ、



『おう、明久！ちょっと、俺のかばんを』

「よう、雄二。ちょうど良いところに」

『…羊一。なんでお前が…』

「まあ、んなことどうだっていいじゃん それより、どないしたん  
？」

『あ、ああ…ちょっと翔子に追われててな。明久に俺のかばんを持  
つて来てもらいたいんだ』

「へえ、そりゃ大変。わかった、持っていくから今どこにいるか  
教えてくれや」

『今、俺は女子更衣室に隠れてる。できるだけ早く頼む。じゃあな』

ブチッ。ツ、ツ、ツ

雄二からの電話が切られた。

雄二はよほど焦っているのか早口で用件だけ伝えて切ってしまった。

羊一は明久に携帯を返して、今度は自分の携帯を取り出し、どこかに電話をかけ始めた。

プルルル、プルルル、プルルル

ガチャ

『はい、霧島です』

「あ、霧島？黒峰だけんど」

『……携帯番号、教えてたっけ？』

「まあ、そんな些細なことは置いといて……今何してる？」

『……雄二と一緒に帰るために今、探している』

「そうか……。ならちようどいい。雄二は女子更衣室にいるらしいで

「?なんでも、ある女の子の着替えが覗きたいとかで」

『……………それは本当?』

「ああ。俺は止めたんだがどうしても聞かなくて…」

『…雄二、浮気は許さない』

ブチッ

ツィ、ツィ、ツィ、

「ふう…これで雄二は間違いなく捕獲できるぜ」

「…お主、やはり鬼畜じゃな」

羊一がやり遂げた男の顔で額の汗を拭う仕草をしてる横で三人が微妙な顔をしていた。

「何を言う。これで雄二を逃す可能性はゼロ。しかもさらなる逃亡も阻止できる。素晴らしい作戦だろ?」

「…そうは言ったって」

明久が羊一の言葉に呆れたように言っている

『な、し、翔子！？なぜ、お前がここにいぐああっ！？なんでいきなり俺の両目をつぶす！？』

『…雄二、浮気は許さない』

『言ってる意味が、ちよっ、ま、翔子、話しあいを』

『…問答無用』

下の階の方から絶叫が響き渡ってきた。

「お、さすがに仕事はやいな。じゃ、回収しにいきますか」

羊一がそう言って階段に向かって歩き始める。

「…雄二、学祭を手伝う前に死んじゃうんじゃない？」

明久がボソツと言った一言に他の二人も顔かざるを得なかった。

第十九問（後書き）

こんな感じですよ。

なんか説明だけでほとんど終わってしまった。

次あたりイロイロやろうかなと考えてます。

できたら次も読んでやってください。

**第二十問（前書き）**

第二十問です。

とりあえず、いじり。

## 第二十問

「羊一、貴様を殺す…！」

「ハハハ。なんだい、雄二？縄でぐるぐるにされながらも俺に殺意の籠った視線を向けてくるなんて」

雄二の殺気を受け流し羊一が嘲笑う。

ここは放課後のFクラス教室。

女子更衣室に潜んでいて翔子に襲われていた雄二を回収した羊一達はここに運び込んでいた。

雄二は全身を縄でぐるぐるに縛られ床に転がされている。

「…雄二、黒峰は良い人。睨んでは、ダメ」

ちやっかり翔子もついて来ていた。

ちなみに、雄二が女子更衣室に忍び込んだのは翔子の着替えを覗くためと説明したら「…雄二のエッチ」と顔を赤くしながらも許してくれた。



その時に雄二が必死に阻止しようとしていたが、羊一が持っていたスタンガン（最大20万ボルト）で黙らせていた。

そんな諸々の事があつた後である。

「翔子。コイツのどこらへんが『良い人』なんだ……」

床に転がされたまま雄二が翔子に言う。

「……これからも雄二の情報を逐一、報告してくれると約束してくれた」

「羊一いいっ！貴様、俺を売りやがったなあ！！」

「まあ、そんな雑音はともかく」

羊一は雄二の絶叫を完全に無視して先程、話しあつた内容を二人に説明した。

「…なるほど。だから俺の協力が必要だと？」

「そゆこと 協力してくれ」

羊一が笑顔で言う。しかし、

「断る」

「なぜっ!？」

「むしろどうして断らないと思ったのか聞きたいんだが!？」

「雄二、貴様。姫路が転校してしまっても良いと言うのか？」

「姫路については気の毒だとは思うが、こんな事（殺されかけた後スマキにされて床に転がす）されて協力しようなんざ思えるか！」

「この悪魔！鬼！女子更衣室に潜む妖怪『変態ツンツン頭』！」

「てめえ、最後のは完全にただの悪口じゃねえか！」

二人が大声で罵りあい始めた。

と、それまで黙って座り、話を聞いていた翔子が立ち上がり、雄二に近づいた。

「?なんだ、翔子」

「…雄二。黒峰達に協力してあげて」

「な…」

予想外の言葉に驚く雄二。

それは周りにいた皆も同じでそれぞれに驚いた顔で翔子を見ている。

「…仲の良い友達と離れ離れになるのはツライこと。できるならそんな体験はしないに限る」

翔子がゆっくりと諭すように言う。

「…雄二なら、何とかできると私は思う」

「……………」

翔子が雄二の目を見て言った。

そこには雄二にたいする信頼が横にいた羊一にも見てとれた。

まして幼なじみの雄二ならわからないわけがない。

雄二は翔子の目を無言でしばらく見ていたが、

「…はあく。わかった、わかった。協力すりゃいいんだろ、協力すりゃ」

と諦めたように言った。

その言葉に満足そうに翔子が微笑む。

「…雄二はやっぱり優しい」

「馬鹿言うな！俺はあくまでも仕方なくだな…って、おい翔子！頭を撫でるな！俺はガキじゃねえんだぞ！」

動けない雄二の頭をまるで子供を褒めるように撫でる翔子だった。

こうして羊一達は雄二（ついでに翔子）の協力を取り付けたのだ  
た。

.....

『却下だね』

『雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう』

『…明久。もう少し態度には気を遣え』

『…やっぱり、俺も行った方が良かったかね？』

イヤホンから聞こえてくる会話に頭を抱えて座り込む羊一。

羊一は学園長室から少し離れた空き教室で一人、学園長室で交わさ

れる会話を明久の制服に取り付けた盗聴機で聞いていた。

羊一としては自分が学園長に会ったら確実に失礼な態度を取るであろう事を計算して明久達に行かせたのだが、あまり意味はなかったようだった。

と、羊一が一人頭を抱えている間も学園長室の会話は続いているようで三人の会話が聞こえてきている。

『まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア』

『そうですね。教えて下さい、ババア』

『…お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい?』

学園長の呆れたような声が聞こえた。

『…もうダメだ。完全にオワタ』

羊一が絶望したように言う。

そして羊一の予想通り、

『理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども』

学園長の言葉。

「だよな〜…どうすんべ、コソ…」

羊一が座っている椅子の上で諦めの声をあげる。

しかし、

『…と、いつもなら言ってるんだけどね』

「おう？何じゃ？なんかイベント発生か？」

羊一は椅子に座り直し、イヤホンの向こうの声に集中する。

『可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるっじゃないか』

「…取り引き、か」

眉間にシワを寄せ、さらに会話に集中する。

『その条件って何ですか？』

『ああ、条件は…』

学園長が説明を始めた。

それをまとめると次のようになる。

・ 召喚大会の賞品は正賞『白金の腕輪』と賞状など、副賞『如月八  
イランドプレオーブンプレミアムペアチケット』（長い…）

・ この副賞のチケットは如月八イランドを訪れたカップルを結婚ま  
でコーディネートしてジnkクスを作ろうとしているという噂がある

・ 正式な契約なため今更商品に出さないわけにはいかない



・そのため、それを明久と雄二に優勝して回収してもらいたいという感じだ。

「うーむ…」

羊一は学園長の要求をまとめたメモを身ながらイヤホンを外し、唸る。

学園長室では今、雄二達が学園長と交渉が続いているが、それよりも気になることがあった。

「何だってババアはアイツらにこんな事、頼んだんだ？」

そうなのだ。

本当にチケットを回収したいだけなら優勝した者に事情を話して譲って貰えば良い。

わざわざ優勝を狙い、しかもFクラスの明久達を指名する理由がわからない。

「…学園長の真の理由を調べねえとな…」

羊一がそうつつぶやく。

と、

ガラガラガラ…

「っ!？」

突然、羊一の背後、ちょうど教育の入り口あたりから扉を開ける音が聞こえた。

驚いて振り返ると、

「君は…たしか、黒峰君、でしたか？」

「…竹原、教頭…」

羊一が少し顔をしかめて言う。

教室の入り口のところには眼鏡を弄りながら立っている男がいた。

男はこの学園の教頭である竹原だ。

鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒には人気が高い先生である。

しかし、羊一はこの教頭のことはあまり好きではなかった。

なんとなく、合わないというのもそうだが、『一部の女子』の中に彼の思い人がいるのが大きな理由だ。

『まったく。アンタも竹原先生みたいに落ち着いた男性になりなさいよね』

羊一は頭の中で響く声に少し不機嫌になりながらも、竹原に挨拶する。

「どつもつす、先生。ちょっと寝ちゃってみたいで。でもそろそろ帰ります。そんじゃ〜」

と言って椅子から立ち上がり、教室から出ようとする。

しかし…

ザッ…

「……………なんすか？」

羊一の進行方向に竹原が立ち塞がる。

羊一がさらに少し不機嫌になりながら、竹原に聞く。

「いえ、ね。ちょっと君に相談がありました」

「…相談、っすか？」

「ええ…でもその前に一つ、質問です」

「黒峰君。あなた、」

竹原は一つ、間を置き語る。

「学園長の話、聞いていましたよね？」

「……………何の話ですか？」

羊一はとぼける。

しかし

「ごまかしても無駄ですよ。先程から、君が盗聴しているのは見ていましたから」

竹原は眼鏡を弄りながら断言した。

その声にはハツタリを言っている様子はない。

本当の事を語っているようだ。

羊一は内心、舌打ちをしたがあくまでとぼけることにした。

「何を言ってるのか、まったくわかんない。ていうか先生こそ、何で学園長が話したって知ってるんすか？」

羊一は逆に質問した。

自分はイヤホンをしていたために音は外に漏れてはいない。

ならば竹原はなぜ、学園長室での会話について知っているのか。

竹原はその質問にクツと笑って上着のポケットから小さな機械を取り出し、羊一に見せる。

「……盗聴機、すね？」

羊一の質問に竹原は笑顔で頷き、肯定する。

小さな機械は羊一の使っていたよりも本格的な物だった。

しかし、盗聴機には違いない。

それを竹原が持っているということは、すなわち…

「…何だ。教頭、自分も盗聴してんじゃないか」

羊一は挑発するようにニヤリと笑う。

しかし、竹原は張り付いたような笑顔を浮かべるのみ

その様子に顔をしかめながらも羊一は言う。

「何すか、教頭、学園長が好きなんすか？にしたって盗聴はやり過ぎでしょ。最低え〜」

わざと自分を棚にあげて挑発する。

しかしそれでも竹原は笑顔で立ち塞がる。

膠着した状況にイライラしつつ、羊一はやや強引に教室を出ようとする。

「まあ、教頭の趣味のことは黙つといてあげます。ついでに、眼鏡変えた方がいいですね。ありえない物が見えちゃってるみたいですから」

と、竹原がため息をつく。

「ふう…あくまでもその態度を崩しませんか…ならば、仕方ない。コレを使いましょう」

そう言つて胸ポケットから何枚か写真を取り出し、羊一に見せる。

そこには、

「…明久、雄二、秀吉にムツツリー二。姫路や島田まで」

Fクラスのいつものメンバーの顔写真だ。

それを見せながら竹原は笑顔で言う。

「私はこの学園の教頭です。しかも、学園長が研究に没頭している



ため、結構自由ができるのですよ」

「…それが、何か？」

嫌な予感がしつつ、羊一が続きを促す。

竹原は能面のような笑顔を浮かべたまま、言った。

「つまり…私ならば君の大切な友人達をどうとでもできるわけですが…例えば、何か問題を起こしたと言って退学にさせる、とか」

「！？」  
「！？」」

羊一は嫌な予感が的中したことを悟り、手をギュッと握った。

そうすることで何と声をあげるのを我慢して、できるだけ何でもないように言ひ。

「…そんなの無理に決まってるっすね」

「ほう？なぜですか？」

「理由がねえすよ…雄二や明久はともかく、島田や秀吉、まして姫路なんかは優等生中の優等生ですぜ？」

しかし竹原は笑顔のまま、何でもないように語る。

「ああ、そんなことですか。理由なんぞ、なんでも良いのですよ。例えば、万引きをした、とか、暴力事件を起こした、とか」

「いくらでも捏造できます。もちろん、それらしい証拠をでっちあげる準備もあります」

「……………」

羊一は拳を白くなるほどに握りしめ、ならに話す。

「……………っていつかあ、それを俺に話してどうすんすか？別にアイツらがどうなっても俺はどうでもいいっすけど？」

表向き、平気であるように言う。

「ほう…クラスの仲間を見捨てますか」

「ええ、先生も俺の評判は知ってんでしょ？そんな俺がクラスメイ  
トのために頑張る？ありえねー！」

「そうですか…なら…」

「彼女ならば、どうでしょうか？」

竹原は胸ポケットからさらに一枚、写真を取り出し、床に落とす。

ヒリヒリと羊一の足元に落ちた写真には…

「……………優子」

優子の顔が写っていた。

「Aクラスの彼女のことです。将来は我が校が目指している優秀な人材になってくれることでしょう」

「……………」

「私としても、とても残念です…将来有望な彼女が人生を棒に振るなんて…」

「……………てめえ……………」

羊一が竹原を睨みつける。

まるで視線で竹原を殺そうとしているように。

しかし、竹原はまったく意にかいさず、羊一に顔を寄せ、言う。

「…べつじします。」

羊一は少し考えるように顔を伏せ、言う。

「…俺は何をすりゃあいい？」

「…あなたが頭の良い方で良かった」

竹原は能面の笑顔を崩し、ニヤリと笑う。

「なに、簡単なことです。私の手伝いをしていただきたい」

「手伝い？」

「ええ。あなたも聞いた通り、学園長はチケットを回収しようとしています」

「しかし、私としては回収されてはイロイロと困ってしまうのですよ。なんせアレを契約したのは私でね」

「回収されて計画が頓挫してしまっただけは私の面目は丸つぶれ。そう  
なっただけは私は終わりです」

「…なら、俺に召喚大会で優勝しろってのか？」

「いえ。それはすでにこちらで用意しました。あなたにはその方達のサポートをしていただきたいのです」

竹原が眼鏡を弄りつつ、言う。

口調こそ丁寧だが、顔には嫌らしい笑顔が浮かべられている。

もはや自分を偽る必要はないと感じたようだ。

「…なんで俺を選んだ」

羊一は敬語を忘れ、不機嫌を隠そうともせずと言う。

その言葉にニヤつきながら竹原が答える。

「あなたの噂はイロイロ聞いていまして…あなたならば私の作戦を確実に達成してくれそうだと感じましてね」

「……そーかい」

不快そうに顔をしかめ、つぶやく。

「…おっと、もうこんな時間だ。仕事に戻らなくては」

ふと時計を確認した竹原がそう言った。

時計はかなり時間が経っているのを示していた。

竹原は教室から出ようとして、入り口で立ち止まり、振り返る。

「…では、さようなら。黒峰君。また、明日」

振り返った竹原の顔にはすでに仮面の笑顔が張り付いていた。

彼はそう言うともう何も言わず、誰もいない廊下を靴音を立てて歩き去っていった。

あとには羊一が一人、教室に残された。

「……………」

……………ギリィッ……

拳を血がでそうなほどに握り、奥歯を噛みしめる。

「……また、あの時みたく、何もできないのか？俺は……」

羊一は自分の右手を見つめ……



「だらっしゅあっ!!」

右手を思いきり、目の前の机に叩きつける。

ゴキイ…!!

右手の小指のあたりから鈍い音が響き、激痛がはしる。

羊一は右手を見つめ、思う。

常人より、圧倒的に弱い体。

しかし、もう、何もできなかつた昔の自分とは違う。

「……上等じゃねえか」

小指の動きが悪い。腫れてきていた。悪くしたらヒビくらいはいたかもしれない。

しかし、羊一はニヤリと口の端を持ち上げ、いつものように笑う。

「俺の大切なモノに手をだしやがったこと、死ぬほど後悔させてやるぜ…竹原あ…」

羊一は、そうつぶやくと床に散らばった写真をビリビリに破り、ごみ箱に捨てて教室を出ていった。

## 第二十問（後書き）

こんな感じですか。

教頭、あんなにして良かったのか…？

あ、あと前回、「羊一が虚弱体質じゃない」とのご指摘をいただきました。

まったくもってその通りでございます。

今後、もっと虚弱体質っぽい羊一を目指してやっていきたいと思えます。すいませんでした。

こんな腕のない作者ですが、できたら次も読んでやってください。

## 第二十一問（前書き）

どうせです。

風邪にじりらせてGWは寝て過してました…ちきじょう。

とらぬえず、じいぢ。

## 第二十一問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

清涼祭初日の朝。

Fクラス教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を買っていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内のいたるところに設置されているテーブル。

実はこれ、机がわりにしてたみかん箱だったりする。

巧く積み重ねて小綺麗なクロスをかけると汚い箱も立派なテーブルだ。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

秀吉を尊敬の目で見る瑞希。

「演劇部で使ってる物じゃが、なかなか良い生地じゃろ?」

少し自慢げに言う秀吉。

「ま、見かけはそれなりのものだがな。その分、クロスをめくるとかなり残念な有様だ」

羊一がクロスを捲る。

すると、その下には見慣れた汚い箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

美波が明久の隣から覗き込んでくる。

確かに彼女の言うとおり、こんなみすばらしいみかん箱ではイメージダウンは免れない。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にはまっておいてもらえるさ」

明久が樂觀的に言う。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

「ああ、占いの方はまかせな」

羊一がどこからともなく魔法使いの衣装を取り出して言う。

見た目はハルの長が着ていたようなアレだった。

「へえー。結構、本格的だね」

「まあな。と、そうだな明久。ちょっと占ってみるか？」

「え、いいの？じゃあ、ちょっとおためしで」

「ほいほい…じゃあ…」

羊一は魔法使いの衣装を着込み、頭の上に乗せた帽子の中をゴソゴソと探る。

「おお、あった、あった」

しばらくゴソゴソしていた羊一だったが目当てのものを見つけ、取り出した。

「ではお前はこれで占う」

そう言って、取り出したのは…

みずみずしい目。

キラキラと光を反射する身体。  
生臭い臭い。

「……魚？」

「正確には鰯だ」

羊一は鰯を二匹手にして言う。



「ではこれから『鰯占い』を開始する」

「鰯占いつて何!?!」

明久の叫びを完全に無視して羊一は鰯を持った両手を胸の前でクロスさせ、静かに目を閉じ…

「さんまあ—————っ!?!」

「ええーっ!?!」

クワツと目を見開き、叫ぶ。

「な、なんか怖いよ!?!この占い。ていつか鰯なのにさんま!?!」

ドン引きする明久を無視して占いは続く。

「さんまあっ!?!さんまあっ!?!」

ピタンッ!ピタンッ!

「い、痛っ、痛いよ羊一！なんで鱈で僕の頬を殴るの！？」

「はあーっ！ー！」

羊一は叫び、目を見開いて

「…だめだ。やはりわからん」

『ええええっ！？』

明久含めその場にいた全員が声をあげた。

「ちょっと黒峰！なんでわからないのよ！？」

「は？わかるわけないじゃん。アレで」

「な、ならなんであんな儀式みたいなことを!？」

「ああ、演出、演出」

「…夢も希望もない回答じゃの」

「じゃあ僕の頬を鰯で殴ったのも演出だって言つの!?!?それはあまりに酷」

「いや、あれはただのストレス発散」

「もっと酷い!？」

明久が涙を流して床に突っ伏す。

「まあまあ、明久、落ちつけ。生臭いぞ?」

「誰のせいだよ…」

「それより、占いの結果発表だ。いいか?」

羊一はそう言って衣装の懐から手帳を取り出し、開ける。

「え、ここ最近のあなたの行動、周りの環境、知能の低さ、その他諸々を鑑みた結果……」

「ねえ、今さらりと罵倒しなかった？」

「あなたの運勢は！」

羊一は帽子の中から小さな紙を取り出し明久に渡す。

「あ、これが結果？どれどれ」

明久が紙に書いてある文字を読みあげる。

大凶

今日のあなたの運勢は最悪。良くないことが頻発するでしょう。

具体的には、命の危険だったり、変態に会ったり、命の危険だったり、人生の汚点だったり。

…ガンバっ 生き残れよ

「吉井君、大凶ですか。残念でしたね」

「いや、僕、命の危険多くない？」

「まあ、所詮は占いだ。気にするな。さっき自分でやった時も大凶だったし」

「そ、そう？」

ほっとした様子の明久と、

「…飲茶も完璧」

「おわっ」

いきなりムツツリーニが現れた。

「よう、ムッツリーニ。厨房の方もOKか？」

「…味見用」

そう言ってムッツリーニが差し出したのは、木のお盆。

上には陶器のティーセットと胡麻団子が乗っていた。

「わあ…。美味しそう…」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……（コクリ）」

「では、遠慮なく頂くのかの」

瑞希、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作り立てで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいですー！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

と、大絶賛だった。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

瑞希と美波の目がトロンと垂れる。

トリップ状態だ。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「お、俺も、俺も」

「……（コクコク）」

ムッツリーニが残った二つを明久と羊一に差し出す。

楊枝がないので、手でつまんで軽く一口だけ頬張ってみる二人。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとってもんごパっ」

明久の口からありえない音が出た。

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

「……………！！（ゲイゲイ！）」

「む、ムッツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

ムッツリーニが団子の残りを明久の口に押し付けてくる。

「羊一！帰ってくるのじゃ！」

秀吉が必死に羊一に心臓マッサージをほどこしている。



「うーっす。戻ってきたぞ」

と、そんなところに雄二が戻ってきた。

「あ、ああ、お帰り雄二」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

テーブルの陰に隠れて羊一の死体が見えないのか、雄二は躊躇いなく明久の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「…たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「？お前らが何を言っているのかわからんが…。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとってもんゴパっ」

「あ、なんか既視感」

床に倒れ伏す雄二。

「あー、雄二。とっても美味しかったよね?」

明久が雄二に声をかける。

「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したままで、雄二が返事をしてきた。

「あの川を渡ればいいんだろう?」

「ゆ、雄二! その川はダメだ! 渡ったら戻れなくなっちゃう!」

雄二が致命傷をくらったようだ。

「…こっちも限界」

「あ、明久! 羊一の心臓の音が聞こえんぞ!」

「く、こっちも手いっぱいだよ！ムッツリーニ！保健室に行って、夏月先生を！」

「…わかった！」

駆け出すムッツリーニ。

と、

「え？あれ？黒峰君と坂本君はどうしたんですか？」

「あ、ホントだ。黒峰、坂本、大丈夫？」

トリップしていた二人が現実世界に帰ってきたようだ。

二人をここまで夢心地にする胡麻団子の売り上げへの期待大である。

「だ、大丈夫だよ。ね、秀吉？」

「そつじゃ、なんの心配もいらんぞ」

必死にごまかす二人。

この騒ぎは夏月先生が二人を蘇生するまで続いた。

.....

「胡麻団子怖い胡麻団子怖い胡麻団子怖い胡麻団子怖い胡麻団子怖い胡麻団子怖い  
い」

「羊一よ。気持ちわかるが気をしっかり持つのじゃ」

Fクラス教室改め、占い、写真付き中華喫茶「ヨーロッパ」。

その店内のスタッフルームの隅で羊一が魔法使いの衣装のまま震えていた。

その後、なんとか生還をはたした羊一だったが、急性胡麻団子恐怖症を発症したらしい。

「とういかお主なら、姫路が料理していた事を知っておると思ったのじゃが？」

「まさか、あんなところに交じってるなんてわからなかったたたたたた…」

「むっ。今度は処理落ちし始めおった」

その後、秀吉が五分ほど励まし、羊一はなんとか平静を取り戻した。

「…もう胡麻団子は絶対食わねえ」

そうブツブツ呟きつつ、羊一はスタッフルームから出て、店内に入る。

店内には決して多いとは言えないがちらほらと客が入っていた。

「ふむ。この時間にしちゃあ、入ってんな」

「うむ。明久と雄二が戻ってくる頃にはもうちょっと入っておるじやろ」

羊一の発言に秀吉が同意する。

明久と雄二は学園長との約束を果たすため、現在、召喚大会の一回戦に行っている。

「…あの二人にや、何としても勝ち抜いてもらわないとな」

「？何か言ったかの、羊一」

「何でもない」

羊一は手を振ってごまかしつつ、数日前のことを思い出す。

.....

「で、何の用なんだ？俺を呼び出してまでなんてよ」

「まあ、そんなに苛立たないで。すぐにすみませよ」

清涼祭を数日後に控えた日の放課後。

竹原に呼び出された羊一は準備を抜け出して、指定された教頭の部屋にまでやって来ていた。

羊一は不機嫌を隠そうともせず、部屋にあったソファーに座り、足をテーブルに乗つけた体勢で竹原を睨んでいる。

竹原はその視線にもうすら笑いを張り付け、羊一の反対のソファーに座っていた。

と、

ゴンゴン…

「お、来ましたね。入りなさい、二人とも」

扉がノックされ、竹原が言う。

扉を開けて、二人の男子生徒が入ってきた。

一人は小さなモヒカン、もう一人は丸坊主という髪型をしている。

どうやら二人とも三年らしい。

「紹介しますよ。彼らが大会に出場する生徒です。二人とも、自己紹介を」

「三年の夏川だ」

「同じく三年の常村」

竹原に言われ、名前を言っていく二人。

どうやら、常村がモヒカン。夏川が坊主の方らしい。

「…二年、黒峰」

羊一は二人の方を見もせずと言う。

年下のこの態度に二人は不愉快そうに顔をしかめるが、竹原の手前、大人しくしている。



「このメンバーで清涼祭での作戦を実行します。当日は各員、私の指示の通りに動いてください…では」

竹原の話は終わったと言わんばかりに自分のデスクに座り、仕事を始めた。

今回は顔見せ程度、ということなのだろう。

羊一はそう判断し、さっさと部屋を出ていく。

「…チツ、胸糞悪い」

羊一は廊下を歩きながら、吐き捨てるようにつぶやく。

あの男に脅されてから何度か今日のように呼び出され当日の確認等をした。

今日会ったあの二人が召喚大会に参加、優勝を目指す。

羊一はそのサポート、とのことだ。

しかし、しかしだ。

もちろん、羊一としてはただ竹原の指示通りに働くつもりはまったく無い。

それとなく奴らの作戦を邪魔、ぶっ潰す方向でいくつもりだ。

そのために…

「…明久達を利用させてもらおうとするか」

明久達も大会に出場する。

ならばそれに密かに協力してやり、決勝までいけば…

奴らは焦って混乱し何かしらアクションを起こすだろう。

それに乗じて奴らの作戦をぶっ潰し、竹原を地獄にたたき落とす。

羊一はそう決心して教室に戻る足を早めた。

「……！羊一っ！聞いておるのか？」

「お！？お、おお、スマネエ。聞いてなかった」

秀吉の声に現実に取り戻される。

羊一の言葉に呆れたようにため息をつく秀吉。

「まったく、しっかりしてほしいのじゃ」

「だからスマネエって。で、何？」

羊一が聞くと秀吉は少し顔をしかめ、言う。

「……ちよつと面倒な客が来ておるのじゃ」

「面倒な客？」

「うむ」

秀吉が説明しようとして口を開こうとした時、

『マジできつたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！』

『まったくだ！この店の責任者はいないのか！』

「…なるほど。面倒くさいな」

羊一は聞こえてきた声にため息をつきながら言う。

「さっき入店してからずっとあの調子じゃ。おかげで客も、ほれ」

秀吉が店の中を示す。

さっき入っていた客がいなくなっていた。

羊一が考え事に夢中になっていた間にあの二人の話聞いて出て行ってしまったようだ。

羊一が残った客…未だに大声で店の悪評を言っている二人組を見る。

「…あいつら、たしか」

席で騒いでいたのは数日前に顔合わせで見た三年二人組だった。

たしか、モヒカンが常…何とかで、坊主が夏…某とかいう名前だった。

まあ、その常夏コンビがこの騒ぎの元凶らしい。

「営業妨害か」

「しかし、こんな事をする理由がわからん。所詮は学園祭での店じやぞ?」

秀吉が端正な顔を歪め、言った。

秀吉はわからないよのだが、羊一には心当たりがあった。

「…教頭の指示、か」

秀吉の言う通り、たかが学園祭での店の営業を妨害するメリットなど普通は無い。

しかし、竹原にとっては違う。

おそらく竹原は明久達が大会に出場するのを知ったのだろう。

そして大丈夫だとは思いつつ念のため、あの二人を送り込んできた。

ああして営業妨害をし、二人を自滅させる作戦か

「やっぱり、性格悪いな。アイツ」

羊一がしかめつつらをして言う。

「…なぜだか、無性に『お前が言うな!』と、ツッコミたくなったのじゃ。なんでじゃろ?」

「俺が知るわけないだろ?…さて」

秀吉が首を傾げているのをスルーして羊一はスタッフルームに戻る

うとする。

「むっどろに行くのじゃ、羊一」

「ああ。あのお客様方にお帰りいただくためのちょっとした準備をな……」

羊一はそう言っただけでクククと嘲笑い、スタッフルームに入っていった。

「……何だかいきなりあの二人が憐れに感じてくるから不思議じゃ」

羊一のその様子を見て、秀吉がため息をつく。

『ゴメン。さっきのアレ、後どれくらい残ってる？』

『？ アレって吉井達が必死にタッパーに詰めてたアレか？』

『そうそう。ちょっと使いたんだよね。イロイロと』

どこか弾んだ幼なじみの声がスタッフルームの中から聞こえてくる。

「……………ワシには祈ることしか出来ぬが…自業自得だと思って安らかに眠ってほしいのじゃ」

秀吉は二人に向かって手を合わせた。

『おい、秀吉もちよっと手伝ってくれ』

羊一が呼ぶ声がある。

秀吉はまた一つため息をつき、スタッフルームに入っていった。



## 第二十一問（後書き）

こんな感じですよ。

さて、次回は常夏コンビをどうしてやりますかね。

とりあえず、ああして、こうして……フフフ。

できたら次も読んでやってください。

## 第二十二問（前書き）

どうもです。

かなり間が開いてしまい申し訳ありませんです。

とりあえず、どうぞ

## 第二十二問

「こんなもんでどうだ、夏川」

「ああ、かなり効果があったみたいだな」

Fクラス教室、もといヨーロッパピアノ店内に常夏コンビが居座り始めて10分ほどの時間がたった。

もはや二人以外の人影は無い。

作戦はかなりの効果をあげているようだ。

「しかし…何で店員の一人も来ねえんだよ」

コンビの片割れ、モヒカンの常村が苛立ったように言う。

二人して先程から騒いでいるが、店員の一人も止めに來る事もない。

それどころか、店の中にも一人もいない。

「まあ、馬鹿の集まりのFクラスの事だ。店をほっぽらかして遊び

にでも行っちまっただろ。気にすんな」

坊主頭の夏川が馬鹿にしたように鼻を鳴らし、言う。

「…それもそうだな。なんせFクラスだからな」

「そうさ。馬鹿のすることを一々気にしてたらやっつけられねえよ」

ヨーロッパ店内に二人の笑い声が響く。

と、

「すみません、遅れました」

そんな声と共に店の片隅、スタッフルームの入り口を隠す幕が開かれ、中から人が入って来た。

言葉の内容からして、店員がやって来たようだ。

「遅いんだよっ！何をして…」

早速文句を言おうと振り返る夏川。

しかし、彼にはそれができなかった…

「ほいっと」

「アガッ!？」

文句を言おうと大きく開かれた口に何かがほつり込まれる。

これは…団子ジュジュジュッ

「な、夏川っ!??どうしたっ!？」

いきなり白目をむいてビクンビクンと痙攣し始めた夏川に驚いて声をかける常村。

と、

「ほれ、」

「おじっ!?!?」

声をかけるために大きく開けていた口に「何か」がほつり込まれる。

『ま、マズイ!?!?コレを飲み込めば夏川の二の舞!吐き出さなければっ!?!?』

とっさに口の中のモノを吐き出そうとする。

しかし

「往生際が悪いよ?」

そんな声と共にさらに口の中に大量の水を流し込まれる。

「あははははははっ!?!?」

必死に抵抗するも…

…ゴクン

そんな音が、聞こえた、気がした…

………

「……………う、う、ここは…」

常村が目を覚まし、声をあげる。

「おお！常村、常村か！？」

と、比較的近くから夏川の声も聞こえた。

「ああ、夏川、ここは…？」

「わからん…回りは真っ暗で何も見えない」

その言葉に目を開ける常村。

夏川が言った通り、回りは真っ暗。ここが何処かもわからない。

しかも、何かに縛り付けられているようで直立した体勢から全く動けない。

しっかりと縛られているらしく頭さえ固定され動かせない。

「ぐ…駄目だ、動けない」

「俺もだ…畜生！何だっつてんだ!？」

暗闇の向こうから悔しそうな声が聞こえてくる。

と、

『あゝ、マイク、テス、テス…』



暗闇に声が聞こえてくる。

相手は機械で声を変えているのか、機械音声のような声だ。

『OK?...ゴホン...ハロハロ...?お目覚めかい、お客様方?』

その機械音声が言葉を吐き出す。

暗闇に少し慣れたのかスピーカーカーのようなものがつつすら見える。

あの声はそこから聞こえるようだ。

「てめえ誰だ！俺達をどうするつもりだ！」

夏川が叫ぶ。

しかし、スピーカーカーの向こうからは心底馬鹿にしたような笑い声をするだけだ。

『フヒヒ。お怒りのようだね。せつかくの特別サービスだと言う

のに。残念だなあ〜』

「何がサービスだ！出て来やがれ、ぶっ殺してやる！」

『おお、怖い、怖い　まあ、落ち着いて』

「落ち着けるか！早く俺達を解放しやがれ！」

『んん〜、それは無理というものだね〜？』

「何だと！？俺達をどうする気だ！？」

常村も叫ぶ。

声は素直にその質問に答えた。

『どっつするって、もちろん処刑だよ？』

あっさりそう言う声。

「処刑!？」

「処刑って…:どういう意味だ!？」

『処刑は処刑だよ?シヨ、ケ、イ』

「ふざけんな!何で俺達が!？」

『お客様方はちよ〜っとやり過ぎちゃったって事ダネ?仕方ないネ?ネ?』

「『ネ』って、可愛くねえよ!機械音声がかわいこぶるんじゃねえ!」

『お客様こそ、そのモヒカンは何だい?何それ?ニワトリの頭を彷彿とさせる仕上がりダネ?ほら、鳴いてみ?コケーって』

「殺す!殺してやるう!」

自分のアイデンティティーとも言えるモヒカンを盛大にこき下ろされ、涙目で暴れる常村。

しかし、ロープは全く緩まない。

『ああ、コケコケうるさいネ。そっちの坊主頭のお客様の頭でもついでに突きたら？道端の石ころみたいで突きやすいかも』

「誰の頭が道端の石ころだっ！」

『そうだね。石ころさんに失礼だったネ？お客様みたいなのと一緒にされるなんて地球上で最抵の屈辱だもんネ』

「ウガアアっ！」

『まあ、そんな雑音はともかく』

夏川の怒りの叫びをスルーする声。

『さあ、お客様方。お待ちかねの処刑のお時間だよ』

「上等だ、この野郎！」

「やれるもんならやってみやがれ！」

『アラ、お客様方も意外と乗り気？なら、問題ないね』

怒りに我を忘れて叫び返した二人に声が楽しそうに声をあげる…

『じゃ…ライトアップ！』

バンつと音をたて、一気に部屋中が光に包まれる。

そして…

メイド姿の化け物がいた。

『ギヤアアアアアアアッ!?!』

常村、人生一番の大絶叫だった。

しかし、同時に目の前の化け物も一緒になって叫んでいる。

「ウガア!?!目の前にミニスカナーズ服姿の化け物がああっ!?!」

と、メイド…いや、冥土は夏川の声で叫んでいる。

どうやらアレは夏川らしい。

そしてどうやら常村自身も化け物と化しているようだ。

どつりで先程から妙にスースーすると…

等と考えている余裕は二人には無い。

頭に浮かぶのは絶対の恐怖と圧倒的な吐き気のみ。

『おぼろろろ…』

あ、吐いた。

と、

『どうだい？中々の傑作ダろ？そこまでのクオリティーにするのに苦勞したよ…ウエ…』

気持ち悪そうな声が聞こえる。

『…ヤバイヤバイ。見すぎは禁物だな…さて、どうだい？お客様方』

『おぼろろろろ』

『…かなりの効果のようダネ？』

もはや声に反応することもできない二人。

頭を固定されているため、顔を背けることもできない。

「ウアアア！た、助けてくれえ、死ぬう！？」

「脳が汚染される！見たく無いのにい！？ハッ！」

と、夏川（冥土）が何かに気づいて声をあげる。

「そつだ！目を閉じればいいんだ！そつすりゃこの地獄から逃れられる！」

「そ、そつか！その手があつたか！」

と、常村（醜須加那唾酢）が同意する。

二人は急いで目を閉じる。



予想通りまぶたで隠され、お互いの姿は見えない。

勝った…！生き残った！

二人が同時にそう思い、ニヤリと笑う。

『む…そうきますか…仕方ない…これだけはやりたくなかったが』

と、スピーカーから声がする。

『じゃ…処刑、第二段階に移行』

やりたくないと言いながらも心底楽しそうに声が出る。

と、

ガクンッ…

「な、何だ!？」

夏川が焦ったような声を出す。

常村は目を閉じたまま聞く。

「どつした、夏川！」

「お、俺を縛り付けてる棒みたいなのが土台ごと動いてる！ロープで前に引っ張られてるみてえだ！」

常村はその言葉にまだダメージが残る脳を必死に動かし、考える。

多分、土台に車輪でもくっつけて引っ張りやすくしているんだろう。

で、前に引っ張る…

ん？

前に…？

さっき二人は向かい合って縛られていた。

さらに…今、二人ともお互いの顔を見つめるように頭を固定されている。

そのまま…前に…つまり、常村の方に…

どンドン夏川の顔が近づいて来てる…

『ギヤアアアアアアアアツ!!』

先程よりも大きな声が出た。

夏川の方も自分達が今どんなに危険な目にあっているか自覚したらしい。

ジタバタと暴れる二人。

しかし、縄は身じろぎすらも許してくれない。

『アハハ 気づいたみたいダネエ?でも、もう遅い!。そのまま残酷な悪魔のベーゼにでも洒落込んじゃってよ』

スピーカーからそんな言葉が吐き出される。

「や、止めてくれっ！助けてくれえ！？」

「俺達が悪かった！だから、これだけはあ！？」

『ん〜？』

二人の必死な懇願に声は少し考えるような間を置き、

『ヤダ。気がのらない』

あっさりと処刑宣言を下す。

おひら、

『あ、言い忘れてた。この映像はしっかりと記録してるから しか

も高画質。あ、何ならその瞬間はどアップにするかい？」  
さらに追い撃ちがなされた。

「ふ、ふざけるなあ！てめえ、絶対に殺してやる！」

『おお、まだ抵抗するとは…案外お客様方もタフダネエ？』

「そつだ、てめえ何ものなんだ!？」

『私？私はFクラスの吉井あき…おつと危ない』

「吉井！てめえ、後で覚えてるよお!？」

『あ、そんな事言ってる間に』

『ウアアアアアアっ!?!』

二人の絶叫が響き、そして…

『……………どうか、安らかにの……………』

最後にスピーカーから、ぽつりと、声が聞こえた…

## 第二十二問（後書き）

という感じですよ。

常夏よ…どうぞ成仏なさってください…

では、次もよかったら読んでやってください。

第二十三問（前書き）

とらまはす。

とらまはす、とらまはす。



## 第二十三問

「へえ、僕らがいない間にそんな事が…」

明久が感心した様に言う。

ここはヨーロッパ店内。

召喚大会から帰って来た明久、雄二が秀吉から常夏コンビの処け、ゲフンゲフン…話し合いの顛末を語って聞かせていた。

「しかし…相変わらずエグい真似を…」

「まったくじゃ…あの二人、立ち直れば良いが」

飽きた様に言う雄二に同意してため息をつく秀吉。

その二人の様子に羊一は心外だとも言いたげに顔をしかめる。

「何言つてんだ。今回は完全にあっちから仕掛けてきたんだ。俺は降り懸かった火の粉を払っただけだぜ？」

「そうだとっても、限度というものがあるじゃろ」

「はっ、そんな言葉、俺の辞書には無いな」

「確かに。羊一の辞書って載ってる言葉少なそうだよな」

「……………死のう」

「よ、羊一！そのタッパーは駄目なのじゃ！」

「明久、いくら何でも言いすぎだぞ。お前にボキャブラリー不足を指摘される奴の気持ちを考える」

「雄二は僕の気持ちをもうちよっと考えてよ!??」

「ま、まあ、それは良いとしてもじゃ」

秀吉がタッパーの中身に手をつけようとする羊一を羽交い締めにし  
ながら店内を見回す。

「すっかりお客は消えてしまったのう」

秀吉の言葉に他の二人も口喧嘩を止めて言う。

「確かにな。その常夏コンビの思惑通りって訳だ」

「そうだね。とりあえずテーブルの方は何とかしたけど」

明久が近くのクロスをあげる。

そこには汚い箱ではなく、ちゃんとしたテーブルがのぞいていた。

羊一がコンビのしょ…話し合いの最中に明久達でテーブルを強奪、もといお借りして来たのだ。

しかし、風評とは厄介なもの。

先程流れてしまった噂は瞬く間に広まってしまったらしく、ヨーロッパは今、閑古鳥が鳴いている状態であった。

「…やはり、何かやらねえとマズインじゃねえか？」

よじやくシヨックから立ち直った羊一が言う。

羊一の言葉に他の三人が考え込む。

と

「…一つ、考えがある」

「うわっ！ムツツリーニ、いつの間だー！」

明久の背後に音も無く現れるムツツリーニ。

そのムツツリーニに雄二が聞く。

「その考えてのは？」

「…ん」

ムツツリーニはどこからともなく数着のチャイナドレスを取り出した。

それを見た明久が目をキラキラさせて立ち上がる。

「なるほど！そのドレスを姫路さんや美波、秀吉に着てもらってお客様を引きつけようという事だね！？」

「…これならば確實」

「お主ら…なぜワシがそれを着る候補に入っておるのじゃ」

「しかし、三人だけじゃカバーしきれないと思うぜ？なにせ学校全体に広まっちまったんだし」

「羊一！？お主までナチュラルにワシを候補に入れるのか！？」

「確かにな…羊一の言う通り、もうちょっとインパクトがあるだろうな」

「雄二もスルーして話を進めようとするでない！」

『うーん…インパクト…ねえ』

「…時々、お主らが信用なくなるのじゃが…」

一人、秀吉がアウエーの空気に諦めのため息をついていると…

「ただいま戻りました」

「ただいま」

ドアを開ける音と共に、瑞希のおっとりした声と美波のハキハキとした声が聞こえて来た。

「あ、二人共、おかえり」

「あ、アキ。どうなってんのよ？お客さん、全然いないじゃない」

美波が明久に詰め寄る。

「まあ、落ち着け、島田。これにはイロイロ事情があるんだが…後でちゃんと説明するからとりあえず、姫路とコイツを着てウエイトレスをやってくれないか？」

羊一がチャイナドレスを掲げ、言う。

それを見て、露骨に嫌な顔をする美波。

「はあ？嫌よ、恥ずかしい」

「わ、私も…それは、ちょっと…」

瑞希も顔を赤くして言う。

いくら学園祭とは言え二人共、恥ずかしいらしい。

「そうか…明久が二人にどうしても自分と一緒に着てもらいたい、  
と言っただけだ…」

『！？』

「ちょ！僕、そんな事、」

「ちなみに秀吉は着るらしいよ」

『!?!?』

「羊一!?!?お、お主、ワシを利用する気が!?!?」

「…どうする二人共?」

焦る二人を無視して二人に聞く羊一。

答えはもちろん…

「やるわ!」「やります!」

「二人ならそう言ってくれらと思っていたよ」

満足そうに笑顔を浮かべ、頷く羊一。

「だ、だから僕は」

「吉井君!一緒に頑張ってお店を繁盛させましょう!」



「ちよ!?!」

「グダグダ言ってるんで、決まったならさっさと準備するわよ!ほら、木下も!」

「いや!ワシは!?!」

二人にそれぞれ腕を掴まれ、スタッフルームに引きずられていく明久達。

「はっはっは…頑張ってるな」

『鬼いっつ!?!』

スタッフルームに消えていく二人見てを笑いながら手を振る羊一。

そんな羊一を見て、雄二が言う。

「何言ってるんだ。お前も着るんだぞ?」

「…は?」

「手が足りないと言ったのはお前だろうが。その責任は果してもらわないとな」

「いや、さすがの俺もチャイナはちょっ、てめえ、ムツツリーニ！  
離せ、離してください、お願いします！」

「はっはっは…頑張ってな」

雄二はムツツリーニに連れていかれる羊一を笑いながら見送った。

.....

「中華喫茶ヨーロッパです！」

「占い、思い出用の写真撮影もやってまーす」

と、廊下に明久と羊一の声が響く。

二人は『中華喫茶ヨーロッパ』と書かれた看板を手に、どこかや

けくそ気味の大きな声で宣伝をしている。

『ちよっと、アレ見て…？』

『アレ？…女の子…じゃない!？』

『あれは…Fクラスの吉井と黒峰か…？』

『じ、これは…』

『女装であのクオリティーかよ…』

二人の回りには驚愕と好奇の声が溢れ、妙な熱気に包まれていた。

二人は同時にため息をつき、

『どづして、こうなった…』

同時に呟いた。

「って、こんな事になってるのは全部羊一のせいだろ!？」

明久がガバツと頭を上げて叫ぶ。

そんな明久はメイド服を着ている。

さすがにチャイナだけは勘弁してくださいと泣きながら土下座を敢行し、この格好に落ち着いたのだ。

「全部じゃない!三分の一くらいだろ!」

そう叫び返す羊一はほぼ無理矢理、着せられるも、せめてもの情けをと泣きついて下がスカートになっているタイプのヤツだ。ついでのように長い髪のカツラを被っている。

二人は、顔をつき合わせ、口喧嘩をしている。

『これは…なかなか…』

『女装美少年…はあはあ』

ゾクウ…

と何か妙な熱視線が二人に向けられ、背筋に悪寒が走る。

「さ、さっきから何か妙な気配が…」

「あゝ、まあ、女装少年が普通に表紙を飾る時代だからな…世も末だ…」

羊一がため息をつきながら首を横に振る。

「…なんでか…さらに悪寒が…」

明久はブルツと震えた。

と、二人がそんな会話をしていると…

「…なあにをしているのかしら、アンタはあ…?」

ゾククウ!!

背後から、とてつもない殺気が立ち上り、羊一は一気に凍りついた。

恐怖で固まる首を無理矢理後ろに向ける。

「じぎげよう、羊一」

「…じぎげよう、優子さん」

極寒の気配を纏った優子が、笑顔で背後に立っていた。

「何か面白い事をやってるわね」

「ははは…優子さん、とりあえずその首に持ってきた手を離しませんか？」

「アンタ達が喫茶店をやってるって聞いたからシフトの合間にわざわざやって来てあげたの」

「あの、話が全然噛み合っていないんですが…」

「そしたらこんなところで馬鹿が女装をしていたと」

「明久！助けてくれ！優子は俺を抹殺する気だ！」

羊一が明久に必死に助けを求める。

しかし…

「アハハ 吉井君、かわいいね〜、ほらほら、こっち向いて〜」

「く、工藤さん！？そのデジカメをどうするの！？や、止めて、こんな僕を撮らないで！？」

今の明久に羊一を助けるだけの余裕はない。

そんな事を言っている間もギリギリと優子の指が万力の如く、羊一の首を締め上げる。

「…あ、これは死んだ…」

羊一はどこか悟ったような爽やかな顔をして、自らの死を覚悟した。

しかし、神は彼を見捨てなかったようだ。

「…優子。黒峰をいじめるのは良くない」

ボソッとそんな言葉を言って、女神が降臨めされた。

「代表…でも…」

未だ、羊一の首に手をかけたまま、優子が女神こと翔子を振り返る。

「…駄目」

しづる優子にもう一度言い聞かせるように言う翔子。

「…まあ、代表がそう言うなら…命びろいしたわね」

優子はようやくやく首から手を離す。

「…優子も」



「はあ〜い」

デジカメで明久の黒歴史を記録していた愛子も翔子に言われ、デジカメを戻す。

「た、助かった。恩にきるぜ…」

「うっうっ…僕の黒歴史がまた増えていくよ…」

「…気にしないで…」

珍しく素直にお礼を言う羊一に翔子は首を横に振る。

「いやいや、霧島は命の恩人だ。後でなんかお礼をさせてもらおうよ」

「…そう」

羊一が翔子に言う。と、

「ふーん、ほおー、へえー」

「？ 何だ、優子。変な声出して」

「…別にいい」

優子がジト目で羊一を睨む。

その様子に優子が面白いものを見たように笑い、言う。

「ふふーん、優子、黒峰君が気になるなら、素直にそう言えばいいのに」

「な、何を訳のわからないことを言ってるのよ！アタシは別に」

「フフフ 素直じゃないな」

「…二人共、何の話をしてんだ？」

羊一が気になって聞くも、二人にはぐらかされる。

結局、羊一は首を傾げながらも話を進めることにした。

「で、お三人方はお客様ってことでいいんか？」

「…そう」

「そうかい…じゃあ明久。三人を店まで連れてってやってくれや」

「わかった。じゃあ、こちらにどうぞ」

明久の先導にAクラスの三人がついていく。

と、羊一が思いついたように言う。

「あ、そだ。じゃあ店にいる間、雄二の野郎を好きにしていよいよ」

「…本当？」

翔子が驚いたように振り返る。

あまりに急に振り返ったために腕がすぐ真後ろにいた羊一に当たってしまった。

ブン

ベチッ

翔子の手が羊一の脇腹あたりに当たった。

ちょっと勢いはついていたが、そこまで強い衝撃はなかった。

しかし…

「…アレ？」

「ああ！羊一！？」

「ちょっと、黒峰君、前もこんな感じのことなかったっけえ！？」

愛子と明久が音も無くぶっ倒れた羊一に駆け寄り、容態を確認する。

「…はあ、何やってんだか…」

優子が一人、その光景を見て、ため息をついた。

## 第二十三問（後書き）

こんな感じですよ。

うーん。天罰を与えるつもりが甘くなってしまった。反省…

次から話を進ませたいですねえ…。

次もよかったら読んでやってください。

## 第二十四問（前書き）

前のが自分的に納得できなかつたので、書き直しました。

少しはマシになったのか？

とりあえずどうぞ

## 第二十四問

羊一が目を覚ましたのは例によってスタッフルームだった。

「お前というヤツは…つくづく学ばない男のようだな」

夏月先生がアイロンのような機械をしまいながらため息まじりに言う。

「普通の人間なら、一度死にかけたならばそれ以降、自重するものだ」

「今回は別に俺のせいって訳じゃないっすよ…」

「ふん、とにかくこれ以上、私の手を煩わせるな。次は本当に見捨てるぞ」

「怖いこと言わないでくださいよ。結局最後には助けてくれるくせに」

「…今なら処置が間に合わなかったと言えば、殺れるかもしれんな」



「先生、店で奢りますのでお許しを…」

床にべったりと上半身をつけ、精一杯の謝罪の意を表明する羊一。

「プライド？何それ美味しいの？」

その羊一を冷たい目で見下した夏月先生は「ふん」と鼻を鳴らす。

「ならば、早くしろ。私はお前のくだらない治療で疲れているんだ」

「…それがいち保健医の言葉かよ…」

「何か言ったか」

「お客様一名、ご来店ー！！」

羊一はガバツと立ち上り（ちなみにさっきの格好のまま）、スタツフルームの幕を押し広げた。

「ガヤガヤガヤ…」

「おお…」

羊一が思わずと言ったふうに感嘆のため息をもらした。

幕の向こうの店内は先程の閑散とした様子が嘘のような組み合わせだった。

テーブルは満席。店の外にも列が出来ている。

さっきまでスタッフルームでうだうだしていたクラスの連中も今は各テーブルの間を行き来したり、客を誘導したり、会計したり、と忙しいそうに働いている。

「…羊一」

「おう、ムツツリーニ。結構な盛況ぶりだな」

料理担当のムツツリーニが羊一に話しかけて来た。

「…作戦成功」

ボソツと呟き、ぐつと親指を上げるムッツリーニ。

「まったくだな。姫路達には感謝しなきゃな」

羊一が顎に手をやりながら満足そうに笑う。

しかし、

「……………（フルフル）」

ムッツリーニが首を横に振る。

「どっぴいっことだ、ムッツリーニ？」

「…それだけじゃない」

「はあ？」

「…ん」

ムッツリーニが店内の二画を指さす。

羊一がその指の先を見ると…

「あ！アンタ、起きたんならさっさと手伝いなさいよ！」

「優子!？」

チャイナドレス姿の優子が飲茶を片手にテーブルの間を歩き来していた。

優子もこちらに気がついたようで飲茶を届けたあと、こちらにやって来た。

「まったく、いつまで寝てんのよ！こっちは大忙しなんだからね！」

「あ、いや、ゴメン…って、何でお前がここに」

「私だけじゃないわよ」

優子がそう言って、首で示す。

「…お待たせしました。ご注文の飲茶と烏龍茶です」

と、そつなく、キビキビとした動きで接客をしているのは翔子だった。

翔子もまたチャイナドレスに身を包み、働いている。

その姿に回りの何人もの男ども（若干、女子の姿も）が感激の涙を流していた。

「はい、二名様、ご案内」

入り口の方では愛子が客を誘導していた。

やはりチャイナドレス姿である。

偶然なのか、それともわざとなのか。

愛子が動き回るたびに、チラチラと見えそうで見えない、そんなチラリズムに多くの男子が鼻をのばしている。

「アンタがノビちゃつのを代表が責任を感じたみたいだね。それで皆で手伝うことになったのよ」

「あ、そういって」と

「わかったらさっさと手伝いなさいよ。手はいくらあっても足りないのよ」

「あ、ああ。わかった」

羊一に向かってまくし立てた優子はまた仕事に戻っていった。

いきなりの手伝いだっただけだが、手を抜かず、一つ一つの仕事をきっちりこなしている。

その後ろ姿を突っ立ったまま、羊一は眺めている。

「……………」

「おい。愛しの彼女に見取れるのは結構だが…私の接客を忘れてくれるなよ…」

「ぶふうっ!? な、何を言ってんすか、先生!」

後ろにいた夏月先生が呆れたように言ってくる。

予想外の優子の登場ですっかり先生のことを忘れていた。

とりあえずムツツリーニと別れ、夏月先生をちょうど開いた席に案内した。

「…ふむ…あの汚い箱ではないか…存外、しっかりしているな」

先生が椅子に座っていきなりクロスをめくり、中のテーブルをチェックする。

さすがに保健医。

食事をする場所での衛生管理がなされているかをチェックしたんだろっつ。

どうやら合格らしく先生はクロスを元に戻し椅子に座り直した。

テーブルに替えたかいたというものだ。

「どうぞ、コレがメニューっす」

羊一がどこからともなく取り出したメニューを手渡す。

「ふむ…」

メニューを受け取り、確認する。

『男子生徒限定販売！ムツツリ商会特製「秘密の覗き部屋」。我が校の天使達の艶姿を刮目して見よ！』

「間違えました」

バシユッ！

すごい勢いでメニューを取り返す羊一。

「おい、今のは何だ」



「何でもございません」

「ムツツリ商会：教員の間でも有名なアレか？」

「、知りません」

「何だと聞いている」

「：答えられません」

「そづか、ならば仕方がない」

「先生！注射器は投擲するものではありません！だから構えないで  
！」

「：もう一度、聞く。アレは何だ？」

「へい。ムツツリーニ垂涎の写真を集めた学園祭限定写真集っす」

あっさりとは薄情する羊一。

仕方ないね。注射器痛そうだし…

「…お前らは…」

「見逃してくださいえ〜！かなりの収入源なんです〜。堪忍やあ〜」

「ええい！泣きつくな、鬱陶しい！」

先生は引っ付いてくる羊一を引きはがし、ため息まじりに言う。

「とにかく…このことは報告させてもらうからな」

「ええっ!？」

「私も一応『先生』だからな。諦めろ」

「ちえー、話が通じない先生だぜ。そんな淡泊な態度ばっかりだから鉄人との仲が一向に進展しないんすよ」

羊一が不満げにそう言った。

と、

「…黒峰…いい度胸だ…」

何か触れてはいけない話だったらしく、先生から強烈な殺気が発せられる。

先生は「ふふふ」と危ない笑いをもらしながら白衣のポケットに手を突っ込む。

また注射器を取り出す気だ。

それをいち早く察知した羊一がすることはただ一つ！

「……では、じゅっくり！」

全力で、逃亡すること。

羊一は素早い動きでテーブルの間を駆け抜け、廊下に出る。

ヒュンッ！

ビシッ！

後ろから飛来した注射器が廊下のコンクリートのはずの壁に容易く突き刺さる。

「やべえ！あの人、殺き満々じゃない!?!」

羊一は恐怖のあまりへたりこみそうになる足を叱咤して走り出す。

ヒュン、ヒュン、ヒュンッ！

「アアアアッ!?!」

顔のすぐ横を何本も注射器が通り過ぎる。正直、めっちゃ怖い。

しかも、

『ウゲアッ!?!』

『ああ!田辺君!?!頭に注射器があ!?!』

『アブブブ…!』

『白石!?!おい、どうした!?!急に痙攣をして!』

『きゃー!香取先生が顔を橙色にして倒れたあ!?!』

流れ弾ならぬ、流れ注射器に次々と通行人が巻き添えを喰らっていった。

楽しいはずの学園祭中の廊下はあっという間に恐怖と混乱渦巻く魔境となってしまうた。

まさに大惨事である。

「ヒイイ!?!」

羊一はスカートを翻し、必死に廊下を疾走する。

止まったら間違いなく、通行人の二の舞だ。確実に殺られる。

『チイツ！人が邪魔くさい！』

後ろの方で夏月先生の怒声が聞こえてくる。

どうやらパニックに陥った人が多く、羊一に追いつけずにいるようだ。

しかし、羊一の方も実はそんなに余裕はない。

ただでさえ虚弱なのに、さっきまで気絶していたこと、せまりくる死の恐怖の中での全力疾走したことが災いした。

「ハア、ハア、ハア、や、やべえ…息、きれて、きた」

息がきれて、苦しさが羊一を襲う。

明らかに逃げるスピードはがた落ちである。

これでは何時かは追いつかれてしまう。

羊一が死を覚悟し始めた時、

『な？この通り、頼むから一緒に大会に出てくれ、友香』

『嫌よ。もう私の前に現れないでって言ったはずよ』

「…この、声は…」

前から何やら聞き覚えのある声が近づいてくる。

羊一は走りながら、顔を上げ前に目を凝らす。

「だから、アレは誤解なんだって！」

「何？今更ごまかそうっての？最悪……」

そこには予想通りの二人組がいた。

Bクラス代表、根本恭二とCクラス代表の小山友香の代表カップル

…いや、元・代表カップルの二人だ。

話から察するに、どうやら根本が大会と一緒に出場するのを口実に小山との仲を修復しようとしているらしい。

お得意の卑怯な戦略で小山をパートナーとして大会二回戦目に揶揄むつもりなのだろう。

「まあ、そんなことは、どうでもいい…」

コレハ、ツカエルカモ…

羊一の頭の中に生き残りのための計画が立ち上がる。

「……………ニヤリ」

羊一は口の端を上げて笑い、二人に走り寄っていった。

……………



「だあかあらあ、誤解だつて！アレは黒峰の野郎の変装」

「それも聞いた…何回もね」

「なら…」

「そんな話、信じられるわけないでしょ？アレが女装とか、有り得ない、常識的に言つて…てか、アレで女装だなんて考えたくないわ…」

小山の素っ気ない声が根本の話をバツサリと切り捨てる。

あれ以来、二人の関係はずっとこんな感じだ。

根本の方は諦めがつかないようで今も説得しようとしているが、小山の方は根本に完全に愛想を尽かしたようで、言い寄ってくる彼をゴミでも見るような目で見ていた。

その視線でこの日、何度目かに心がへし折れそうになりながらも、説得を続けようと根本が口を開けようとした、その時…

「根本くーん」

甘味を鍋で煮詰めたかのような不自然なほどに甘ったるい声。

その声を聞いた瞬間、根本の顔は白くなり、小山の顔にはいくつもの青筋が。

そしてあの日、あの時のように…

「やっと見つけたあゝ」

悪魔が、根本の腕に絡み付いた。

「て、てめえ、黒峰！なんでてめえが…」

根本は必死の形相で、腕を振りほどこうとする。

「えゝ？黒峰って誰え？私、わかんない」

しかし、悪魔はガツチリと根本の腕を掴んで放さない。

まるで万力のようだ。

『ふ、ふふふ…こっちも命懸けでなあ…悪いが、付き合ってもらおうぜえ…!?!?』

悪魔が根本にだけ聞こえるように話してくる。

焦る根本。

しかし、彼はその瞬間、ひらめいた。

これは、むしろチャンスでは…? ?

小山の誤解を解くにはこの少女が羊一の女装だと実際に見せれば良い。

至近距離で、実際に女装をとかせれば、いくら羊一とてごまかすことはできない。

『そう、これはチャンス！神様は俺を見捨てなかつたんだ！』

そう考えた根本はすぐにそのひらめきに従い、行動した。

「ハツハア！黒峰え！てめえの正体、今こそ、白日の下に晒してやらあー！」

根本はそう叫び、腕に引っ付いている羊一の身体を壁に押し付け、押さえる。

そして、残った方の手で羊一の女装をとかせようと、服を掴む。

……………アレ？

そこまで行動してから、根本は少し冷静になった。

それは、背後から放たれる猛烈な殺気のせいもあった。

「……………何やってんのよ？」

小山が、絶対零度の声と視線を根本に向けてくる。

「何って、コイツの正体を…」

そこまで言って、根本は気がついた。

目の前の羊一が小山に見えないように密かに笑っていることに…

『クツク…まんまと罠にかかってくれたなあ？』

羊一はそう呟くと、声を少女の物に戻して言う。

「こんな所でだなんて…根本君たら、大胆…」

ナニライツテイルンダ、コイツハ…

少女（羊一）は、顔を赤くして俯く。

着ているチャイナ服は先程の格闘で乱れ、スカートも少しまくれあがっている。

しかも、強く掴んだのが悪かったのか、チャイナ服のボタンがとれて、鎖骨の辺りまで見えている。

その羊一を、根本は壁に押し付けている。

そこに、先程のセリフ。

さて、問題です。

この光景を、後ろの小山はどう受け取ったでしょう？

「……………いや、コレハ……………」

ようやく状況に気がつき、ダラダラと冷や汗をながし、振り返る根本。

「……………本当に、最低最悪の男……………」

小山がもはや人類を見ているとは思えない視線を根本に向ける。

完全に、誤解している。

「ちよ、ま!?!」

根本が、口を開こうとする。しかし!

「あつ、足が滑った」

ガツ!

「うえ!?!」

羊一が、根本の足を払い、バランスを崩し、

「ああ、手も滑った」

ブン!

「うわぁ！」

掴んでいた腕を引っ張り、そのまま放り投げる。

ムニツ…

思わず目を閉じた根本は、抱き着くようにしてそのまま何かに突っ込んだ。

突っ込んだものはやけに柔らかい感触がした。

嫌な予感に、恐る恐る目を開けると…

「……いい度胸だ。本当に、いい度胸だ…」

両手に注射器を構えている夏月先生が目の前にいた。

ていつか、抱き着いていた。

「今、私は機嫌が、非常に悪い」



「あ、あ、」

「…覚悟はいいな、貴様…」

注射器の先端が、光を反射して怪しく輝く。

さらさら、

「先生、手伝います」

後ろから、小山が非常に怖い笑顔で言ってくる。

どうやら、両人とも根本を逃がす気はさらさらないらしい。

「あ、ああ…」

這って逃げようとしたが、背中にはコンクリート壁の冷たい感触。

「あ、あ、あ、」

助けを求めるように回りを見回した根本の目に、羊一が映った。

「……………」

必死に羊一に視線で助けを求める根本。

それを見た羊一は、

「……………(スッ)」

無言で、左手を胸の高さまで上げ、親指を立て、

「……………(ニコッ)」

笑顔でその親指を下に向けた。

「アアアアアアアアアアアア!？」

その瞬間、廊下に根本の絶叫が響いた…

………

それからちよつと後…

『……………』

召喚大会二回戦目の会場で、明久と雄二が待ちぼうけをくらっていた。

対戦者のチームが一向に現れないのだった。

「…来ないね」

「…来ないな」

二人が呟く。

審判役の先生も確認に走っているため、二人きりでポーツと突っ立っているしかない。

「……………来ない、ね」

「……………来ない、な」

楽しげな声が会場の外から聞こえてくる。

それを聞いていると、次の対戦者用に作戦を立て、ある写真集をわざわざ用意した自分達が無性に虚しくなってくる二人。

「……………来ない、ね」

「……………来ない、な」

二人はこの後、審判役の先生に不戦勝を伝えられるまでしばらくの間、そうしていた。

## 第二十四問（後書き）

こんな感じですよ。

ゴメン、根本君…君のことは嫌いじゃないよ。本当に…

できたら次も読んでやってください。

## 第二十五問（前書き）

遅くなりました。申し訳ないです。

ちょっとテストやらなんやらと立て込んでました。

…などと、どうでもいい言い訳でした。

では本編どうぞ

## 第二十五問

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなあ……」

明久が大会から帰ると、あれだけいたお客はほとんどいなくなっていた。

「お、戻ってきたようじゃの」

「おつかれ」

あまり仕事が無いようでウェイトレス役の秀吉と羊一が暇そうに椅子に座っている。

566

「……ていうか、羊一。いつまでその格好チャイナドレスしているつもり？ ついに目覚めちゃった？」

「……姫路や島田が着替えさせてくれねえんだよ」

羊一はそう言って顔をしかめる。

羊一としてもずっとこの格好なのはさすがに思うところがあるらし

いが、言い出しっぺとしては嫌とも言えないらしい。

ちなみに明久は大会前に着替えていた。（瑞希達はかなり残念がっていたが…）

「で？大会の方はどうなった？」

羊一は椅子の背もたれを前にして座りながら明久に目を向けて聞く。

「ん〜まあ、無事勝ってきたよ」

「なぜちょっと言いよんだのか気になるが…何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんか？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ…それより秀吉、これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」

「…むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客は妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。



「ってーと、教室の外で何か起きてるってことか…」

「かもしれんのか」

「でも何が？」

そうやって三人で考え込んでいると、

「羊一、私達そろそろ自分のクラスに…って、何コレ？」

「アレ？お客さんが全然いなくなっちゃってるね」

「…何か、トラブル？」

「あれ？どうして霧島さん達がここに？」

スタッフルームから制服に着替えた翔子、優子、愛子の三人が出て来て聞いてくる。

明久は意外な人物の登場に驚いている。

「ああ、明久は大会に行ってから知らないのか」

「？ 何を？」

「まあ、イロイロあってな。三人にはちょっと店を手伝ってもらってたんだ」

「へえー、そうだったんだ。僕らはあの後すぐに大会に行っちゃったから、知らなかったよ」

明久が納得したように頷く。

「うむ。三人がチャイナドレスを着てくれたので店が、大盛況になったしの」

「死ね、羊ーイイイイイっ!!」

「うおおっ!!?」

ガッ!!

明久が近くのテーブルに置かれていたフォークを投擲した。

羊一は座っていた椅子から飛びのく。

今の今まで羊一の身体があつた場所に先の鋭いフォークが突き立った。

「何しやがる、てめえ!？」

「黙れ男の敵! 貴様、霧島さん達のチャイナドレス姿を一人堪能した罪、万死に値する! 覚悟しろ!」

明久はそう言つてまたフォークを手にする。

と…

『まてー……い……い……!』

そんな声と共に須川が数人のFFF団を引き連れ、現れた。

「おおっ！須川君、皆。来てくれたんだね！さあ、一緒にあの罪深い異端者を断罪しよう！」

明久は羊一にフォークを構えたまま、叫ぶ。

しかし、

「いや…断罪されるべきは…お前だ、吉井っ！」

須川の声を合図にFFF団のメンバーがそれぞれ武器を取り出し、明久に向けた。

「なっ！？なんで僕に武器を向けるのさ、須川君！？」

「吉井。貴様こそ誰に向けて武器を構えている」

「誰って…男の敵のクソ野郎だけど？」

「馬鹿者っ！口を慎め！！」

須川はそう言うと羊一の前にかしづく。

「大丈夫でございますか、救世主」

「ウム…ようやった。褒めてつかわす」

「ハッ！ありがたき幸せにございます！」

偉そうに新しい椅子に座り直しながら言う羊一に須川は直球服従ス  
タイルであった。

今の彼なら靴ぐらいなら舐めるんじゃないかならうか？

そう思えるくらいの姿だった。

「須川君！どうしたのさ！？なんで羊一<クソ野郎>に忠誠を誓っ  
てるの！？」

「ふ…愚問！！理由など、決まっている！」

須川はガバツと立ち上がり、大声で宣言する。

「この方は我等に奇跡を見せて下さったのだ！…具体的には、Aク

ラスから三人ほどチャイナの天使を召喚なされたのだ!」

須川が涙を流し、熱弁をふるう。

それにまわりのメンバーも同調する。

『ああ…あの光景を楽園と言っのだから…』

『まさに楽園!まさに奇跡!』

『故に「救世主」!』

『くつろみね!くつろみね!』

メンバーが声を合わせ、黒峰コールを始めた。

見苦しいこと甚だしい。

現に…

「…アンタらっていつもこんななの」

「…正直、フォローできぬ…」

「…背中が煤けてる」

「アハハ。やっぱりFクラスの人達は面白いなあ」

ドン引きといった感じだ。(一人、面白がってるが)

と、羊一がサツと右手を上げるとピタッとコールが止む。

物凄い統率力である。

欲望に曇りまくった彼らを、しかし羊一はたくみに動かしている。

「さあて…では、皆の者…命令だ」

『ハッ!』

Fクラスの男共がビシッと返事をする。

羊一は上げた右手を明久に向け、振り下ろし…

「お前達の光り輝く未来を護るため…楽園を脅かしかねない火だねをぞんぶんに踏み潰しがよい！」

『うおおおおおおお！！』

「くう…！？万事休すか！？」

一斉に襲い掛かるFFF団。

明久はせめて一矢報いようとフォークを握る左手に力を入れる。

と…

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

ガラツと音を立てて教室の扉が開き、雄二が入ってくる。

さらに、雄二の隣にかなり小柄な小さな女の子がいた。



『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

女の子の姿を見た瞬間、さっきまで殺気立っていたのが嘘のように武器を捨てて二人を囲む男共。

この変わり身の早さ……さすがとしか言えない。

羊一は最初からどうでもよかつたらしくその状況を興味深そうに観察し始める。

明久としても命拾いしたため渋々引き下がった。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

男共の向こうから女の子のものらしい声が聞こえる。

どうやら人を探している時に雄二に声をかけたようだ。

雄二はなんだかんだ言って結構面倒見が良いようだ。

『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してやるうという雄二の温かい気遣いを感じられる。

意外と子供好きなのかもしれない。

『えっと……バカなお兄ちゃんでした！』

なんとも凄い特徴である。

『そうか』

雄二が首を巡らせて該当する人物を探している姿が羊一達から見えた。

『…沢山いるんだが？』

雄二が真顔で女の子に言い返す。

「他ならまだしも、このクラスだとその特徴はあてにならないよな」

「まったくだね」

「否定できんの」

「アンタら…」

同じく真顔で相槌をうつ三人に優子がため息まじりに言う。

『あ、あの、そうじゃなくて、その…』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その…すつごくバカなお兄ちゃんだったんです!』

『『『吉井だな』』』

その場の全員の声が揃った。

「明久、ご指名だぞ。泣いてないでさっさと行ってやれ」

羊一がさめざめと涙を流す明久に言う。

「全く失礼な!僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ!絶対に人違い-」

「あつ!バカなお兄ちゃんだっ!」

小さな子がかけてきて明久に抱きつく。

「絶対に人違い、がどうした?」

「…人違いだと、いいなあ…」

羊一の言葉に明久はガツクリと肩を落とす。

「人違いなんかじゃありません！確かに、バカなお兄ちゃんです！」

明久の言葉に反応したのか、少女は顔を上げて言う。

「ん？」

「あれ？」

顔を上げた少女と羊一の目がたまたま、合う。

その瞬間！

ゾクウツ！！

羊一は冷や水をぶっかけられたような悪寒を感じた。

少女のキラキラした瞳、長い髪の毛、明久の腰辺りまでしかない小さな身体、どこか見覚えのある顔…

少女の容姿、その全てから羊一はなぜか強烈な不安感を感じていた。

『な、何でこんな、いやな予感がする!?!?』

羊一は焦りで鈍くなりかける頭をフルに回転させ、もう一度少女を見る。

そして…

『あああ—————っ!?!?』

少女と羊一が同時に声を上げる。

「あの時のロケット頭突き少女!?!?」

「あの時の気絶お兄ちゃん!?!?」

羊一は顔を引き攣らせ、少女は笑顔で、お互いを指差しあった。

そして…

「バカなお兄ちゃんだけじゃなくて、気絶お兄ちゃんもいたんですね！」

少女は知らない場所でやっと知り合いに会えたような嬉しそうな笑顔に向けてくる。

しかし、羊一はといえば…

「シリマセン、ワカリマセン、ヒトチガイデス、ゴメンナサイ」

頭をブンブンと横に振って完全否定を決め込む。

それを見た少女はぷうっとな頬を膨らませて不満げに言う。

「むう〜！気絶お兄ちゃんも葉月のこと、忘れちゃったのですかあ！」

そう言うと少女は明久から離れると、

「もっと近くで顔を見たら思い出すかも！」

と羊一の方に向け、トテトテと走り出す。

「ちよ、待て！ストップ！この感じ、絶対にマズイことが！」

羊一が必死の形相で止める。

しかし、その静止の言葉も空しく…

ガッ！

「ハレ？」

自分の足に引っ掛かるようにして、少女はバランスを崩す。

少女の身体は慣性の法則に従い、そのまま直進。

すなわち、羊一の腹の辺りへ…



「あ…これ、なんかデジャブ」

ドスンッ！

少女の頭突きが自らの腹にヒットした感覚を薄れゆく意識の中で感じながら、羊一は思った…

『今日の運勢「大凶」って…当たってる、かも…』

そこまでで羊一の意識は真っ黒に塗り潰された…

…ボキンッ…！

そんな音を耳にして…

## 第二十五問（後書き）

こんな感じですよ。

中々、話が進まない…

次あたりで話を進展させたいなあ…できるかは案の定ワカリマセンが。

後、そろそろ羊一の気絶ネタがマンネリかなあ…

少し自重しようかと思ってる今日この頃…

できたら次も読んでやってくださいませ。

第二十六問（前書き）

どうも、ヘタレです。

さて、前回不吉な音が聞こえた羊一君。

彼になにがあったのか…まあ、大体ご想像の通りかと…（苦笑）

では、本編どうぞ

## 第二十六問

「ほんとーに、ゴメンっ！」

「ごめんなさい……」

保健室の長椅子に座る、チャイナ服から制服に着替えた羊一に美波が頭を下げた。

その隣に立っていたロケット少女こと、妹の葉月も同じように頭を下げる。

「いや、ま、まあ、事故だからよ……気にすんなや」

羊一が左手をヒラヒラと振りながら言う。

と、

「そうね。気にしないでいいわよ、二人とも」

と優子がガラガラと保健室のドアを開け、現れる。

「それもこれも、コイツが小学生、しかも女の子の体当たりにも堪えられない身体が悪いんだから」

「優子…いきなり現れて、それはないだろ…」

「あら、アタシ、何か間違った事言った？」

「…いや、その通りだけでもさ…」

しれつと言う優子に若干涙目になりつつ、羊一は右手に目をやる。

彼の右手首には即席の添え木がされ、包帯が巻かれていた。

こんな事をする理由…一つしかない。

つまり…

「十中八九、折れてるな、骨」

手当ての後片付けを終えた夏月先生が言った。

その言葉にガツクリと肩を落とす羊一。

先程、葉月の体当たり（またはロケット頭突き）を受けた羊一は案の定、気絶。

そして、床に倒れた瞬間…

ポキンッ！

と、彼の右手首から不吉な音がしたのだった。

で、体当たり（または以下略）のダメージからの復活がてら、調べた結果…

「右手首骨折…と」

夏月先生がカルテに記入している横で、羊一は何回目かのため息をついた。

「ていうか、あれだけで折れるなんてどんな身体してんのよ？感動すら覚えるわ」

優子がここぞとばかりに言ってくる。

しかし、そこに横から夏月先生が割り込んでくる。

「いや…確かにそれだけの接触で骨折など、異常だが虚弱体質と骨は関係がないぞ」

「え？ そうなんですか？」

美波が意外そうに言う。

優子も意外だったようで黙って先生の次の言葉を待つ。

「ああ…少なくとも、コイツの骨は正常だ。何の問題もない」

先生はそう断言する。

羊一も呆れたように言う。



「よく考えてみる。もし骨が弱かったら、今までの関節技やら取っ組み合いやらでも折れてるはずだろうが」

『ああ…』

二人は納得したように頷く。

…その関節技やら取っ組み合いやらの何割かは彼女らの仕業なのだが…

「じゃあ…どうしてこんな事になっちゃったんですか？」

話を聞いていた葉月がおずおずと挙手して質問する。

「フム。君の体当たりがそこまで強力だとも思えない以上、他に手の骨が折れやすくなるような、なにがしかの理由があるんだろう」

先生はそう言って『何か思い当たる事は？』と視線で羊一に促す。

「ん〜、三途の川には何回か行きかけましたが…主に一部の方のお

かげで…」

「待て、優子。我が右手首に置いた手は何を意味するのだ？その手首には折れるようなモノはもう…」

「羊…世の中には『粉碎骨折』って言葉があるのよ？」

「先生…骨折の痛みがせいか優子の声の幻聴が聞こえてくるんです。どうにかありませんか…」

「末期だな。諦めろ」

「即答!？」

と、

カラカラ…

保健室のドアが開かれる音がした。

その場の全員の視線が入口に集まる。

そこには

「これはこれは…お取り込み中でしたか？」

「あれ？ 竹原先生。どうして保健室に？」

眼鏡を弄りながらいつものように鋭い目つきをした教頭の竹原が立っていた。

「いえ…ここに黒峰君がいる、と聞いたものですから」

「え。先生、コイツと知り合いなんですか？」

「ええ、まあ」

優子の質問を笑顔ではぐらかし、竹原は長椅子に座る羊一に視線を向ける。

「ちょっと彼をお借りしたいんですが…よろしいですか？夏月先生」

「は？ まあ…一応、処置は終わりましたが…」

訝しげな顔の先生の言葉を待たず、羊一は立ち上がる。

「…お呼びだしなんでちよっくら行ってくらあ。先に戻っといてくれや」

羊一は左手をヒラヒラさせて言った。

「何？アンタ、竹原先生と知り合いなの？」

「まあ…。俺の顔は広いからな」

「へえ…黒峰って教頭と意外と仲いいのね」

「……………まあの」

見えないように思い切り顔をしかめながら羊一は保健室を出て行った。

.....

「まず…右手の方は大丈夫ですか？結構な怪我のようですが」

竹原がキビキビとした動作で廊下を歩きながら聞いてくる。

二人は今、旧校舎の廊下を歩いていた。

新校舎の方は比較的人気があり、騒がしいが旧校舎にはそれほどの人気はない。

つまり…密談するには良い環境なわけだ。

「さすが教頭！生徒の怪我の心配なんて大層、お優しいことで」

羊一も竹原の隣を歩きながら言う。

「いえ…これからやっていただくことに影響されると困るのでね」

「…さいでっか」

厭味のつもりで言っただけはみたが挑発にすらなりやしない。

まあ、予想はしていたが。

相変わらず、胸糞悪い。

そして、羊一はさつき、竹原の顔を見て思い出した。

『…そういや教室で脅された時に思い切り机、ぶっ叩いたっけか…』

あの時に右手の骨に何かしら負担を与えてたのだろう。

それがこの結果を招いたと考えられる。

…まあ、今となってはどうでもいいことだが。

「で。結局俺に何をさせたいんだ」

「まあまあ…そう急がずに」

羊一がさっさと結論を求め、急かす。

しかし、竹原は諭すように言いながら歩く。

どつちらどこかに向かっている途中らしい。

「と…ここです。どつぞ」

と、竹原が立ち止まり、色々な荷物が雑多に置かれ倉庫のようになっている教室に入った。

羊一もそれに続く。

竹原は足の踏み場に困るような荷物の中に何の躊躇もなく入り込み、ほつり出されたパイプ椅子を広げ座る。

「さて…では、本題に入りましょう」

そして悠然と足を組み、話を始めた。

「まず、コレをご覧ください」

竹原がスーツの胸ポケットから携帯を取り出し、何かしら操作をした後、羊一に手渡す。

羊一は携帯を受け取り、画面を見る。

『待てえ！この変態っ！！』

『誰が待つかよ！変態っ！！』

画面の中でメイド服を着た明久が、頭にブラを付けた男子生徒を追いかけてまわっていた。

「何やってんの、アイツう！？」

今の状況も忘れて大声でツッコむ羊一。



あのバカの考えがよめない。

明久のメイド姿はまだいい。

だが、なぜ逃亡している男子生徒の頭の上にはブラが乗っているのだ！？

『高校生男子とブラ』など、『スクランブル交差点にアフリカ象』並にありえない組み合わせである。

さすがの羊一も画面の向こうで展開されるカオスな情景に思考力が停止しかける。

この映像には見る者にそれだけの衝撃を与え得るものだ。

と、

「ぬ…コイツ…?」

その衝撃映像（イロイロな意味で…）の中で走る変態の片割れ…ブラを付けた男子生徒…

見覚えが…あるような…

「…う〜ん…確かに、どこかで…」

「三年の夏川ですよ。この前、紹介しましたよね？」

「あ〜…何となく聞き覚えが…小学生の時ぐらいだけ？断片的な記憶しか無いわ」

「つい先日のことですよ」

「まあ、忘れるくらいのヤツだから、どうでもいい小物なんだろう」

「酷い人ですね、貴方も…否定はしませんが」

竹原はしれつと言って、足を組み替える。

「まあ、そんな小物の彼なんですけど…ついさっきまで、彼の相方と共に拘束されていたのですよ」

「…ほお。そいつは物騒な話で」

「全くですね…で、です」

竹原の眼鏡が一瞬、光ったように感じた。

「今回は、彼を拘束した貴方に、少しばかりの忠告に参った…といったところですよ」

「…何を」

「ああ、結構ですよ」

羊一が否定しようと口を開くのを竹原が制す。

「言い訳は聞きたくありません。貴方が私に牙をむいたのは最早ゆるがない事実…」

竹原はそう言って、一枚の写真を取り出す。

そこには羊一と秀吉が気絶した常夏の二人を空き教室に運び込む様子が写っていた。

「私をナメないでいただきたい。こんな写真、いつでも用意できるのですよ」

「……………（チツ）」

羊一が内心、舌打ちをする。

予想を超えて、竹原の情報網は広い。

確かに少々、甘く見すぎていたようだ。

「いけませんねえ…裏切りは組織の動きを阻害し、やがては瓦解を招きます…」

「……………」

押し黙る羊一。

その様子に満足げに微笑み、竹原は眼鏡を弄る。

「……………まあ、でも私も教員のはしくれ。生徒の失敗を許し、今一度、チャンスを与えるのもやぶさかではありません」

「…チャンス？」

「はい」

竹原はとても、とても嬉しそうに唇をひん曲げて微笑み、

「貴方にも、召喚大会に出場してもらいたいのですよ」

「…何を、言って」

あまりの事に絶句する羊一。

竹原はしかし、全く気にせず話し続ける。

「正直、三年の二人だけでは厳しくなってきたと言わざるを得ない現状です。そこで貴方も大会に出場し、優勝を阻む障害を駆逐していただきたい、そう」

「貴方のお強いお友達を」

「チツ！」

我慢できずに舌打ちをしたが、当の竹原自身はまったく意にかいた様子はない。

むしろ、そんな羊一の様子が心底楽しいとでもいったげな笑顔だ。

竹原はそのままの笑顔で続ける。

「たしか貴方は昔、木下優子さんに助けられたとか！そして、今度は自分が彼女を助けようと誓ったそうですね、そう『何をしてでも』」

「…」の「…」

頭に血が上ってクラクラしてくる程の怒りが羊一を包む。

「ならば！ならばならば！愛しの幼なじみの将来の為に！邪魔物である友人を大会で切り捨てるなど、造作もないはず！」

「さあ、貴方は、どうします!？」

竹原は興奮したように早口でそうまくし立てると、椅子から立ち上がり羊一に迫る。

羊一は、暫く竹原を睨みつけた後、

「それをやりゃあ、優子に手出しは、しねえんだな…?」

そう、つぶやいた。

「はあ…もちろん…」

「そうかい…」

羊一は竹原に背を向け、教室のドアに手をかけて言う。

「…やってやるよ。その計画」

それを聞いた竹原はまた口をひん曲げて、笑った。

「はあい…改めて、よろしく願いします」

竹原の言葉は荒々しく閉められたドアの音に掻き消され、宙に消えていった…



## 第二十六問（後書き）

こんな感じですよ。

んー、全体的にゴチャついた感じに…

シリアス展開の書き方がWAKARANAIIっ!?

…失礼しました。取り乱しました。

次は三回戦目ですか…さて、どうしたもんだろ？

できたら次も読んでやってください。

## 第二十七問（前書き）

どうも、ヘタレです。

さて前回、羊一に明久達と大会で戦わせることに…

今回、そのパートナー決めです。

短いですが、どうぞ

## 第二十七問

「…もうそろそろ時間だな」

羊一は携帯の時計で時間を確認する。

ここは人気のない校舎裏。

そこに羊一はしかめつつらで一人、立っていた。

なぜ彼がこんな所にいるのか。

その答えは彼の持つ携帯にあった。

羊一が携帯を操作して先程送られてきたメールを確認する。

『貴方のパートナーが決定しました。その人と接触し、大会に出場してください。手段は問いません』

簡潔な内容の後、こここの場所と待ち合わせの時間が書いてあった。

羊一はメールを閉じ、念入りに消去してからペツと唾を吐く。

「まあたこんな人気のない所を指定してきやがって…なんですか？  
教頭様は人のいないジメジメした場所が大好きなんですかあ、コノ  
ヤロー！」

羊一はブツブツとつぶやいた。

さっき竹原と会ってからずっとこの調子である…

完全にやさぐれているようだ。

「ああー！ムツ、カつく！…あの青い空も、白い雲も、校舎を包  
むお祭ムードも全てがムカつく！」

理不尽にキレる羊一。

…前言撤回。

もはや、怒りのあまりやさぐれるのを通りこして自分を見失ってい  
るようだ。

そんなキヤラ崩壊寸前（てか、手遅れ？）の彼は今、この溢れ出る  
怒りをぶつける対象を求めていた。

…簡単に言うと、『八つ当たり』できる相手を探していた。

と、ふと足元に目を向けると…

「ぬう…?」

地面に蹴っ飛ばすにはおあつらえ向きな石ころが落ちていた。

コレを思い切り飛ばしてやれば、少しはスッキリするかもしれない。

「ククク…悪いが、貴様には我が怒りを鎮めるための贄となってもらおう!」

羊一はそう叫んで、片足を思い切り後ろに上げ、必殺シュートの構えをとる。

「吹き飛ばやあつ!」

そして、溜めた力を解放し、勢いよく振って、

スカッ…

思い切り狙いを外してバランスを崩し、背中から地面に落ちた。

ただでさえ、注意力が散漫になっているのに加え、どこぞのサッカー漫画の主人公の如く足を上げすぎたのが失敗の原因だ。

要は自業自得である。

「ぐ、ぐぐぐ…油断した…」

羊一は痛む右手と背中をかばいながら立ち上がる。

「…下が地面でよかった…アスファルトだったら確実に気絶コースだ…」

そう独り言をもらし、痛む手をさすりながら蹴りそこねた石を見る。

「…止めよ…空しくなるだけだ…」

自分の行動が馬鹿馬鹿しくなった羊一は校舎の壁に寄り掛かって大

きなため息をついた。

『クロヒツジ』と呼ばれ、生徒はもちろん一部の先生からも恐れられると言われた自分。

それが、今では自分の幼なじみを人質にクラスメイトと戦わされそうになっている。

我が身の情けなさに嫌気がさす。

羊一は息を吸い、また一つ大きなため息をついた。

と、その瞬間！

ガサアッ！！

「どうわぁ！？」

目の前に広がる茂みの中からいきなり、誰かが立ち上がった。

驚きの声を上げる羊一。

彼の前に現れたのは…

「てめえ、黒峰！ようやく見つけたぞ！」

「…何やってんのよ、根本」

茂みから立ち上がったのは根本恭二、その人だった。

根本は怒りに顔を歪ませて仁王立ちしているが、頭や制服に葉っぱがくっついていたりしてまったく迫力がない。

というか、むしろ滑稽ですらあった。

意外な人物の意外な登場に羊一もさすがに驚きを隠せずにいる。

そんな羊一に根本は詰め寄る。

「黒峰え…さつき俺にしたこと。忘れたとは言わせねえぜ？」

「さつき…ああ！お前が夏月先生の胸に突っ込んで、元カノと先生に殺されかけたアレ？」



「人聞きの悪いこと言うな！全部お前の仕組んだことだろうが！」

「まあまあ、落ち着きなさいって。そんな昔の事、お互い水に流そうじゃない。川の流れの如く」

「何で加害者がそんなでかい顔してんだよ！？」

「うっせえなあ！人がせつかく下手に出りゃ調子にのりやがって！」

「更に態度がでかくなった！？いつお前が下手に出てたよ！？」

「出てたじゃん、今。仕事でミスしたサラリーマンだってあんなに下手に出ることなんて、そうはないぜ？」

「どこがだ！？全国のサラリーマンに謝れ！」

「はいはい。サーセンした。これで満足か、陰険腰抜け糞野郎？」

「満足する訳あるかああっ！！」

根本の鼻息がさらに荒くなる。

どうやら火に油を注いだ結果になったようだ。

まあ、そんな根本には構うことなくマイペースに羊一が事情を聞き出す。

「んで？こんな校舎裏にまで追っかけてくるなんて、何か用かい、現在一人身の根本君？」

「てめえは……」

何本も青筋を立てながらも話が進まないと思った根本は喉元まで出てきた言葉を飲み込み、話し始めた。

「何しに来ただ？決まってるんだろ！てめえに復讐するためさ」

根本は嫌らしい笑みを浮かべて言う。

「……ほお……あんだけやられといてまだ復讐なんぞ考えると……お前さんも存外、タフだねえ」

「ケツ！そんな態度をとれるのも今の内だけ？俺のバックに誰がい

るか聞けば、てめえは俺にかしづきたくて堪らなくなるだろうさ」

「教科書に載りそうなくらいの典型的な小物台詞、ありがとさん…  
で？そのご自慢の『バツク』ってのは？」

「そんなに知りてえなら教えてやるよ！聞いて驚きやがれ！」

根本は人を馬鹿にした嫌らしい笑みのまま、一つ間を置いて、

「俺の『バツク』…それはなあ…」

…言った。

「竹原…つまりこの文月学園の教頭よお！！」

「……………」

一気に興味を失って半目になる羊一。

根本はそれを驚きのためととったのか、クククと笑って続ける。

「クク…驚いてるみてえだな、無理もねえ…だが、それだけじゃねえぞ！」

根本は興奮してきたのか、大袈裟に身振りを加えて話す。

「これからココにもう一人、仲間がくるらしい。そいつと組んで、ためえに悪夢を見せてやるよお！」

「……………」

羊一は無言で目の辺りを揉む。

なんだか無償に頭が痛くなってきた…

この根本（小物）は教頭のさしがね。

そして、あの「仲間がくる発言」…

つまり…そいつのこと…？

「……………確かに…悪夢だ…」

「ハハハ！ようやく状況を理解したみたいだな！」

根本（馬鹿）が横で何か叫んでいる。

正直、放置して帰りたい気持ちでいっぱいだ。

が…コイツが、竹原の用意した『パートナー』なのだとしたなら…  
そもも言っていられない。

確かに、悪夢だ。これを悪夢と言わず、何と言っ？

「……………ハア」

羊一は一つ大きなため息をつく。

ため息をつくとき幸せが逃げると言っが、もしかしたら本当かもしれない。

実際、今自分はかなり最悪な目にあってる。

とりあえず…この後やることは決まっている。

目の前の自分が巻き込まれた状況を理解していない馬鹿にも、一緒に悪夢を見てもらうとしよう。

「あゝ、根本。とても、とっても、嬉しそうなところ、悪いんだが…」

「なんだ？今さら謝っても遅いぜ！そろそろ教頭の指示を受けた仲間が…」

「あー、それぞれ。その仲間…多分、もう着いてる」

「あ？」

心底意味がわからない様子の根本。

羊一はそんな根本にため息まじりにトドメの一言を言った。

「ソレ……多分、俺」

「……は……？」

## 第二十七問（後書き）

こんな感じですよ…

ん、予想外に根本の口調を忘れてる…こんな感じだったっけか？

で、できたら次も読んでやってください。



## 第二十八問（前書き）

どうも。

今日は七夕らしいですねえ。ニュース見て始めて気づきました（苦笑）

今回の話はそんな七夕とは違い、ロマンチックのかけらもない話になっております…

前置きはこれぐらいにして、どうぞ。

## 第二十八問

新学年最初の行事である『清涼祭』

生徒はもちろんのこと、先生や一般の入場者もその華やかな雰囲気  
を各々、楽しんでいる。

友人と、恋人と、家族と、

それぞれのクラスが趣向をこらした様々な出し物を見てまわり、文  
月学園のいたる所をいつもに増して多くの人が歩き回っていた。

しかし、そんな中でもいくつかの場所では人氣が極端に減る所も存  
在した。

そんな場所の一つ…教頭の部屋には今、三人の人影があつた。

常夏コンビ、そして教頭の竹原である。

「どづいづこつすか、教頭！」

常村が声を荒げ、目の前の机を叩く。

「なんだって二年のあの野郎を大会に出場させたんです！俺達じゃあ、頼りにならねえってんですか！？」

常村の言葉を引き継ぐ形で夏川も詰め寄る。

しかし、竹原はそんな二人の剣幕を意にかいさず、椅子に座って足を組み替える。

そんな竹原の態度に、常村がさらに問い詰めようと口を開け、

「いきなり訪ねて来たので何事かと思えば…そんな事を聞きにきたのですか…」

竹原の言葉に口ごもる。

本来なら二人は教頭曰く、『要注意グループ』であるFクラスの店の営業を妨害することで、相手の自滅を狙った作戦の遂行中の身である。

しかし、竹原が羊一を大会に出場させる事を聞いた二人は今こうし

て竹原に詰め寄っていた。

『チツ…面倒な連中だ…』

竹原は内心、舌打ちをしながらも常夏の二人に説明を始めた。

「その事を説明するにはまず、あなた達が捕まった時の事から説明せねばね」

「…あ、アレか…」

「…アレ…か…」

竹原の言葉に二人が一気に青ざめ、ガタガタと震え始める。

どうやらとても恐ろしい目にあっただらしい…二人とも携帯のバイブレーションもかくやとばかりに震えている。

そんな二人を冷たい目で見ながら、竹原は説明を続けた。

「まあ、何があったかは知りませんし、知りたくもないですが…とにかくあなた達をそんな目に合わせたのは誰であろう、その黒峰君な

のですよ」

『んなあつ!?!』

二人はしばらく動きを止めていたが、次の瞬間には烈火の如く怒り出した。

「あ・の・野郎っ!ぶっ殺す!!八つ裂きにしてやるう!」

「そつだあ!アイツのせいで俺は、俺はああああつ!?!」

「な、夏川!?!どうした!?!頭の上のブラジャーを引っ搔いて…!」

「イヤアアあああつ!?!ミニスカナーズ姿の化け物がああああつ!?!」

「…あ、やべ、また、フラッシュバックがああああ!?!」

「あー、聞こえてるかはわかりませんが、続けますよ?」

そう言っつて竹原は一人語り続ける。

「で、そんな彼を大会に出場させた理由はただ一つ…」

「…私の計画を邪魔してくれた彼への私なりの可愛らしい、仕返しですよ」

竹原の顔に歪んだ笑顔が浮かべられた。

しかし、その目は全く笑っていない。

そこにあるのはむしろ…

「そう、仕返しです。想像して見てください。あのいけ好かない糞生意気な餓鬼が、大会の大勢の観衆の前で無様に負ける映像を！考えるだけで今まで受けたストレスが一気にスカツとするじゃないですか！！ねえ、そうは思いませんか！？」

竹原の言葉にどんどん力が籠っていく。

その顔は相変わらずの歪んだ笑顔だが、その裏からは別の感情が噴き出していた。

怒り、不満、屈辱、…

そんな感情を隠すことなく、撒き散らしながら、竹原は思う。

『そうだ！私の計画に泥を塗ってくれやがったあの糞餓鬼には私が受けたものと同じくらいの屈辱を与えてやらねば！』

竹原は怒りに燃えていた。

元よりプライドの高い竹原にとって、羊一の裏切りは決して看過できるものではなかった。

羊一を彼に怨みを持つ根本と組ませ、大会に出場させる。

そんな二人…コンビネーションなどあるわけもなく、大観衆の前で無様に負けてくれるだろう。

それを見れば少しは溜飲も下がるかもしれない。

人は「それだけのために？」と言っかもしれない。

しかし、竹原にとっては自分のプライドを汚されるのは何よりも堪え難いことだった。

その屈辱を晴らすためならこのような幼稚な行動でも何でもなんだからする。

幸い計画の方は順調に進行中…

これぐらいの戯れも許されるだろう…

竹原はそう考え、クククと笑った…

.....

教頭が悪巧みをしていたのとはほぼ同時刻…

.....ずん.....



と、効果音をが付きそうな雰囲気の二人が校舎裏にいた。

羊一と根本がパートナー同士とわかった後から、凄絶な喧嘩に発展。

しばらくの間、その状態が続いていて今は二人共疲れて座り込んでいた。

と、

「ハア…おい、根本お…」

殴りかかる根本の拳を避け続けた羊一は、額に流れる汗を拭いながら息を整えて言う。

「……………なんだ」

羊一に過去の黒歴史をいびり倒されつづけた根本は、両目の涙を拭いながら返す。

「ここは一つ、お互いの目的が達成されるまでは一時休戦といかねえかい…?」

「…ああ？何を言ってるやがる。何で、てめえなんかと…ていうか、目的も何も俺はてめえへの復讐のために」

羊一の提案に顔をしかめ、難色を示す根本。

しかし、

「あらあら…そんなこと言っていていいのかな？」

「ハア？何が」

「わかっていないようだから、親切な僕ちゃんが教えてあげるよ。耳の穴かっぽじってよく聞きな？」

羊一はそう言うと、根本の耳元に口を寄せ、囁きかけるように話す。

「よく考えてごらん？召喚大会は清涼祭の目玉行事だ。大勢の観客もいるだろうぞ…」

「……………」

「さて、そんなところでもし、君が優勝でもす・れ・ば…どうなるでしょうか？」

羊一は聖人を騙して墮落させる悪魔のように、ゆっくり、ゆっくり、話しかける…

「今の君の立場を変えられるかもしれない…むしろ、君の実力を認め、敬うようになるかもしれない…」

「……………だ、だから、どうした…」

根本は気にしていないように言う。しかし、気にならないはずがない。

Fクラスとの試召戦争に負けて以来、彼のBクラス内での地位の暴落は凄まじいものだった。

それまでBクラス代表として踏ん返り返っていたのが、今では昼休みの食料確保に走らされる始末…

その光景が脳裏で再生される。  
もしかしたら…そんな今の毎日を変えられるかも…

そんな考えが頭に浮かぶ。

しかし、根本は頭をふってその考えを追い出し、強行な態度を崩さない。

「まだわからない？仕方ないね…つまりは、だ」

羊一はニヤリと笑い、声を潜め、囁いた。

『そんな尊敬される根本君の事を、小山さんはどう思っているのかなあ？』

「っ！！！」

根本が雷に打たれたような衝撃をつけ、バツと羊一の顔を見る。

羊一はニコツと微笑み、根本に左手を差し出す。

「俺の提案…飲んでくれるね？」

根本はしばらくその手を見つめていたが、やがてニヤリといやらしい笑みを浮かべると、

「その提案…乗ったぜ」

そう言って羊一の手をとって握手した。

ここに、二人の妙なコンビが結成されたのだった…

「…さつて。そうと決まれば早速大会準備といきますか。え、教頭がエントリーした俺らの枠ってどこだっけか？」

「たしか、Aブロックの…ああ、ここだ。相手は…げ、Bクラスの奴らじゃねえか」

「ほほう…ならば余計に好都合じゃねえか。ねえ、Bクラス代表さん？」

「……それもそうだな。コイツらには俺のバラ色の人生の為にイケ  
二工になって貰おう」

「フッフ…中々に悪いヤツだねえ、お前さんも…」

「ククク…てめえほどじゃねえさ…」

二人が顔を見合わせて笑っている…

と、意外と仲むつまじく見える(？)二人だが…少し、二人の頭の中  
中を見てみよう。

637

### 【根本の頭の中】

ククク…なるほどなあ…その手があったか…

ヤツの考え通りに動くのは正直、腹が立つが背に腹は変えられねえ…

実際、Aクラス並のヤツら相手に俺一人じゃあ、優勝なんざできね  
えのは事実だしな。

ま、黒峰の糞野郎の狙いがあるんだかは知らないが、利用できるだけ利用して最後に裏切って野郎の目的とやらをご破産にしてやるとうよう。

ククク、せいぜい俺の為に頑張って協力してくれや、黒峰君よお…

【羊一の頭の中】

フフフ…やはり乗ってきやがったか…相変わらず、わかりやすい野郎だ。

教頭公認で召喚大会に出られんだ。野郎とその計画をぶっ潰してやるにはこれほどやりやすいところもねえだろ。

そのために必要なパートナーがこの小物だったのには驚いたが、まあ、いいさ。

所詮、小物は小物。

せいぜい俺の手の平の中で無様に踊っていてくれや…フフフ…

…こんな感じである。

二人して、お互いの事をまったく信用しておらず、むしろ利用する気満々であった。

「ククククククククク」

「フフフフフフフフ」

二人分の笑い声が、校舎裏に不気味に響き渡る。

こうして華やかな学園祭の裏でそれぞれがそれぞれの思惑を胸の奥に秘めながら、暗躍する者達は悪巧みに花を咲かすのであった…



## 第二十八問（後書き）

こんな感じですよ。

アレ…なんだか悪者しかない…（汗）。

ま、まあ、いいや（いいのか？）

よく考えたら羊一の召喚獣の詳しい設定、全く書いてませんでした…

次あたりで語れたらいいなあ、とは考えてます。

できたら次も読んでやってください。

## 第二十九問（前書き）

どうもです。

前回から大分時間が空いてしまった…

本編どうぞ

## 第二十九問

「お…そろそろ時間だな」

「みたいね。じゃあ行く」

そう言つてBクラスから男子生徒と女子生徒が出て、廊下を歩き始める。

「しかし、意外といけるもんだな。もう三回戦目だろ？」

「だね。まあ、私と中田君のコンビネーションなら勝てるって信じてたし…当然の結果だよ！」

「柳…そうだな！」

内容からして、どうやら二人とも召喚大会の出場者らしい。

二人は緊張した様子もなく、ゆったりと歩きながら会話をしている。

と、Bクラスカップルが仲むつまじく廊下を歩いていると

ザッ！

二人の前に突然、何者かが立ち塞がった。

それは…

『貴様が中田だな…？』

「なっ！？何だ、お前らっ！？」

額の所にFと書かれた、まるで映画に出てくる悪の魔法使いのような頭をすっぽりと隠すマスクをつけた集団が突如として出現し、中田君の周りを囲む。

『中田！貴様には異端の疑いが浮上した！よってこれより我らFFF団による「異端審問会」を開催する！』

「な！？お前らがあの…は、離せ、離してくれっ！？」

逃げようと暴れる中田君を数人がかりで押さえ込むFFF団。

事情を知らない人達は一瞬何事かと立ち止まるものの、「クラスの出し物の一環です」と説明され（無論、真っ赤なウソだが）、納得したようにまた歩いていく。

『被告人の罪状は！』

『はっ！被告人は「FFF団 Bクラス支部」の一員でありながら、同じくBクラスのYと何度も密会を重ねていました！これは確実に異端であると判断しますっ！！』

『異議無しっ！』 『異議無しっ！』

マスクの集団の中から幾つもの賛同の声上がる。

と、一歩進み出していたおそらく集団のリーダーはその言葉に何度も頭を頷かせると、おもむろに手を上げる。

と、あれだけの騒ぎが一瞬で静まりかえる。

そして、幾つもの感情のよめない瞳が中田君を包み込む。

『…諸君』

リーダー格の団員が厳かに『判決』を告げた。

『…異端者には死をつ!!』』

『異端者には死をおおつ!!』』

「ギャアアアアっ!!!!」

「な、中田くーーーーんっ!?!」

廊下に中田君の断末魔と柳さんの悲鳴が響く。

それから、中田君の身に何が起きたか…

それは、神のみぞ知る…

………

Bクラス前でそんな馬鹿騒ぎが起きていた時刻から少し時間が経つ

て…

羊一と根本は廊下を歩いてた。

「あ、捕獲成功？そつかあ、そいつは良かった。こっちも通報した  
かいがあったってもんだ」

羊一は普通に携帯で会話していた。

本来なら問題だが、今日は清涼祭で学外の人が大勢居るため、監視  
はいつもより緩くなっているようだ。

そのせいか彼の行為を見咎める者は誰もいないため、羊一は堂々と  
会話を続ける。

「ん〜、後はそっちにお任せ…ってことでOK？…あっそう。ほい  
じゃあ…はい、どうも〜」

羊一は会話が終わったのか携帯をパタンと閉じポケットに入れなが  
ら隣の根本を見て言う。

「ほい。後はあっちで処理してくれんでしょ。作戦成功、ってやつ  
だね」

「よし。これで完全に俺達の三回戦目の勝利は決まったわけだ」

羊一の言葉に根本がガッツポーズをする。

「まあ、そういうことだね…：しかし、本当にクラスメイトのことを売るとは、相変わらず最低だね」

「ケツ。FFF団にリークしようってアイデアはてめえが言いだしただろうが」

二人はお互いにニヤニヤしながら言い合っている。

…会話の内容から察せるように、先程の惨劇はこの二人の仕業であった。

羊一と根本は次の対戦相手がBクラスのカップルであるを知った後、すぐに行動を開始した。

まず、根本がBクラス代表として、知り得る限りの情報を提供。

次に相手がカップルと知った羊一が自身の情報網を使って検索をか



ける。

そして、彼氏の方がFFF団に所属していたことを突き止めた羊一はFFF団に情報をリークしたのだった。

後は簡単。

何食わぬ顔で会場に行つて不戦勝が決まるまで待っているだけ…

こうして二人は自らの手を汚さずに勝利を勝ち取ったのであった。

「ま…根本が一回、大会で負けてるのをつつこまれたらかなり面倒だったかな」

羊一はそうつぶやきながら大会会場に行った時のことを思い出す。

根本とコンビを組むのは…まあ、百歩譲って良いとして。

問題は、根本が一度他のコンビとして大会に出て、負けていることだった。

その負けた人間が他の人間とコンビを組んでノコノコと出場している…

この事実をどうごまかしたものが…

と、頭を悩ましていた羊一だったが、大会には拍子抜けするほどアツサリと出場出来ていた。

羊一が監督の先生にそれとなく確認したところ、どうやら根本が他のコンビで出場した記録は抹消されているらしかった。

そんな事を出来るのは…

少なくとも羊一には一人しか思い浮かば無かった。

『…どんな手を使ったかは知らないが…よくもまあ、こんな手間のかかることを』

羊一は心の中でそう思い、飽きれ八割、感心一割、嫌気一割といった感じのため息をついた。

その瞬間！

「羊一！ここにおったか！」

「っ！？」

ドンッ！

「ぐえっ！？」

聞き覚えのあるクラスメイト兼幼なじみの声が入垣の向こうから聞こえ、羊一は咄嗟に根本を側の教室の中に突き飛ばし、ドアを閉めた。

「あ、危ねえ……」

「？ 何の話じゃ？」

「なんでもねえ。気にするな」

「????？」

入垣の向こうから現れたクラスメイト兼幼なじみ、秀吉は相変わらずのチャイナドレスで小首を傾げている。

『痛い〜…何を…って…何だ、お前ら。何故俺を取り囲む？』

「…何か聞き覚えのある声が聞こえる気がするぞい？」

「気のせいだ。てか、何か用があつて来たんじゃないかねえのか？」

「あ、そうじゃ。実はの『ここはどこ…男子柔道部組み手体験だあ！？』…やはり聞き覚えのある声が…」

「ああ、気のせいだ。で用つてのは？」

「ぬ…実は用というのはの『ふざけるな！俺は帰…ちよ、は、放せ！？いや、遠慮とかじゃなくマジで！？』…やはり気のせいでは…」

「気のせいっいたら気のせいだ」

「いや…確かに声が『ちよ、ま、そんな三人がかりとか止め！？サービスじゃね、ちよ、その関節はそつちには曲がらなっ！？』今実際に声がしたのじゃ！」

「気のせいに決まっている。ホレ、とりあえず教室に戻りながら聞かせてくれや」

「いや、今はそれよりも『ウギヤアアアアッ!?!』今度は断末魔のような悲鳴が聞こえるのじゃ!?!」

「ハッハッハ。気のせいだ、気のせいだ」

羊一はそのままハッハッハと爽やかに笑いながら秀吉の手を引き、自分達の教室に出来るだけ早足で、向かった。

『アアアアアアアッ!?!』

…後ろから聞こえる絶叫を聞かないようにしながら…

.....

「…あれまあ…こりゃ酷い有様なこと」

耳にこびりつく根本の断末魔を無視して、教室に帰って来た羊一を迎えたのは…

閑散として、人気のない店内。

忙しく歩き回っていた店員達も客のいないテーブルに集まってトランプで遊んでいた。

羊一が出て行く前から徐々に減っていった客足が今や完全に無くなっていた。

「うむ…まさに閑古鳥が鳴くといった状態じゃ」

秀吉はそう言っただけ息をつく。

「ふーん…んで？結局、雄二は俺に何をしろっての？」

「…話が早くて助かるのじゃ」

羊一の言葉に秀吉は本題に入った。

「雄二はお客を集めるためにこれから占いの方に力を入れるそうじゃ。お主には占い師役兼、他の者の指導…というより、フォローをしてもらいたいとのことじゃ」

「フォロー？他の占い師役は誰がやるんだ？」

「…たしか…」

秀吉はメモらしき紙を取り出すと読み上げる。

「明久、ムツツリーニ、そして須川の三人じゃな」

「…すまねえ…耳がおかしくなったみたいだ…もう一回頼む」

「明久、ムツツリーニ、須川の三人じゃ」

「…悪い、もういい」

「いくら聞き直しても結果は変わらないぞい」

「……………」

秀吉の言葉に羊一は無言で両手を高く上げ、

「無理」

そのままその手を交差させ、大きくバツ印を作った。

「…他になり手がいないそうでの…雄二としても苦渋の決断らしいのじゃ…」

「…この店、潰れるぜ？いやマジで」

「そうならないためにお主の力が必要なのじゃ」

「いやいや！さすがに荷が重過ぎるっす！あの三人のお守りをするくらいなら、島田の妹と遊んでロケット頭突き喰らってた方が百倍マシですって！？」

そう叫び、このアイデアがいかにも無理難題かを必死に主張する羊一。

しかし、無情にも秀吉は他のクラスメイトに呼ばれ、すまなそうに「後は頼むのじゃ」と言い残し、行ってしまった。

後に残される羊一。

「……………ヤベエ…不安しかねえんだけど…」



羊一のつぶやきは静かに宙に消えていった。

## 第二十九問（後書き）

こんな感じですよ。

ほとんど説明ばかりしていた回になってしまった…

羊一の召喚獣もまゝた出せなかったし…

ま、まあ、なんとかなる…かなあ…？

あ、あと、作者のリアルでのアレやコレでしばらく更新遅れると思います。

次もできたら読んでやってください。

第三十問（前書き）

またまた遅れました…

ようやくリアルでのアレヤコレが終わりました

とりあえず、本編どうぞ。

## 第三十問

「と、いうわけで…」

薄暗い個室の中、羊一は左手を顔の前左右に振りながら歩き回っている。

「これより我がFクラスは占いによる店の立て直しをはかる…そのことは君達も聞き及んでいると思う」

『……………』

薄暗闇の中、数人分の影が、頷くように動く。

羊一はその様子を横目に見ながら、語り続ける。

「この計画にはこの店の未来がかかっている…つまり、このミッシェルの失敗はすなわち、店の終焉を意味する…これも、聡明な君達ならば理解できるだろう…?」

『……………（コク）』

また影が頷くように動く。

羊一はその様子に満足そうに何度も頷く。

「そうか…ならば俺も心おきなく、この言葉を言うことができるよ…」

羊一はそこで言葉を区切り、大きく息を吸って…叫んだ。

「チエンジツ!!!」

「…そんなシステムはない…」

羊一の叫びに影の一人、ムツツリーニがボソツと言った。

「そうだよ、羊一。わざわざ集められた僕らに向かっていきなりの戦力外通告はあまりに失礼なんじゃない？」

「珍しく、吉井がマトモなことを言ったな。このメンバーに何の不満があるというんだ」

「いや、むしろ不満しかないんだが…」

ムツツリー二の言葉に明久と須川の二人が同意するように話す。

羊一はそんな彼らの言葉に頭痛を感じて顔をしかめる。

「なんでそんな僕らを相手にしている時の鉄人みたいに顔をしかめてるのさ、羊一」

「…ああ、ちょっと今までの自分の行いを反省したわ…」

「？ 言ってる意味は良くわからないけど…僕ら以外に人員はいないらしいよ」

「ええ〜〜〜っ」

「うん、そこまであからさまに不満を表に出されるとむしろ清々しいね」

「無理に決まってるやろ〜！お前らのフォローするくらいなら赤ん

坊をオリンピックに出場させる方がよほど簡単じゃ、ボケエ！」

「…まあ、それは置いとくとして」

「いや、そこは置いといちゃいけないところだろ」

「とりあえず俺達以外は皆、手はなせないらしいからチェンジは無理だぜ」

「…この世の終わりだ…」

須川がなぜか自身たつぷりに言ってくる。

羊一はしばらく床に手について絶望感に浸っている。

と、思うと大きなため息をついて立ち上がるった。

「まあ、文句を言っても現状の変化はないっつーことは良くわかった…やりやいいんだろ、やりや…」

羊一はそう言って三人に顔を向ける。

「とりあえず…時間もないから簡単に説明するぞ。この部屋で客入れて占いをする。で俺は助手ってことでお前さんらのフォローをすることになる」

『ふんふん』

「お前らは出来るだけそれっぽい雰囲気作りに徹しろ。そうすりゃ後は、俺がなんとかしてやる」

羊一はそう言って、ポケットサイズ占いの本とお馴染みの黒い手帳を取り出す。

「まあ、よほどのことをしなけりゃフォローはする。後は…臨機応変に…ってことで…うまくやれよ?」

『まかせとけっ!…!』

「…不安やわ〜」

羊一はまた一つ、ため息をついたのだった。



.....

「はあ…本当に大丈夫かね…」

羊一はぶつぶつと独り言をつぶやきながら、占い師の衣装に着替えている。

制服の上に黒いマントをはおり、頭の上に同じ色の三角帽子。占い師というよりはどこそ魔法使いのような格好である。

「まあ、ある程度の雰囲気作りには必要か」

と、着替え終わった羊一はそうつぶやいて、占い部屋に入る。

周りを黒い暗幕に囲まれ、ほの暗い部屋の中には一つの机と二つの椅子が置いてあった。

『黒峰く、そろそろお客入れていいか』

「おっ、OK、OK」

外からクラスメイトの音が聞こえ、ガタガタと音を立てて、ドアが

開けられた。

「よ、よろしくお願いします」

おずおずとした様子で女子生徒が入ってきた。

「いらっしやいませ。どうぞこちらへ」

「あ、どうも」

羊一は客が入ってきた瞬間にガラッと雰囲気を変え、椅子を引いて薦める。

665

女子生徒は、薦められた椅子に座って一息つく。

「えっと、貴方が占い師の方ですか？」

「あ、私ではありません。それは、占いの先生が」

羊一はそう言って、暗幕の向こうに向かってボソボソと話しかける。

『オイッ！須川！準備できてるか！？』

『スマン！まだ着替えが終わってねえ！』

『チッ！じゃあ、俺がそれなりに情報引き出して、時間稼いどくからその内に…！』

羊一は会話を止め、女子生徒に向き直る。

「失礼しました。私、今回の助手を勤めさせて頂く黒峰です。よろしくお願いいたします」

「あ、ど、どうも」

羊一は執事もかくやとばかりの営業スマイルを浮かべ、胸に手を添えて一礼する。

そこからはいつもの人を蹴落として笑みを浮かべるような性根は見とれない。

「さて、今日はどのようなことを占いに？勉強運でしょうか？それとも部活動での勝負運？あ、意中の相手との相性などでしょうか？」

「あ、いえ、そういうのじゃなくて、ですね」

「? では、何を?」

「ええ…ちょっと…」

「行方不明の彼を…探してもらいたいと、思いまして…」

「……………」

羊一は叫び出しそうになるのを堪え、秀囲気を壊さないように平静を装う。

「そうですか…それはそれは（ガタガタガタツ!）」

「あの、テーブルに乗せた左手がすっごい震えてるんですけど…」

…残念ながら隠しきれなかったようだった。

「いえいえなんでもないですよ？本当に」

左手をマントの中に隠し、なんとか笑ってごまかす羊一。

しかし、心の内ではパニックである。

『初っ端からコレ！？よりによってなんでこんなヘビィなのが！？』

と、そんな絶賛大混乱中の羊一を置き去りに、女子生徒は話し続ける。

「私、二年の柳というんですが…さっき、彼と廊下を歩いていたら、突然、謎の集団に連れ去られてしまって…」

『ナニソレ！？もはや事件じゃん！まごうことなき誘拐事件じゃん』！

「私、必死に探したんですけど、見つからなくて…先生に知らせても信じてもらえなくて…」

『そりゃそーでしょうねえ！？普通は信じませんよ、んな状況！』

「そんなのだから警察にも言えなくて…それで、私、どうしようって考えてたら、ここを見つけて…最後の希望に…！」

『いやいやいや！？そんな期待されても！？こちとら学園祭の出店だよ？荷が重過ぎるわ…！』

羊一は心中でそう叫びながらも、冷静を装って女子生徒…柳に言う。

「…え、誠に申し上げ難いのですが…」

しかし、ヒートアップしてきた様子の柳は羊一の言葉が耳に入らないのか、泣きながら話し続けている。

「なんでこんな事につ…！私達はただ召喚大会の三回戦に出場しようとして廊下を歩いてただけなのに！」

「……………へ？」

羊一が営業スマイルのまま固まった。

なんだか、とても聞き覚えのある単語が聞こえた。

『召喚大会』の『三回戦』

そして、『謎の集団に襲われ』た『カップル』

…嫌な予感に羊一は背中にドツと汗が吹き出したのを感じた。

羊一は嫌な予感に半ば震えながら泣いている柳に質問する。

「あの…すみません…彼氏の方のお名前は…？」

「…中田君、です」

…聞いたことがある名前。

「ち、ちなみに、貴女とその中田君のクラスは…？」

「どっちも、Bクラス、です」

… Bクラスのカップル… すごく最近、聞いたことのあるフレーズ。

「で、では… その、貴方達を襲った謎の集団について詳しく…」

「えっと… なんか、おでこのところに『F』って書いてある覆面を被ってる集団でしたっ！」

… とてつもなく身近にそんな集団を良く、見かけるような気がする…

「あ、そうです！ たしか…」

「… た、たしか…？」

柳は何か思い出したように椅子から立ち上がって…

「たしか… 『FFF団』って名乗ってましたっ…！」

『やっぱりかぁー…！っ！…？』



羊一はまた心の中で絶叫した。

無理もない。

少し前に自分が陥れたばかりの被害者の片割れが目の前にいるのだから…

そんな事実など、全く知らない柳はさめざめと泣き続ける。

「どっして…どっして、こんなこと…」

『う、うぐ…』

「私達、ただ清涼祭を二人で楽しくすごしたかっただけなのに…」

『ぬ、ぐぐぐ…』

「まだ付き合っただけで…でも彼と一緒にいるだけでとっても楽しくって…」

『ガフッ！？』

「…大会の後も一緒にイロイロ回ろうねって、約束してたのに…こんなことに…ウウツ…」

『ゴメンなさい！そんなことを仕組んだの、おれえー！！そんで、実行犯は暗幕の向こうー！認めますから、もう、もう止めてえーーっ！！』

羊一は柳に見えないように頭を抱える。

今まで何回も他人を陥れてきた羊一だが、少しくらいの良心は持ち合わせているつもりだ。

その良心がガリガリと音をたてて削り取られる気がする。

外傷はないのにえらい胸が痛い…

『こ、こんな精神的拷問堪えられねえ！確かに、完全に自業自得ではあるけれども！？』

羊一はダメージに引き攣る顔の筋肉を伸ばし、言う。

「わ、わかりました。先生に頼んで、やれるだけやっていたいただきます…」

「ほ、本当ですかっ!？」

その言葉に柳はバツと顔を上げて涙を流して喜ぶ。

「ありがとうございます!このご恩は絶対忘れません!」

「止めてえ!?!そんな感謝の念を込めた目で俺を見ないでえ!！」

「??？」

「す、すいません…ちょっと、取り乱しました…」

羊一は出来るだけ普通に見えるようにしながら、暗幕の奥に入り、頭をフル回転させる。

『どつするっ!?!もはや名乗り出て、ごめんなさい出来るような雰囲気じゃねえよ!かと言って助けないとまたあの精神攻撃が!?!』

『お、落ち着け…落ち着くんだ黒峰羊一！とりあえず…須川に占いつてていで中田君とやらを棄てた場所を吐かせよう！話はそれからだ！』

羊一がそう考えをまとめていると…

「おお、黒峰、スマン。着替えに手間取った」

「須川、遅か」

羊一は文句を言おうと後ろを向き、

「いやー、スマン。どこにしまったか忘れちゃって」

そう言っつて照れ臭そうに頭をかく、額にFの覆面姿の須川を見た。

「アウトオオオオツ！！！！」

「な、何だあ！？」

羊一は須川に向かって、指を突き付け、思い切り叫んだ。

「な・ん・で、よりによってその格好なんだよ!？」

「何を言う!この格好こそ、正装中の正装だろう!」

「どこが正装だ!百歩譲って正装だとしても、それはなんらかの魔術の儀式的何か用の正装であって、学園祭の占い師の正装じゃねえよ!？」

「お前だって似たような格好してるだろうが!」

「こっちはまだ学園祭の範囲内だろうが!いいから着替えてこい!今その格好見られたらイロイロとマス」

「あの、何かあったんですか?」

と、二人が罵り合いをしていると、その声が聞こえたのか柳が暗幕から顔を覗かせた。

「あ……」

「ん？」

須川（with覆面）と柳の目がバツチり合う。

『フオオオオオツ！？』

慌てふためく羊一の目の前で、柳の目が大きく見開かれていき…！

「あ、あの時の覆め『秘技！なりきり占いい！』』『ブフェツ！？』  
、って、エエー…ツ！？」

柳が叫ぼうとするのを遮るようにして叫びながら羊一は左フックを  
須川のボディーに叩きこんだ。

突然の羊一の暴拳に驚く柳。

その驚きに動きを止めた彼女のスキをついて羊一は早口で喋り始める。

「柳さん！コレこそ、須川先生の占いの秘技、『なりきり占い』です。この方法は自らを占う相手に近づけることで、その人との間に縁を結び、第六感や超能力、大地のパワー、その他諸々の何か凄そうな力をこつた煮にして占っちゃったりする方法なんです！！」

「え、あ、え？」

「ただちよつとこの方法は危険がともないまして！占い師の体をこつた煮パワーの残骸的な何かが襲ってダメージを与えてしまうみたいなあ？そんな感じの副作用が！」

「は、はあ……」

「な、何言つてやがる…コレはてめえの『ああっ！また不思議パワーが！？』ゲフウツ！？」

何か口ばしろつととする須川の腹に柳には見られないようにしてフックを入れる羊一。

そのまま介抱するふりをして、小声で須川に聞く。

『おい、須川！さっき処刑したっつーBクラス男子、どこにやった！？』

『はあ？なんでそんなこと…？』

『いいから！さっさと吐け！また一発、ど真ん中に入れるぞ！？』

「た、体育倉庫の裏だあ！！」

須川は訳も分からずにとりあえず叫ぶ。

羊一はそれを聞いて満足そうに頷き、

『よし、めんどくさい事にならないようにちょっと寝てなさい』

「アギヤアアアアッ!？」

さっきムツツリーニから借りたスタンガンを押し当てた。

須川は凄まじい断末魔をあげるとびくびくとケイレンし、やがて動かなくなった。

「あ、あの…大丈夫なんですか…その人」



「あー大丈夫ですよ。体だけは丈夫な奴ですから」

「いや…でも白目剥いてるし…なんかプスプス煙たってるし…」

「ハハハ、先生はいつつも占いた後はこんな感じなんですよ。そんなことより、早く彼のもとへ行ってあげてください。きっと彼も貴女を待ってるはずだ」

「そ、そう、ですか…わかりました。行ってみます！」

柳はそう言って、暗幕の向こうに戻り、

「あ、そつだ」

かけたところで振り返って頭を下げてきた。

「本当にありがとうございました！とても親切にしてくださいただけでなく、こんなに体をはってまで占いをしていただけなんて…」

「……………あ、いえ…仕事、ですから…」

「本当に感謝してるんです！ありがとうございます。じゃあ私、行きます！」

「…あ、はい…ご来店、ありがとうございました」

柳が涙目ながらも嬉しそうに去った後、羊一は一人、占い部屋に立ち尽くす。

とりあえず…お客には満足していただけだ。

彼女からこの占いの良い噂が口コミで広がれば、当初の目的である「店の復興」は果たせるわけだ…

良いことづくめ、である。

羊一はそう考えて、そのまま無言で椅子に座り…

「ふふ…」

あまりの精神的ダメージにテーブルに突っ伏したのだった…

### 第三十問（後書き）

こんな感じですよ。

本当はムツツリー二、明久までやりたかったんですが、予想以上に長くなってしまったので、二つに分けました。

相変わらずの無計画っぷりを発揮してます…

できたら次も読んでやってください。

第三十一問（前書き）

お久しぶりでございます。

本当に、本当に遅れました…すみません

と、とりあえずどうぞ

### 第三十一問

「羊一。次の客…何故机に突っ伏している？」

黒いマントを身につけたムツツリーニは物凄い負のオーラを纏い、机に突っ伏す羊一に声をかける。

「…うあ〜〜…」

「…帰ってきたら机の上にエロ本が積み上げられていた時みたいな声だな」

「…いや、その例えはイロイロと違うだろ」

「…そんな状態ででもツツコミを忘れないその姿勢には感心する」

「…そいつあどうも」

羊一はようやく顔を上げた。その顔には確かな疲労の色が見える。

「…何があった？」

準備（着替えや秀吉による即興の演技指導）に掛かり切りだったムツツリーニが羊一にそう聞く。

しかし羊一はその質問に「ははは……」と力ない笑いをし、

「……何、ちよつと『女の涙は武器』って言葉を学んでいただけさ……  
ははは」

「？」

言ってる意味はわからなかったムツツリーニだが、客を待たせるわけにもいかないのでかわいた笑いをしている羊一を退かせて椅子に座った。

椅子を奪われた羊一は仕方なく椅子に座るムツツリーニの横に立つ。

と、

「……………」（カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカ！）

「…おい。何故、凄い勢いでカメラを机の下にセッティングしている…？」

「…(ピタッ)」

ムツッリーニは作業の手を止めて少し考えた後、羊一の方に顔を向け一言

「…占いに使う」

「んなわけあるかっ！！撮る気満々だよなあ！？」

「……そんなことはない（カチャカチャカチャカチャカチャカチャ  
！…！）」

「うん、その言葉はその作業の手を止めてこっち見て言おうや？」

「…違う。本当に占いに使う」

ムツッリーニは羊一に顔を向けて（しかし目は反らして作業も続行しつつ）そう言った。



「……………本当だろうな？」

「…（コクコク）」

「…マジで止めてくれよな？この商売、女性客が来なくなるのは致命傷だから」

「…ダイジョウブ。ウソ、ツカナイ」

「なんでカタコト！？やっぱやるつもりだろてめえ！？カメラ超越せ！没収だ没収！」

「…ッ！？（ブンブン）」

と、二人がカメラの奪い合いをしていると入り口の暗幕が開かれた。どうやら客が入ってきたようだ。

「…っ！！（カチャッ！！）」

「あ！てめ」

ムツツリーニは羊一が入り口に意識を持っていかれた一瞬の間に低い体勢をとり、カメラを構え

「占いだって？僕を占ってくれ」

「……………（ガクッ）」

客が野郎だとわかった瞬間、その場に膝から崩れ落ちた。

「いらっしやいませ。ようこそ、ヨーロッパへ」

「…そこで肩を震わせて静かに泣いてる彼は何かあったのかい？」

「気にしないでください。ちょっと夢が破れただけなんで」

羊一は傷心中のムツツリーニを無理矢理椅子に座らせ、怪訝な顔をする客の男子生徒に営業スマイルを浮かべた。

「さて…で、今日は何を占いに？」

そう言いながら羊一は相手を観察する。

ムツツリーニの夢とやる気を抹殺した男子生徒はどつやら上級生のようだ。

顔はある程度整っていて、髪もサラサラ。所謂、女性受けしそうなイケメンというヤツだろう。

そんな男子生徒は椅子に座って足を組み、踏ん反り返って話し始めた。

「僕の名前は三年の早崎。ま、暇つぶしに入ったただけなんだ。何でも良いから占ってくれ」

言葉の端々から尊大な印象が垣間見える。

その視線には明らかに人を見下している感が透けて見えた。

羊一はそんな様子を見ながら呆れていたが…

『…はて？三年の早崎って確か何処かで』

何処かで聞いたことのある名前だと首を傾げる羊一。

そんな彼の疑問にムツツリーニが答えた。

『…三年の早崎…かなりのプレイボーイとして有名』

『ああ、そうだそうだ…イケメンを鼻にかけた典型的なナルシストだって話だが…この様子じゃ噂は本当らしいな』

羊一は目の前で人を見下したような笑みを浮かべる早崎を見てつぶやく。

まためんどくさいのが来たなあとは思ったが、客は客。対応しないわけにはいかない。

羊一は仮面のような営業スマイルを浮かべたまま、接客を続ける。

「そうですかあ…では…」

「ああ…金運とか仕事運なんか興味ないからそれ以外で」

「……じゃあ恋愛とかで」

羊一は笑顔でそう言った…内心『てめえの興味とかどうでもいいわあ』と思っではいるが。

「ま…それなら…まあ？僕のようなイケメンにはあまり必要でもないのだけど」

早崎は前髪をかきあげ、言う。

本人はカッコイイと思ってやっているんだろっが同性の羊一達にとってはただただウザっただけである。

二人は一瞬のアイコンタクトで『さっさと終わらせよう』と意思を統一。

羊一が接客を続ける。

「なるほど…では次に具体的に何を知りたいのか教えてください」

「そっだな…じゃあ、彼女との相性を占って貰おうか」

「相性…ではその彼女のお名前を教えてください」

「わかった」

早崎はそう言つと

「三年は ちゃん、 ちゃん、二年は××ちゃん、後は一年の

…」

ずらずらと名前をあげていった。

「……………」

最初、驚きで言葉を失っていた羊一だったが名前が七人を超えたあたりから今度は呆れて何も言えなくなっていた。

『は……こらまた……よくまあこんなに……え……つと？……今12人目か。ちよつとしたスポーツチームだな』

羊一は呆れた様子で指折り数えていた。

しかし、横に座るムツツリーニが妙に静かであることに気づいて顔

を上げる。

「…異端者に…死をつ…！」

「殺るな、アホ」

羊一は何処から出したのか、クナイを構えて立ち上がり、今にも投げそうになっているムツツリー二の頭に左チヨップを叩き込んだ。

「…何故、止める羊一」

「あんな…気持ちは分からんでもないが、客を殺そうとすんな。接客業、ナメてんのか」

「…大丈夫。殺しはしない」

「ハア？そりやどついう意味」

「…ただ少しアイツの身体で黒ヒゲ危機一髪をするだけ」

「おもくそただの猟奇殺人じゃねえか！？」

「…じゃあ身体は止めて顔だけで」

「より猟奇性が上がっただけで結果は何にも変わってねえよ!」

「…仕方ない。刃渡りは20センチまでにする」

「譲歩になってねえ!?むしろ最初よりも凶器がデカクなるじゃねえか!」

「…アレもコレもダメ…お前は俺に何をさせたいんだっ…!」

「だからさっきから占いをしろっつってんだろっがっ!」

「?…何を揉めてるかはわからないけど…早く占ってくれ」

早崎は争う二人を見て首を傾げながら言う。

どうやらこの早崎という男、基本的に人の話を聞かない性格らしい。

彼にとって幸か不幸かはわからないが、ともかく殺人未遂の場面や今の物騒な話は聞かれなかったようだった。



羊一は一度息を整えてムッツリーニに小声で話しかける。

『いいから！さっさと占い師としての職務を果たせ！ホレホレッ！』

羊一はムッツリーニを椅子に押し戻し、「では、どうぞ！」と言って占いをスタートさせた。

「……………では、占います」

ムッツリーニはまだ不満そうにしていたがそう言って占いを始めた。

「…ではまず、このナイフを呑み込んでください」

「はっ？」

「冗談です！ええ、冗談ですともっ！！」

…まだ諦めていなかったようだ。

羊一はナイフを仕舞い、ムッツリーニの首筋を掴んで机の下に引き

ずり込んだ。

『おい…マジ、本当に、店がヤツバクなるから…イロイロヤツバ  
イから…止めてくれ』

『…しかし』

まだ不満そうなムツツリーニ。

『ああーっ！分かった分かった！じゃあ…俺の知ってる良い本屋を  
教えてやる！それでどうだ！？』

『…詳細を』

条件や何やよりもまず『本屋の詳細』を聞くところはさすがといっ  
たところか。

『駅前。品揃えは中の下といったところだが、店員は男だけ。あま  
り客は多くないし、立ち読み客もない。また、学校から近すぎず、  
しかし遠すぎずの距離だ』

『…そこにはどのような『ブツ』が？』

『…例えば…』

羊一はムツツリーニの耳元でゴニョゴニョと囁く。

と、それを聞いたムツツリーニの目がクワツツと見開かれた。

『…な、何と言う…』

『ああ…定番のものからコアな趣味にも対応している…ここまで言えは、お前なら分かるよな…?』

『……………』

ムツツリーニは一瞬顔を伏せると、

『…交渉成立』

キラキラとした目で羊一の手を握ったのだった。

…何の話をしているのかは神のみぞ知る…

こうして二人は分かりあったわけだが…

『…奴の顔を見たらまた殺意が湧きかねない』

という問題が浮上したのだった。

ムツツリーニとてFクラス。他人の幸福を嫉み、人の不幸に拍手喝采をあげてきた男である。

それが早崎のような男を見て殺意に駆られてしまい冷静な判断力を失ってしまうのは当然のことであろう。

羊一は目をつぶり、頭を回転させる…

「何か…：ムツツリーニ、エロい』…そんなことはない!』、妄想?…そうかつ!」

と、その瞬間、一つのアイデアが彼の脳内を駆け巡った。

「ムツツリーニ!俺に一つ、考えがあるんだが…」

「…それは？」

羊一は椅子に座り手鏡を見て前髪を直している早崎を指差し、

「お前、アイツのことを女だと思え」

羊一の言葉にムツツリーニは一つ、間を置いて、

「…無理」

両手で大きくxを作り言った。  
しかし羊一は食い下がる。

「よく考えてみる！いいか？アイツのあの言動…アレをアニメでも漫画でも良い！『美少女の高飛車お嬢様キャラ』とでも思い込め！」

「…………無理！」

「諦めるな！お前の妄想力なら、いけるはずだ！」

「…む」

とりあえずムツツリーニは羊一に言われた方法を試してみる。

早崎をジーツと見るムツツリーニ……………

「…やっぱり無理」

「大丈夫だ！いける！お前なら…」『寡黙なる性識者』と呼ばれたお前なら…！」

「…む、むむむ…っ！」

言われたムツツリーニ、再度挑戦。

今度は目を閉じて集中する。

「ぬ、ぬぬ…ぬ…」

「いけ！ムツツリーニ！妄想を爆発させる！頭の中をピンクに染め上げるんだ！」

ムツツリーニがカツ！と目を見開き、天に向かって叫ぶ！

「うおおおおおおっ！ー！」

「いつけえー！ーっ！ー！」

そして、

「…我、開眼せり…」

ムツツリーニは今までにない低い声でボソリとつぶやいた。

その姿には何かを乗り越えた者が放つような、妙な貫禄が漂って見える。

「…今の俺になら鉄人ですらも妄想できる…」

巖かにそう告げるムツツリーニ。

そしてムツツリーニは二人の奇行には目もくれずに携帯をいじっている早崎の方を向き…

「…(カッ!!)」

と目を光らせ、

「…バフツ!!!」

「ムツツリーニイイイイっ!?!」

「うわぁ!?!」

そんな音とともに血の海に沈んだ。

「ちよっ…おまっ!何となく、予想はしてたけどさぁ!?!」



羊一はムツツリー二に駆け寄り（と言っても二歩の距離だが）抱え上げる。

「…よ、羊一…」

「！な、何だ、ムツツリー二!?!」

「…お嬢様のヒールは…最高…（ガクッ）」

「…あの一瞬でそこまで妄想が膨らむとはさすがの俺も予想できなかったわ…」

羊一は呆れたようにやり遂げた男の顔で倒れ伏すムツツリー二を視界の外に追いやった。

「ちょっと！制服も僕の携帯も血まみれじゃないか！どういつつもりだい、コレ!?!」

さすがの早崎も鼻血をぶっかけられたら気付かないわけにはいかなかったようだ。

血にも負けないくらいに顔を真っ赤にして言ってくる。

羊一は「まあまあ」と落ち着かせるように早崎をなだめ、椅子に座らせる。

その間も脳内では『この状況をどうやって占いにこじつけるか』を考えている。

それが彼に与えられた役割である。

「あゝ、これはですね…実は、」

羊一は考えをまとめるように暗幕を見て…

「……………これは危険ですね…」

「ハア？」

「血…これは危険を表しています。さらに鼻血であるという事は、具体的には顔の危険ですね。出来るだけ頭を守って生きてください、今後もイケメンとして生きていきたいなら、ね」

湯水のように喋くる羊一。

羊一はマシンガンのようなトークで危険を語り出した。

しかし、早崎としては、たとえ占いだとしても服を汚されたことは度し難い事であったようだ。

「ハッ！何だ、それは。とにかく、僕は帰らしてもらおう！」

「あ、ちょっと、お客さん」

「何だい！」

「忘れ物ですよ」

「工事用ヘルメットを渡すな！いらないよ、そんなもの！」

「ハア、そうですか…本当に、良いんですか…？」

「良いんだよっ…！」

早崎は鼻息荒く暗幕を開けた。

『お疲れ』

「…へ？」

そこには数人の女子生徒が笑顔で手を振っていた。

羊一は「あ」と気まずそうに頭をかきながら

「いや、さっき気づいたんだけど…アンタの後ろの何人が、その彼女さん達の一部みたいね」

「…は…？」

羊一の言葉に早崎は一瞬で固まった。

羊一は「だから危険だと言ったのに…いや、覗いてる皆さんの視線が怖い、怖い」と気まずそうにハハハと笑う。

その笑いに触発されたように早崎の彼女軍団も一斉に『アハハ』と

笑い出す。

しかし、笑う彼女らの目には笑いとは違う感情が渦巻いているように思えた。

「あゝ…とりあえず…」

羊一は先程から固まって青ざめ、蠟人形のようになってしまっている早崎の肩をポンポンと叩き

「頑張つて、返ってくるんだよ……知り合いの腕の良い保険医、紹介しとくから」

その言葉が終わるか終わらないかという時には早崎の姿は黒い波に呑まれ、何処かに連れていかれてしまった…

羊一は黒い波が店の外に消え失せたのを確認した後、一つため息をつき、

「はい、次だ次々、さっさと客まわすぞー」

そう言って倒れているムツツリーニを起し、そうと店の中に入っていた。

### 第三十一問（後書き）

こんな感じですよ。

予想外に長くなってきましたね…まだ終わらない…

できたら次も、読んでやってください。

### 第三十二問（前書き）

どうも…お久しぶりでございます。

へタレでございます。

今回の話はめちゃくちゃ難産でした。

悩んでる内に一日すぎ、二日すぎ…

あっという間に一ヶ月…時間の流れが早すぎる（泣）

とりあえず、ござい。



## 第三十二問

「ふう…ようやく目立たなくなっ たな…」

羊一は雑巾をバケツの中に放り込むと、固まった筋肉をほぐすように伸びをする。

長時間しゃがみ込んだ姿勢のままの作業が続いたため、伸びをした瞬間にパキパキと体から音がした。

「まったく…なぜ俺がムツツリー二の鼻血の後始末をしなくちゃならないのか」

羊一はぶつぶつと愚痴る。

ムツツリー二が保健室に運ばれたため、彼が遺した紅い湖の処理は羊一に押し付けられたのだった。

随分と時間がかかったが、鼻血の川の抹消には成功した。

「やっ、と…」

羊一はもう一度伸びをして固まった体をほぐすと、

「仕事も終わったし退さ」

「ちょっと羊一！？まだ僕の番があるからね!？」

そう叫びながら暗幕を掻き分け、明久が現れる。

羊一はそんな明久に目を向けると、

「…ハア…」

「なんで僕の顔を見ながらため息をつくのさ!？」

「まったく…人が必死に辛い現実から逃避しようとしているというのに」

「サラッと僕を『辛い現実』呼ばわりしないでくれない?」

「友人というなら友達が妄想の世界に身を委ねようとしている時は

笑って送り出してやるべきじゃあないのか？」

「べきじゃあないよ！？そこは全力で止めるのが真の友人だと思う  
！」

「まったく…お前とは会話にならないな」

「それは確実に僕の言葉だよ？」

「もうお前の癒し系なマヌケ面には嫌気がさしたぜ！」

「褒められてるのか、けなされてるのか分からない！？」

「お前…自分の顔がどれだけ罪深いものか、わからないのか？」

「ど、どついでに」と？」

「どれだけの人間がお前に惹かれ、淡い気持ちを抱いていると思っ  
ている！」

「！？そ、そんな！僕が実はそんなにモテていたなんて…」

「ああ、モテてる……Fクラスの奴らに……」

「9割野郎じゃないかあ!？」

そう言っつて現れた早々、床に突っ伏す明久。

羊一はその明久に近づきその肩に手を置いて、

「そこ、さっきムツツリー二の鼻血の海だったところだから」

「平然と追い討ちをかけないでくれない!？」

その場から急いで飛びのいた明久は羊一をジト目で睨む。

「なんで他の二人と違って僕だけこんな扱いなのさ……」

「まあ明久だし」

「酷いっ!?!？」

「そんなことよりも、だ。明久よ」

「な、なに？」

「こんなことをしてる間に客が来ちまってんだ！さっさと配置に着け！」

「理不尽！？」

着替える時間もないため、仕方なく制服のまま占い師役の席に着く明久。

怪しい内装の部屋に制服姿の明久が座っている光景はどうしたってシニールである。

「お待たせしました〜。どうぞ〜」

羊一が接客スタイル（1オクターブ上の声+鉄の笑顔）に移行して、客を呼ぶ。

そして中に入ってきたのは…

「お、おじゃまします」

「アキ。上手くやってる？」

「あれ、姫路さんに美波。どうしたの？」

入ってきたのは瑞希と美波のFクラス女子コンビだった。

美波は明久の発言に呆れたような目を向けた。

「アキ…ここに来たってことは占いしてもらいに来たに決まってるでしょ」

「なんだ島田に姫路。お前達が客か」

「…黒峰君。そうとわかった途端に態度を変えましたね…」

「まあいいじゃないの。ささ、座って座って」

羊一は美波を椅子に座らせる。

テーブルに明久と美波が向き合うようにして席に着く。

椅子が足りないため、瑞希はテーブルの横に立つ。

「で？今日は何を占いに？」

羊一は明久の斜め後ろの自分のポジションに立って言った。

「そうね…じゃあ今日は」

と、美波が言おうとした時

「ちよつとまった美波。言わなくても良いよ」

明久が美波の言葉を遮る。

怪訝そうに明久をみる美波に明久はさらに続ける。

「僕にはわかるんだ。美波が何を占いたいか」

「っ！？そ、そうなの？」

「もちろんだよ」

そう言っつて笑う顔には確かな自信が見て取れた。

どうやらかなり自分の考えに自信を持っているらしい。

『?...はて、あいつ、そんなこと出来たっけ』

羊一は明久の後ろで首を傾げる。

『あの...黒峰君』

『うん?』

と、瑞希が羊一に小声で話しかけてくる。

『吉井君であんなこと出来るんですか?もしかして黒峰君が教えたとか?』

どうやら瑞希も同じ疑問を持っていたらしい。



『いや。教えてないし、あいつがそういうことを出来るとも聞いてねえが…』

『じゃあどうするんでしょう？吉井君』

『さあ？まあ、見てりゃあ分かるさ』

そう言っつて傍観を決め込む羊一。

その視線の先では明久が自慢げに胸を張っていた。

「ほ、本当にわかるの？」

「わかるさ。美波の考えなら手にとるようにわかるよ」

「そ、そう…」

明久の自信満々の答えに、なぜか少し嬉しそうにしている美波。

『随分とまあ、嬉しそうになって…ま、人間好きなヤツと心が通じ

合ってるかもと思ったたら嬉しくもなるか…』

その様子を横から傍観し続ける羊一は頭の中でそう呟く。

まあ美波の様子を鑑みるに、多分その思考は当たらずとも遠からずといったところだろう。

その証拠に…

「む…美波ちゃん一人だけずるいです…」

羊一の視界の隅で瑞希が小さな声で呟いている。

と、周りがそんな感じになっていることにまったく気づかずに明久は話し続ける。

「美波が占いをすることなんて一つしか考えられないよ」

「そ、そう?」

「よく考えればすぐわかるよ。美波が今日来た理由はつまり…」

「小さな胸を大きくする方法を聞きに来たんでしにそうなら指が痛いいいいっ!？」

悲鳴を上げる明久の右手の指を折り潰すように力強く握る美波。

「…次は腕の骨を握るわ」

「すみません！美波様！どうかこの僕にお慈悲を！」

「…じゃあ相性でも占って貰おうかしら」

「わかりましたわかりましたわかりましたから力を抜いてでないと本当に折れるううっ!？」

明久の悲鳴まじりの答えを聞いて、ようやく力を緩めた美波はワクワクとしたように椅子に座り直す。

「じゃ、さっそくお願いね」

「うっっ…酷い…」

「今のはお前が悪い…いいからさっさと始めるぞ」

明久は痛みに涙目になりつつも準備を整え、占いを始める。

「ほいじゃあ、島田よ…俺が質問してくから、正直に答えてってくれ」

羊一は『猿でも出来る占い全集 質問編』という本を開いて言う。

「…何、その本」

「見ての通りの占い全集だ。結構当たるらしいぜ?」

「…イロイロ気になるけど…わかったわ」

「よし。それじゃあ質問!」

ジャカジャンッ!!

「『その人との関係は?』」

「ん〜クラスメイト、かな」

「ふむ…『クラスメイトと答えた貴方…その人は類人猿?』」

「どんな質問!?人間よ!」

「ふむふむ…『ではその人は鳥類?』」

「なんでより遠くなってんのよ!?人間!」

「フムフム…『ではその人は人間?』」

「そうだって言ってるでしょ!?!」

「『…本当に?』」

「どこまでうたぐり深いのよ、その本はあつ!?!」

その後も二、三個の質問をした後、羊一は質問の答えを本に書き込

む。

「フム…明久。312ページの二十七番だ」

「了解」

明久は羊一に言われた通りに『猿でも出来る占い全集 解答編』の分厚いページをめくっていく。

「ん。じゃあ美波。結果を発表するよ」

「…なんか異常に疲れたけど…良いわよ」

「え」と

明久はページに書いてある結果を読み上げていく。

「『おめでとうございます！貴女と彼との相性は最高！…お互いに良い影響をシェアベストな関係と言えるでしょう』」

「え！そ、そう？」

「『貴女達ならばどんな辛い試練も二人でも乗り越え、幸福な人生を謳歌できる、良き人生のパートナーとなれます』」

「じ、人生のパートナーってそんな…」

「『今後の展開は貴女しだい！ぜひ彼とこの関係性を維持していき  
るよう、頑張ってください。』」

「そ、そう…頑張ってみよう、かな…」

「以上、『相性占い ペット編』より」

「…って、何の相性を占ってんのよおっ！？」

『ぎゃあああああっ！？』

美波が明久と羊一を同時にアイアンクローをきめる。

「み、美波！？なんでそんなに怒ってるのさ！？」

「そ、そうだ！最高相性で良かったじゃ、ちょ、頭が割れる！中身出るっ！？」

ギリギリと音をたてて締まっていく二人の頭。

明久の頭はもちろん、羊一も気絶しない程度に強烈な痛みを与えられている。

「ぐ、ぐぐ…あ、明久…どうにか…しろ…」

「え、ええと…そ、そうだ！美波！」

明久はこの状況を打開するため、最後の切り札を切る。

「ちなみに、美波はチンパンジーと相性が特に良いらしいよ！」

「……………（ピシ）」

美波の中から何かにヒビが入る音がした。



「え、ちよ、美波？どんどん力が強く、な、痛い痛い痛い痛いっ！？ま、まっ、この力はまず、美波！頭蓋骨がギシギシいって、待つて待つて待つて美波！羊一が隣でビクンビクンっしてしてるんだけど！？待つて！本当に、いくら僕らでも、死んじゃ！？」

…パキユッ！！

こうして、何か固いものが砕かれたような音が二つ、暗幕の中に響いたのだった…

………

暗幕の中での惨劇から数分後…

「…吉井君も、黒峰君も…まったく、もう…」

「…ですう…」

暗幕の前で瑞希と葉月の二人がため息をついていた。

あの後、羊一と明久はその場に放置され、今も床に転がっている。

保健室に連絡したが、ドアに『本日閉店！』と力強い字体で書かれた紙が張ってあり、診療を拒否されたためだ。

保健医の怒りをおさめるにはもう少し時間がかかりそうなため、しばらくそのままだろう。

「バカなお兄ちゃんも、ひ弱なお兄ちゃんもダメダメです！」

「ですね…」

葉月の言葉に力無く笑いながら言う瑞希。

さすがの彼女でもアレはフォローできないらしい。

「アレはあの二人の魅力…とも言えるかもしれませんが」

「でも、やり過ぎは良くありません！」

「そうですねえ…」

瑞希はもう一度ため息をついた後、周りを見回し、

「あれ？美波ちゃんは？」

「お姉ちゃんなら手を洗ってますよ」

「そうですか。ん〜」

瑞希は少し考えるように宙に視線をやった後…

「それじゃあ、美波ちゃんが帰ってきたら三人で二人を起こしてあげましょうか」

「わかりました！葉月も頑張ります！」

葉月が手を挙げて元気に言う。

それを見て瑞希は優しく微笑んだ。

『アイツか…?』

『ああ…間違いねえ……写真の通りだ……』

後ろに近づくと黒い気配には気がつかず…

### 第三十二問（後書き）

こんな感じですよ。

…結局、占いしてなくね？

という声が聞こえるような気がしますが、気にしない方向で（汗）…

ではまた…早めに次話が出来るように頑張ります…

できたら次も読んでやってください。

第三十三問（前書き）

またまた遅くなりました。

とりあえずどうぞ

### 第三十三問

「……ん、兄ちゃん、兄ちゃんよお」

「……んん……？」

羊一は体に小さな揺れを感じて意識が覚醒を始める。

誰かが自分呼びながら体を揺すっているようだ。

「んだよ…誰だ〜」

まだ重たいまぶたを必死にこじ開け、目を開ける。

「よお！兄ちゃん！気づいたか」

目の前には見知らぬオッサンの顔のどアップ。

「どうるあぁっ！？」

ゴスウツ！！

「おぶっ！？」

思わずオッサンの脇腹にダイレクトアタック。

それが思いの他キレイに決まったらしく、地面にはいつくばり悶え苦しむオッサン。

「まったく、何だこのオッサン…他の奴らは何をやってんだ？」

羊一は苦しむオッサンを横目に立ち上がり周りを見回す。

周りは真っ暗で、何も見えない。

これまた、見慣れぬ景色。

「……………いや？」

何だかどこかで見たとある気がする…



「…デジャヴユ？」

言ってから即座に否定する。

これはそんなものじゃない。

自分は確かにここを知っている。

確かにここに来たことがある！

羊一は嫌な汗をかきながら相変わらず地面にはいつくばるオッサンを見た。

痩せた体に何故か作業着姿のオッサンがピクピクと痙攣している。

羊一は嫌な予感に吹き出る汗を感じながら質問する。

「あ、あの…つかぬ事をお聞きしますが………ここ、何処ですか？」

オッサンは痙攣を続ける体を横たえたまま答える。

「え…地獄、だけど？」

.....

「だらっしやあぁ!?!」

羊一は床から飛び起きた。

「おお、起きたか羊一」

目の前には見知っている雄二の顔のどアップ。

「どうるあぁあっ!?!」

ドスウツ!!

「おぶふうっ!?!」

思わず雄二の脇腹にシールドブレイク。

思いの他威力が上がっていたらしく床に倒れ、悶え苦しむ雄二。

「す、スマネエな雄二…オッサンが現世にまで追っかけて来たのか  
と違って思わず…」

「な、何を訳のわからねえ、ことを…」

ピクピクと痙攣しながら言う雄二。

その様子はさながら砂浜にうちあげられた軟体動物のようだ。

「それはそうと…何かあったんか？」

「……………（コクコク）」

羊一はヒクヒクしている雄二を無視して横にいたムツツリー二に事情を聞くことにした。

「…姫路と島田と秀吉、それに島田の妹がさらわれた」

「っ!?!?」

羊一は目を見開き驚く。

しかしその驚きの原因はムツツリー二達とは別のところにあった。

『どづいうことだ！？教頭との約束はどうなった？』

羊一は青ざめて、その場に立ち尽くす。

羊一の心境には気づかずにムツツリー二は羊一を急かすように言う。

「…四人の監禁場所は把握している。明久も向かってる。俺達も早く…！」

「あ、ああ…」

ムツツリー二も焦っているのか普段よりも口数が多い。

羊一はその声に引っ張られるようにして先に走り始めたムツツリー二に続き、走り出す…

「…あ、あいつら…いつか、クロス…」

未だ床にはいつくばる雄二を残して…

.....  
「このまま、まっすぐ行ったところにある倉庫……」

「そこに、四人が、いるのか……」

ムツツリーニの言葉に羊一は走って荒くなった息を整え、答える。

教室から走り始めた二人は途中から追いついてきた雄二と合流。

そして今、三人は人気の無いグラウンドの隅……そこにある倉庫の前にいた。

「本来なら体育で使う用具やらを入れとく倉庫だが……監禁場所としてはもってこいだな」

雄二が倉庫の外観を眺めながら呟く。

と、雄二は何かに気づいたように倉庫を指差す。

「おい！あそこ」

校庭の土埃で薄汚れた体育倉庫…

その重そうな入口の扉が少し開いていた。

「…明久の姿が見えない」

「まさかアイツ…」

「入口に近づくぞ！」

こっそりと、しかし出来るだけ急いでそこに近づくと三人。

と、倉庫の入口に近くなるにつれ、中が騒がしいことに気づいた。

『…クソ！この…』

『…の野郎！』

何人かの人の争う声。

何か大きな物が倒れるような音。

「どうやら…中はすでに修羅場っぽいな」

「クソ！あのバカ！先走りやがって…ムツツリーニ！サポート頼む」

「……（コク）！」

雄二がムツツリーニと共に中へ突っ込んでいく。

そして羊一が一人残された。

「…あの中に突っ込んだら、どうなるかわかったもんじゃねえな…」

羊一はそう呟くと倉庫の側面に回りこむ。

「え〜と…ああ、あったあった」

羊一は目的の物を見つけてニヤリと笑みを浮かべた。

その視線の先には格子付きの窓。

羊一はその窓に近づくと格子に折れてない方の手をかけ、

「よっこら、しょー！」

力を込めて引っ張る。

と、

ガコツ！

格子が粹ごと外れた。

「前に脅し…話をしたヤツに聞いてた『体育倉庫は窓から侵入できる』って情報がこんなところで役立つとは、ね」

羊一は窓に手をかけるとカラカラと開く。

どつちら窓の鍵も壊れているようだ。

羊一は開いた窓から中に侵入を果たす。



途端に周りが喧騒に包まれる。

「チクシヨオ!」「何だてめ、げぶっ!」「あ、雄二!遅いよ!何やってんの!」「うるせえ!こちとら脇腹に一発喰らってんだ!」

「あゝ…あつちから入んなくて正解だったわ…」

羊一は「さてと」とその光景から目を離して周りを見回す。

「…よ、羊一か…?」

「と、秀吉。大丈夫か?」

羊一の見回した先にチャイナドレス姿の秀吉が縄でぐるぐるにされて床に転がされていた。

「ふ、ふえ!?!」

「黒峰君!?!」

「ちよつと黒峰!何がどうなってんの?」

傍らには「こちらは縛られていない瑞希や美波、葉月の三人の姿もあった。」

「……なんでお前だけ縛られてんだ？」

「姉上の縄が残っておっての」

「？ 何の話だ、それ」

「何の話とは……おお。そういえばあの時お主は倒れておったのじゃったな」

「……それはどういっ」

「っ！？てめえ！何やってやがる！」

羊一が秀吉を問いたださそうとした時、柄の悪い怒鳴り声が響く。

後ろを振り向くと案の定チンピラ風の男が肩を怒らせ、こちらを睨めつけていた。

「てめえもアイツらの仲間かあ？ふざけやがってえ…ぶっ殺してやる！」

「ちよ、！？たん、まあ！」

ブオン！

男の拳が空を切る。

羊一が咄嗟にしゃがみ込み、男のパンチを辛くも避けたためだ。

「くそ！避けんな！」

ブンっ！

しゃがんだ羊一を今度は男のローキックが襲う。

「無茶言う、な！？」

羊一はしゃがんだ姿勢から横に跳んで、襲いかかる足を避ける。

何とか避けたものの体勢は完全に崩れている。

これ以上は避けられない！

「はっ！ 追い詰めたぜえ！」

男が勝ち誇り、羊一に向けて拳を高く振り上げる。

「これで終わり」

「…終わりなのはお前」

ゴインツ！

「あがぁ！？」

悲鳴をあげて倒れ伏す男。

その後ろにはそこらで拾ったのだらう、バットを振り下ろした体勢の小柄な男…ムツツリーニがいた。

「ふひい…助かったぜムッツリーニ」

「……お安い御用」

「お礼に今度、良い本屋を紹介する」

「……………（グッ）！」

ムッツリーニが無言で勝利のガッツポーズ。

羊一の紹介する本屋はその手のマニア垂涎のお宝が眠る本屋ばかりらしい。

その店の情報を得るために幾人も命懸けの抗争を繰り広げているとかいないとか…

それを考えるとムッツリーニの喜びもわからなくもないのかもしれない…

その証拠に…

「な、何だつて！？その情報、僕にも詳しく！」

雄二と共にチンピラとやりあってた明久が食いついた。

「いや…何でお前に教えないといけないんだよ」

「……………同感」

「僕も保健の教科書が欲しい！（仲間同士で情報を共有するのは当然じゃないか！）」

「明久…建前と本心が逆転してんぞ」

「はっ!?!」

「……………明久は正直者」

「ムツツリーニ！そんな優しい瞳で僕を見ないで！」

明久がムツツリーニの生温かい視線から逃れるようにしゃがみ込む。

「ちょっと、アキ！今の発言、どついう意味よ!?!」

「そ、そうですね！詳しい説明を求めます！」

「バカなお兄ちゃんのバカ！」

そんな明久に聞き捨てならない話を聞いた瑞希達が詰め寄り始めた。

「フハハハ！良いストレス発散だな！生まれたことを後悔させてやるぜ！」

そんな修羅場の向こうでは雄二が笑いながらチンピラ共を相手に溜まったストレスを発散させている。

「…むう…とりあえず…そろそろこの縄を解いて貰えるとありがたいのじゃが…」

存在を忘れられ未だに縄でぐるぐるのままの秀吉のつぶやきを聞く者はこの場にはまだいない…





第三十三問（後書き）

こんな感じですよ。

久しぶりでキャラクターの口調とか忘れてる（泣）

できたら次も読んでやってください。

第三十四問（前書き）

とらまはです。

とらまはずとらまは。

## 第三十四問

「雄二、僕らがピンチだったのに随分と遅かったじゃないか！」

「ふざけんな！お前が勝手に突っ込んでったんじゃねえか！」

文月学園のとある廊下。そこを歩く雄二とボロボロになった明久はお互いを激しく罵りあっていた。

瑞希達の誘拐事件を悪鬼羅刹の如く暴れ回ったり、救出対象であるはずの少女達に襲われたりしつつも、解決してから15分程の時間がたった。

ムツリーニを護衛として、瑞希達が念のため保健室に行くのを見届けた後、雄二、明久、羊一の三人は自分達の教室を目指し、歩いていたのだった。

「まあまあ…落ち着きなさいよお二人さん」

残った羊一はそう言って、二人の喧嘩に割って入る。

二人の緩衝材となり、喧嘩を止めようと考えたようだ。

「うるせえよ、羊一！そもそもお前が俺の脇腹に一発ぶち込んだのが原因だろうが！」

「ああ！？責任転嫁をするんじゃないやねえよ！」

「わざわざ起こしてもらった相手にたいしての対応じゃねえ！」

「起きぬけにお前のもっさりフェイスが目の前にあるなんて恐怖体験すりゃあ誰だってああいう対応をするだろ！」

「俺の顔面はホラー映画か何かか！？」

「そつだよ！僕が今ボロボロになってる原因だって元は羊一が妙な情報で姫路さん達を怒らせたからじゃないか！」

『いや、あれはお前の責任だろう』

「何で僕の意見を否定する時だけそんなに協力的なんだ！？」

「…どつちら羊一は緩衝材ではなく、油…否、ガソリンであつたらしい。」

そのように、羊一、明久、雄二の三人が罵りあいながら廊下を歩く。

と、羊一が何かを思い出したように罵りを止め、顎に手をやって「むう…」と考え事を始めた。

「？ どうしたのさ、羊一」

「何か気になることでもあるのか？」

羊一の様子に明久と雄二も怪訝な顔をして、喧嘩を止めた。

「ん？ いや、まあ… 大したことじゃないんだが…」

羊一は首を捻りながら胸に抱えた一つの疑問を吐き出す。

「さつき秀吉のヤツが『姉上との勝負』がどーたらこーたらって言うってたんだが… どういうことだ？」

羊一がちよつとした疑問を口に出した。

すると、明久は『何を言っているんだ』と言わんばかりに当然のよ

うに語る。

「どづいつことも何も、そのままだよ。さっき、僕と雄二がやった準決勝の話じゃない」

「…は？」

羊一はほづけたように口を開けて固まった。

その様子に気づかず雄二が明久の言葉を補って続ける。

「ああ。お前は気絶してたから知らないだろうが、俺と明久は決勝戦に進出した…俺はイロイロなモノを失いかけたがな…」

「あのクスリは危なかったねえ…吐かせてなかったらどうなってたんだろ？まあ、霧島さんの仲が進んだみたいで良かったじゃない」

「明久…やはり今日という今日はお前をクロス…」

「ははは。雄二、そのネタはもうやったよ？」

殺意に目を血走らせた雄二と笑顔で、しかし目は笑っていない明久が至近距離での視線の応酬（メンチの切り合いとも言つ）に勤しむ中、羊一は一人焦っていた。

『嘘だろおお！？明久達のグループが準決勝終わってるってことは…俺のチームの方の予選も…？』

羊一は焦りで震える手を急いでポケットに突っ込み、携帯を取り出す。

画面には大量の着信履歴と、十件あまりのメールの表示…  
メールの差出人欄は全て『根本（苦笑）』の文字である。

『何やってんだよ！もう始まるぞ！？』

『早く連絡を寄越せ！』

『後5分！もう会場入り！早く！』

などの焦りに焦った様子の文面が続いていた。

『やつべえええっ！？完っ全に大遅刻じゃねえかああ！？』

「？ どうしたの、羊一。顔が紫色になってるよ！？」

「さっきの騒ぎでどっかに怪我でもしたのか！？」

「あ、ああ…大丈夫だ…何も、問題は無い。無問題だ、無問題。アハハはは」

羊一は大量の汗をかきながら、考えを巡らせる。

『するつてえと何か？俺はもう、不戦敗つてことか？この誘拐騒ぎも教頭の俺に対する制裁つてこと？つまり、全面的に俺、悪い？そうなの？そうなんですか？べらんめえ、ちくしょうめ！？』

混乱のあまりとどこどこでエセ江戸っ子口調になる羊一。

そんな羊一の様子にさらに焦りを募らせる明久と雄二。

そんな混迷の度合いを深める廊下に…



たつたらたつた、たつたらたつた、たつたらたつた

ラッパのマークの薬のCMに流れるような音楽が響き渡る。

「む、メールか」

羊一が胸ポケットから携帯を取り出し、片手で開く。

「…なんでよりによってあのチョイスなんだろう？」

「さあな…相変わらず良くわからない感性だな」

羊一は二人の声を無視し、携帯の画面に目を向ける。

『差出人 根本（苦笑）』

「……………（ガタガタ）」

「ああ！羊一がまた震え始めたよ、雄二！？」

「また何かの発作か！？」

『題名 大会の件について』

「……………（ビクン！ビクン！）」

「今度は痙攣し始めたよ！？」

「完全に末期的じゃねえか！とりあえず、保健室に……」

『本文 何とかした。準決勝に進出できた。』

「……………！！（ズツシャアアア！）」

「と思つたら携帯を天に掲げながら泣いて膝から崩れ落ちたよ！」

「何がしたいんだよ、アイツは！？」

雄二が何か叫んでいたが、膝から崩れ落ち、感動でむせび泣く今の羊一の耳にはただの雑音でしかなかった。

『うおおおっ！？始めて、アイツがいて良かったと思ったぜえ！』

心配事が無くなり、一安心の羊一。

しかし…

「ん？」

羊一はハツとして、考え込む。

『…じゃあ教頭は何だって、俺との約束を破りやがった？』

顎に手を当て、思考に沈み込む羊一。

「ちょっと？どうしたのさ？」

「さつきから痙攣したり泣いたり考え込んだり…情緒不安定か？」

「ん？あ、ああ…いや、なんでもない」

「そう？何か、あったのかと思って…」

「ちょっと、携帯の着信音をダースベ　ダーの音楽にしようかと考えてただけさ」

「何でいきなり!?!」

「というか本当に何でそのチョイスなんだ?」

羊一達は話しながら教室目指して歩いて行く。

「随分と楽しそうですね」

後ろから声がした。

「何か良いことでもあったのですか?お話を伺ってみたいですな」

「あ、えつと教頭の…」

「竹原先生」

「どうも」

明久と雄二が振り向き、教頭と言葉を交わす。

「黒峰君も…どうも」

「……………」

「羊一？…どうしたの？」

羊一は顔をしかめ、警戒するように無言で一歩下がる。

「フフ…随分と嫌われたものですね…まあ、仕方のないことなのか  
もしれないですがね」

教頭はクククと笑いながら言う。

その顔はいつも見るような無表情ではない。

獲物を追い詰めたハイエナのような厭な笑みを浮かべていた。

「さて…私の趣向を懲らしたイベント…楽しんでいただけましたか？」

「それは、どういっ…」

「これだけ言ってもわかりませんか、貴方は？」

教頭は少し呆れたように顔をしかめ、言う。

「なるほど…他の先生方が言う吉井（馬）というのは君ですか」

「先生。僕は職員室でなんと呼ばれてるんですか？」

「そんなことはどうだっていいっ！」

羊一は明久の言葉にかぶらせるようにして叫んだ。

明久と雄二は驚き、黙り込む。

「やっぱり…さっきの誘拐騒ぎはアンタの差し金か…！」

「ええ。そうですよ」

教頭はなんでもないことのように平然と言う。

「！ てめえっ！！」

その様子に羊一は教頭のネクタイを掴み、廊下の壁に押し付ける。

「俺との約束はどうなった！？てめえの目的には協力しただろ！？」

羊一の剣幕に教頭はしかし、薄く笑ったまま何も語らない。

と…

「羊一…今の話って…」

羊一がハツとして振り向くと明久が呆然とした様子でこちらに目を向けていた。

「教頭先生がさっきの事件の黒幕……？羊一が教頭の目的に協力して……」

「あ……いや、それは……」

「ククク……黒峰君？何を躊躇うことがあります。彼らにも教えてあげればいいでしょう」

教頭は胸倉を掴まれながらも笑みを絶やさずに言った。

「貴方は私に協力している立場……つまりは私達の仲間である、と」

『！？』

教頭の言葉に二人が驚愕の表情を浮かべる。

「羊一……嘘、だよな……？」

「……………」



「羊一!!」

明久が羊一に詰め寄る。

しかし羊一は明久の視線から逃れるように目を逸らした。

「…本当…なんだね…」

「……………」

「…わかった。もういい!」

「あ……」

明久が背を向け、走り去る。

「チツ!おい、待て明久!」

雄二は迷ったように一度だけ羊一と明久を見比べた後、明久を追っ

て走り出した。

羊一は一瞬、呼び止めようとするかのように手をあげるが、諦めたように無言で下ろした。

「フフ…貴方達の友情も大したものではなかったようですね」

「さて…これでFクラスは最悪の精神状態。召喚大会にも多少なりとも影響があるでしょう」

教頭は呆然と立ち尽くす羊一の肩に手をかけ、言う。

「協力ありがとうございます…貴方も大会頑張ってください…大切な仲間、そして『彼女』のために、ね。フフ、アハハハッ！」

教頭はたまらずといったように笑いながら去っていった。

「……………」

後には無言で一人、立ち尽くす羊一。

「…なんで…」

羊一がボソリと呟く。

「…なんでいつも…いつも、みんな、ボクの大切な人を、大切な場所を、傷付けるの…」

羊一の声は普段ではありえない程に弱々しい。

…それは、まるで小学校時代、イジメを受け、泣いてばかりいた小さい頃の彼のように…

しかし、あの時の彼とは決定的に違うことが一つ、あった。

「…やらせない…」

今の彼にはあの時なかった『力』がある。

何も出来ず、大切な人がただ傷付けられるのを見てきただけの自分ではない。

「これ以上…やらせない…！」

羊一は顔を上げ、軋んだような声を出した。

その目には力強い光があった…

「俺の大切なものを…傷付けるものは…何であることも…」

「…存在全てを…否定しつくしてやる…！！！」

…その光の中に、狂気の気配を纏わせながら…

### 第三十四問（後書き）

こんな感じですよ。

羊一君がダークサイドに落ちました…

イロイロ詰め込み過ぎたかな…？

まあ、後回しにしてまた長引くのも何ですし。

次も出来たら読んでやってください。

第三十五問（前書き）

どうもです。

自分の部屋のストーブがぶっこわれまして…酷く寒い…

とりあえずどうぞ

### 第三十五問

「何かの間違いなのじゃー!」

秀吉はそう言って、立ち上がった。

ここは清涼祭の間、Fクラスの備品を置いておくための倉庫代わりの教室である。

Fクラス教室から撤去された古ぼけた教卓やら、ひらべつたい座布団やら、使い古された拷問機具やらの真ん中で秀吉は顔を赤くして立っている。

「羊一がそのようなこと…有り得ぬのじゃー!」

「落ち着けって、秀吉。そんな叫んでちゃ、話し合えるものも話し合えなくなるだろ」

そう叫ぶ秀吉に敷かれた座布団の上にあぐらをかいた雄二が諭すように言う。

「…む……………すまぬ…」

雄二の言葉に秀吉はやや不服そうではあるが、引き下がる。

その様子を見た雄二は一つため息をついてから中断した話の続きを始めた。

「秀吉には悪いが、ここまでの話は全部本当のことだ。教頭が姫路達の誘拐事件の黒幕だって話も…羊一が教頭に協力してるって話も、な」

「…それは…」

「……………(ポン)」

諦めきれず、否定しようとした秀吉の肩をムツツリーニが叩く。

「……………すでに確認は取れてる…羊一と教頭の協力関係は確かに事実」

そう言うムツツリーニの手には小さなデータディスクのようなものが握られていた。

「……………羊一と教頭の会話を録音出来ていた…これがその会話の内容」



ムツツリーニはディスクを機械に差し込み、再生させた。

スピーカーからは二人の声が聴こえる。

感度が良くないようだとところどころにノイズがまじったり、音が途切れたりしていたが、その声は確かに…

「教頭と……羊一……」

「これでわかったか、秀吉？」

「…ぬ……ぬう……」

秀吉は悔しげに黙り込む。

信じ難いことではあるが、羊一と長い付き合いである彼自身の耳でもその声は聞き覚えのある幼なじみのものであった。

しかし、やはり腑に落ちない。

秀吉は羊一の顔を思い浮かべる。

あの羊一が雄二達を裏切っていた？

…やはり納得がいかない！

仮にそれが事実であるとしても、あの幼なじみがただでそんなことをするとも思えない…

何かあるはず、何かが…！

秀吉はその疑問を雄二にぶつけようと顔を上げる。

…が

「無駄だ、秀吉」

「っ…」

雄二が先を塞ぐようにして、言葉を遮った。

「『あの羊一がただでこんなことをするとは思えない。何か理由があるはず』……だろ？」

「……………」

「そんなことは俺だって考えた…ただ、そうだとっても、だ」

雄二は一旦間をおき、覚悟を決めたように言う。

「Fクラス代表の立場としてはクラスの害になる可能性は潰しとかないといけない」

「……………」

「…アイツは俺達の『敵』と認識するしかない…これからは積極的な接触は控える。良いな、秀吉」

雄二はそう言うと立ち上がり、部屋から出ていった。

「……………」

後には無言で立ち尽くす秀吉と、

「……み、見えっ！？見えっ！？」

部屋の隅の壁にはお擦りするような格好でゴソゴソとじじめくムツリーニが残された…

………て！？

「お主は何をやっておるのじゃ！？」

秀吉がムツツリーニの思わぬ行動に目を丸くして声を上げる。  
その声に驚いたようにしてムツツリーニは顔を上げた。

その頬にはしっかりと壁の跡が刻まれている。

「この一大事にお主は何を……む？」

言葉の途中で秀吉は気づく。

今の今までムツツリーニがいた壁には老朽化が原因なのか、小さな穴が空いていたのだった。

確かこの壁の向こうは他クラスが倉庫代わりに使っている教室のは

ず。

ムツツリーニは何故、この穴を必死に覗こうとしていたのか…

と、その穴から向こうの声が聴こえてくる。

『……………！そうなんだ！』

『そうなのよ。だから…』

『へえ〜。大変〜』

聴こえづらいが声の感じからして女子である。

どうやら材料か何かの補充のためにやって来たらしい。

秀吉は穴を観察する。

穴は比較的低い場所にあった。

この穴から覗けば壁向こうの景色はさぞや低いアングルのものになるであろう…

秀吉はムツリーニに目を向ける。

ムツリーニはその動きに合わせて視線をそらす。

「ムツリーニ…お主…覗こうとしておったのか」

「……………っ!?(ブンブン!)」

ムツリーニは首を横に振って否定するが、先程の態度では自由したも同然である。

と、秀吉が呆れ顔でムツリーニに話しかけようとした瞬間…

《タツタラ、タラララ、タッタ、パフ!タツタラ…》

なんとも気の抜ける音楽が響く。

音源は壁向こう…件の三人の携帯らしかった。

「何なのじゃ?コレは?」

「……………」

秀吉の疑問にムツツリー二も首を傾げる。

聞き覚え自体は二人ともあったのだが、それが何を意味するのか、ピンとこない。

が、壁向こうはそうではなかったらしい。

『っ!?!?』

『な、何で今更コレが!?!?』

『と、とにかく内容を確認!』

そして、しばらく無言の時間が過ぎた後…

『…ゴメン…私、やらなきゃいけないことが出来た…』

『…分かってる。あなたもでしょ?』

『…うん。多分…』

小さな声でそう言い合った後、

《ガラツ！！ダダダダダダ》

隣から大きな音がした。

秀吉とムツツリーニが部屋の扉を開け、廊下を覗くと、開けっ放しになった扉と、猛スピードで遠ざかる三つの人影が見えた。

「…何なのじゃ、アレは？」

「……さあ？」

秀吉とムツツリーニは顔を見合わせ、首を傾げたのだった。

……

「ですから、ちょっとで良いんで、行きませんか？」



「はあ……」

夏月は相手の言葉に気の無い返事を返す。

ここは文月学園保健室。

今、この保健室はかなり特別な状況におかれていた。

保健室に保健の教諭である彼女が居るのは特別なことではない。

特別なのは彼女の周りの環境である。

清涼祭の真っ最中であるはずの保健室は只今、満員御礼であった。

曲がりなりにも学園祭の最中に満員になるべき場所とは思えない。

しかし右を見ても、左を見ても人、ひと、ヒト。

しかも大抵が野郎である。

その野郎共が椅子に座る夏月に各々の視線を向けている。

『お世辞にも《快適な環境》とは言えないな…』

むしろ、圧倒的に不快極まる環境である。

何でこんな体感温度が三度くらい上がりそうな状況になったのか…

まあ、簡単に言えば暇を持て余した野郎共が怪我やら何やらにかこつけてやって来た結果である。

大抵はちよつとした擦り傷や、切り傷で治療自体は（治療とも言えないような作業だが…）一瞬で終わる。

だが、治療が終わった後も『まだ痛い』だの『ちよつとクラクラする』だのと理由を付けて帰らない。

だけならまだしも、『この後、一緒に清涼祭まわらない？』的な感じで夏月を誘ってくる始末…

『しかも…』

夏月はもう何回目になるかわからないため息をついた。

それを見た目の前の男がさらに話しかけてくる。

「先生もこんなところにずっといたんじゃないや退屈でしょう？だからちよつと一緒に息抜きしませんか？」

『「こんなところ」に私を縛り付けてるのはお前のような輩なんだが、な…』

目の前の男はこの学校の教師だ。

名前は………忘れた。

何か最初にペラペラと言っていた気もするが、聞き流していたので記憶の片隅にもない。

まあ、普段からあまり関わったことのない人物だし、これからもそれは変わらないであろう。

要は夏月にとっては限りなくどうでもいい人間というわけである。

しかし、そうは言っても同僚……で患者。ひび

ぶん殴ってほつり出す訳にもいかないし…

仕方ないので先程からずっと話を聞き流しているところだった。

「行きましようよ。先生も暇でしょう？」

『暇じゃないだろうどう見ても…お前の目は本当に機能しているのか？それとも脳の方か？』

「どうです？患者を診てばかりでは疲れるでしょう？」

『しかし良く喋る口だ…解剖でもしたらその口の仕組みも解明出来るのかな？』

「なかなか面白い出し物もあるみたいですし」

『お前を面白い出し物みたいな身体にしてやるつか…』

…かなりイライラしているみたいだが…

『あゝ…ダメだ…ぶん殴つてもあの薬なら記憶も奪えるのかな…でもアレはイロイロなモノにひっかかるしなあ…』

夏月がイロイロなものを乗り越えそうになったその時…

《タッタラ、タラララ、タッタ、パフ！タッタラ…》

『ビクンッ！…！』

「うお」

夏月が驚いて声を出す。

目の前の男だけでなく周りにいた何人かの野郎共も一緒に跳び跳ねたのだ。

「…どうしかったですか？」

「あ！？いえ、何でもないです！」

男は慌てたように携帯を開き、見る見る顔が青ざめていったと思つと…

「す、すみません！ちょっと用事を思い出しました！それでは！」

「はあ…」

何人かの男達が慌てたようにして保健室から走り去っていった。

「…？何だ、アレは……」

夏月はその様子にただただ首を捻るのみであった。

……

「ふう…やれやれ…」

文月学園の一角…学園長室の大きなデスクでこの学園のトップ、藤堂カヲル学園長は書類から目を離し、ため息をついた。

学校が文化祭の最中であっても、学園長の仕事量は変わらない。

むしろ、開会式やら設備の承認やら来賓への挨拶やらで普段よりも仕事が増えているくらいだ。

それだけでも疲れるというのに…

「教頭のヤツ…どうやら随分と好きにやってくれてるようだね…」

学園長は苛立たしげに呟く。

今まで学園長は独自の方法でそれとなく情報を収集し続けていた。

そうして相手の出方を観察していたのだが…

「まさか、生徒に手を出すとはね…」

学園長は悔しげに唇を噛む。

まさか相手がそこまで追い詰められているとは思わなかった。  
完全に見誤った…

学園長はしばし、目を閉じて考えた後、

「…やはり…アイツらにはしっかりと説明はしないといけないかね」

決心したように呟き、椅子から立ち上がるつもりとした…

その時

コンコン…

「？ 誰だい、こんな時に」

学園長が立ち上がりかけた姿勢から椅子に座り直し、来客が入って来るのを待つ。

その視線の先で扉がゆっくりと開かれた。

扉の向こうには制服を着た人影。



「アンタは……」

学園長が何かを言おうと口を開こうとしたのを遮るようにして、人影は慇懃に頭を下げて名乗る。

「どうも。二年F組の黒峰羊一です」

人影：羊一はそう名乗ったあと、顔を上げた。

「学園長……ちょっと頼みたいことがあるんですが」

羊一の顔には暗い笑顔が浮かんでいた……

第三十五問（後書き）

こんな感じですよ。

なんか視点やら場所やら跳びまくってわかりにくいことだ...

出来たら次も読んでやってくださいませ。

第三十六問（前書き）

どうもです。

正月が過ぎてかなり経ちますが、今更ながら…

今年もできたら、よろしくお願いします。

### 第三十六問

「遅いんだよ、黒峰！お前：次の試合まであと10分しか時間ないのに今までどこほつつき歩いてたんだ！？」

「ん〜…妖怪とちょっとしたランデブー？」

「…全く意味がわからねえ…」

「まま…君みたいなのは一生関係ない話だから、気にすんなって」

「…お前、ストレスで俺を殺そうとでも考えてんのか…？」

「そんなこと考えてないよ〜。これはただの、や・つ・あ・た・り  
」

「より悪質じゃねえか!？」

根本は目の前で伸びをしている羊一に向かって叫んだ。

しかし、とうの本人はそんな根本のことなど気にも止めないといった具合に鼻歌など歌っている。

ここは、清涼祭の目玉イベント…召喚大会のステージ裏の空間。

羊一と根本の二人はそこで本日最後の対戦…BグループとCグループの勝ち残り同士が闘う、準決勝の始まりを今やおそしと待っていた。

対戦相手はこの大会には珍しい三年生コンビ…すなわち、常夏の二人である。

先程、大会の運営委員の生徒が人数確認に来た時にはこちらをニヤニヤと見下したような視線で見っていた。

根本は二人に初めて会ったのだが、成る程、確かに嫌味な感じな二人組だった。

実際、去り際に二、三個の嫌味をぶつけてきていた。

『あれが教頭の手足になって働いてるって奴らか…そんな奴らと戦って、大丈夫なのか、俺？教頭に目、付けられたりしないよな？』

と、根本は一人、『何を今更…』と言われそうな事について悶々

と悩んでいた。

しかし…しかし、だ。

それも心配と言えば心配だったが…それよりも気掛かりなことが  
つ根本にはあった。

『黒峰のやつ…何を考えてるんだ？』

そう考えながらそれとなく羊一を観察する。

「  
」

観察対象は鼻歌を歌いながら、用意された椅子に座って足をブラブ  
ラとさせている。

『…おかしい…』

むやみやたらとテンションが高い。

先程、常夏コンビに嫌味を言われた時も何も言わず、ただ黙ってい

るだけだったが…

『確実に何か企んでやがる…』

根本には核心があつた。

かつて羊一の敵に回り、巨大な心の傷と引き換えに多くのものを失った彼には今の羊一の様子に見覚えがあつたのだ。

『あれは…俺を陥れた時の雰囲気と、同じだ…人を蹴落とす気満々の目だ…』

と、根本が嫌な予感に背筋を凍らせていると…

「準決勝に出場する選手の方！出番ですので、集まってください！」

運営委員の声が響く。

「お…じゃ、行きますかね」

「あ、ああ…」

根本はステージに向かって歩き出した。

と、

ガッ！

「ぬぁ！？」

羊一がいきなり首筋を引っ張った為、根本は後ろに反り返るような体勢になってしまった。

「て、てめえ！？いったい何だつて、」

根本がいい加減我慢の限界とばかりに首筋の手を振り払おうとした瞬間、

「――」

「…何？」



羊一が根本の耳元で何か呟くと根本の表情が変わった。

「…それはマジで言ってるんだろうな」

「……………（コクリ）」

根本の質問に短く頷く羊一。

その様子に根本は少し考えて、

「よし…黒峰、てめえの作戦に乗ってやるよ」

ニヤリと笑って答えたのだった。

……………

『お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います  
』！』

羊一達が到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。

『出場選手の入場です！』

その声と共に、羊一達四人はステージに上がり、中央で相對する。

「よう黒峰。裏じゃあ随分とご機嫌だったじゃねえか。何か良いことでもあったかよ?」

「おいおい。そんなわけあるかよ。なんせ、コイツは自分のお仲間に嫌われちまつたんだからなあ」

常夏の片割れ、坊主頭が子馬鹿にしたような態度で挑発し、モヒカシがそれに便乗する。

二人とも相手を苛立たせる挑発が実に上手い。

しかし、

「いやだって…ぷ…ククク…」

「? 何がおかしい」

いかんせん、相手が悪かったと言わざるを得ない。

「あゝすいませんね。お二人さんの衝撃的キスシーンを思い出してちやつて…クク、アハハハツ！だ、駄目だ…ツボに入った…」

『なあ！？』

羊一がいきなり爆笑しながら言葉の爆弾を投下した。

『…え？二人は、そんな関係なんですか…？』

近くでマイクを使ってほぼ満席といった状態の来場者に向かって喋っていた先生が、それを中断して言う。

その表情はあからさまに引き攣っている。

『！？ いや、ちが』

「まあまあ先生。良いじゃありませんか！」

否定しようとした常夏コンビの言葉を今度は根本が絶妙なタイミングで遮った。

「好みは人それぞれなんですから。それよりも、親友だった二人がその枠を超えて、新しい一歩を踏み出したのだから……ここは、ただ、静かに、祝福してあげましょう……」

『そ、そうです、ね？』

『ちよ！？』

立て板に水といった感じで喋り続け、二人に話す機会を与えない。

さらに、

「……そうか！そうだな！俺が間違ってたよ、根本君！確かに、愛の形はイロイロだもんな！……俺には理解出来ねえけど（ボソ）」

「まったくもってその通りだよ、黒峰君！きっと二人ならイバラの道を超えて素晴らしい愛を育むだろうさ！……俺にも理解出来ねえけど（ボソ）」

『確かに…そうかも、ですな…：私にも理解出来ないけど（ボン）』

コンビネーション口撃で相手の逃げ道を完全に封じ…

『せえーの…先輩方！未永く、お幸せにい！！』

朗らかに微笑みながらの拍手×2でフィニッシュ。

「や、止める！？拍手を止める！？」

「あと、その妙に生暖かい視線と表情もだ！」

常夏コンビが否定しようと躍起になって自分達の潔白を叫ぶ。

しかし、時すでに遅し…

『先生、最近の子供達の考え方が理解できません…これが世代の差というヤツでしょうか…』

『え〜マジい…あの二人が？』

『そうだったのか…どうりでいつも一緒にいると思ったぜ…』

『成る程：密かに二人で愛を育んでたつてことか……何か気分悪く  
なってきた……』

『ちよつと！失礼でしょ？二人は本気で愛しあ、て……うえ……』

『ママー。「びーえる」ってなに〜？あの人達のこと〜？』

『シッ！見ちゃいけません！』

試合が始まってもないのに、会場には妙な熱気が出て、ザワザワ  
という話し声がいつまでもしている。

「て、……てめえらあつ……！」

「もう我慢ならねえ！ぶつ殺してやる……！」

常夏コンビが怒りを乗り越して、殺気の籠った目で睨みつけてくる。

しかし、羊一はその視線を真つすぐに受け止め、

「ふん……やれるもんならやってみな………BL先輩」

ほくそ笑みながら最後の爆弾に火を付けた。

『……………（ブチィッ！！）』

常夏の二人の頭から何かが引きちぎれる音が響き渡った。

『絶・対！！殺す！ サモンツ！！』

『サモンツ！！』

四人の声が、ステージ上にこだました…

### 第三十六問（後書き）

こんな感じですよ。

予想外に長くなったので戦闘は次回にしました。

次で常夏とケリを付けられたら良いな

できたら次も読んでやってください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9105r/>

---

バカとテストと虚弱体質～Fクラスで生きぬく方法～

2012年1月6日09時45分発行